Fate/zero 混沌より這い寄る者たち

アイニ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

連続殺人鬼、雨生龍之介は実家の蔵にあった魔道書を用いた儀式殺人により、サーヴァントを召喚する。その呼び出されたキャスターがフランスの軍師でなく、這い寄る混沌そのものであった。……という内容で進むお話。　追記：この小説に出てくる這い寄る混沌はオリジナルとなります。　ナイアさんやニャル子さんではないことをここに明記します。まぎらわしいタイトルで申し訳ありません（汗）

目次

000 ―― 1
001 ―― 5
002 ―― 14
キャスター陣営　データ　※画像追加 ―― 22
003 ―― 26
004 ―― 34
005 ―― 43
006 ―― 50
007 ―― 57
008 ―― 65
009 ―― 73
010 ―― 80
011 ―― 88
012 ―― 94
013 ―― 100
014 ―― 108
015 ―― 115
ネフレン＝カ　データ ―― 122
016 ―― 128
017 ―― 136
018 ―― 143
019 ―― 152
020 ―― 157

０００

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ……っと」
魔道書に書かれた通りに唱えながら、彼は爪先を用いて図形を描く。
陣を描く塗料は赤黒く、只でさえ異様な図形は暗闇の中で不気味さを醸し出していた。
「繰り返す度に四度……あれ、五度？」
髪を明るい色に染めた青年は、ページの内容と先ほどの詠唱との違いを比べ、首を傾げる。
彼は改めて先ほどの詠唱を五度繰り返し、これで問題ないと、床の図形を指差した。
青年はふと視線を、真っ暗な部屋の中で唯一の光源であるテレビへ向ける。
現在流されているのはニュース番組。今テレビに映っている女性ニュースキャスターが読み上げているのは、最近巷で噂の連続殺人事件だ。
その内容を聞きながら、彼は目の前にあるソファの背へと凭れかかる。
「ちょっとハメを外し過ぎたかなー？」
青年がソファに凭れた拍子に、腰掛けていた男性がバランスを崩す。
受身も何もとらずに崩れ落ちた男。その後頭部には孔が空き、そこから中身が覗き見えていた。恐怖で見開かれた虚ろな眼球は、同じく亡くなった妻の姿を映している。
青年――――雨生龍之介は、今ニュースに出た連続殺人鬼その人だった。
死とは何かを求める芸術家気質の彼は、最近マンネリズムを覚えて、少しばかり趣向を変えていたのだ。
現在行っているのは儀式殺人。家の蔵にあった魔道書らしきものに書かれた内容を用いて、今の惨劇を生み出していた。

けど、これは今回で最後にしよう。魔方陣を描くのだから、些か目立つ。
そう思いながらなんとなく、テーブルの上に置かれた本に手を伸ばし、それをパラパラと捲ってみる。
その本はアメリカ発祥の娯楽小説だ。ジャンルはコズミック・ホラー。宇宙からやってきた人外による恐怖を描いたものだが、龍之介としてはあまり面白みを感じない。リアルな死を感じ取れないからだろう。
少し読んだものの、途中で飽きた。後ろへとぞんざいに投げられた本は、そのページを開いたまま魔方陣の上に落ちる。当然ページに血が付着するが、龍之介が知ったことではない。
再び視線を動かし、龍之介は縛って転がした少年に意識を向ける。
「悪魔って、本当にいると思うかい？　ぼうや」
軽薄な笑みを浮かべながら語りかけると、縛られた少年がビクリと身を震わせた。
問いかけに答えはない。ガムテープで口を塞いでいるから、呻くくらいしか出来ないだろう。涙はとうに枯れ果てて、失禁してズボンは濡れていた。
そんな少年の様子に唇を吊り上げながら、龍之介は語る。
「俺って巷ではさ、悪魔って言われてるんだよねー。でもそれってさぁ、もし本当に悪魔がいたら、ちょっとばかし失礼な話だよね？　そこんとこすっきりしなくてさぁ」
だから、男は素朴な疑問を口にする。
「チーッス！　雨生龍之介は悪魔であります！　……なぁんて、名乗っちゃって良いのかなーって」
どこかおどけた口調で言う、龍之介。
世間からすれば、彼の所業は悪魔でしかない。
だがしかし、龍之介は人間だ。母の胎から生まれて、母乳を与えられて育った、赤い血の流れる人間だ。
そんな自分が悪魔などと名乗るのは、本物の悪魔に対して失礼ではないだろうか？

「そしたら、こんなもの見つけちゃってさ」
笑いながら見せるのは、蔵にあった魔道書。
「ウチの土蔵にあった……古文書？みたいなもんなんだけど、どーもウチのご先祖、悪魔を呼び出す研究をしていたらしいんだよねー」
これが、儀式殺人の切っ掛けだ。
「そしたらさ、本物の悪魔がいるか、試してみるしかないじゃん？」
子供のような無邪気な笑みで、彼は言う。
そして、続ける。
「でも、もし万が一、本物の悪魔が出てきたら……なんの準備もなくただ茶飲み話だけ、ってのもマヌケな話だよねぇ」
龍之介は身動きの取れない少年に、語る。
「だからさ、ぼうや」
顔の前に手の置いて、ちょっとした頼み事をするように、
「もし本当の悪魔が出てきたら、一つ殺されてみてくれない？」
少年の死を、望んだ。
彼の言葉に目を見開いた少年は、塞がれた口で喚き、身動きの取れない体で懸命に暴れ始める。
そんな彼の様子が面白かったのか。龍之介は爆笑し、笑い声を上げた。
「はーっはははははっ!! 悪魔に殺されるって、どんな気分なんだろうねぇ！ 貴重な体験――――痛っ」
笑っていた龍之介は、唐突な痛みに顔をしかめる。
一体何かと思いながら痛む箇所――――右手の甲に視線を向ける。
「……なんだ、これ？」
しばし見つめた後、口から出たのは訝しげな声と言葉。
見つめる先には刺青のようなものがあった。暗闇でも分かる程赤々とした、血のような色合いの刻印。先ほどまで存在しなかった絡みあう三匹の蛇。それはまるで、最初からそこにあったかのように己を主張している。
刻印のデザインは、龍之介の美的センスに合っていた。中々ＣＯＯＬな紋章に満足する。

その瞬間、魔方陣から光が迸り、それが血生臭い部屋を満たした。
閉鎖された空間を、風が吹き荒れる。血で描かれた魔方陣は美しく妖艶な色を放ち、魔方陣の上に置かれた本から千切れたページが舞った。
「我は這い寄る混沌」
荒れ狂う風の中で、幼く高い声が明瞭に聞こえた。
「あるいは、月に吠ゆるもの」
次に聞こえたのは、しわがれた低い声だ。
「燃える三眼、暗きもの、貌のない黒きスフィンクス――――」
喋るたびに、声の色と質が変わる。
数人の人間が喋っているかのような、しかしひとりで喋っているとなんとなく分かる不思議な声。
その中で唯一変わっていないのは、その声が笑っていることだろうか。
「我は貌なきゆえに千の貌を持ち、狂気と混乱をもたらす使者」
風は止み、光は消えた。
それと共にするように現れたのは――――三つの目と黒い翼を持つもの。
闇の中で浮かび上がるような、七色の輝きを放つ透き通った長髪。対照的に肌は黒く、この世のものとは思えない程秀麗な貌に酷薄な笑みを浮かべている。
額にもあった常闇の目を芸術的な指先が撫でて閉ざせば、その下の眼窩に嵌った両の目だけが龍之介を見つめる。
左右で色を違う、宝石のような瞳。
血より濃く色鮮やかな真紅を放つ左目と、
夜闇に揺らぐ水面がごとく昏く蒼い右目。
あまりにも正反対にして同質の、悪逆と冒涜の色を宿した眼球を向けて、
「問おう――――我、この外なる神ナイアーラトテップをキャスターのクラスにて召喚せしは、汝なりや？」
左頬の紋章を歪めて嗤いながら、男でも女でもない邪神は問うた。

001

問われた龍之介は、現れた『悪魔』の姿に目を丸くした。
龍之介が想像していた悪魔は恐ろしく、おぞましい、血と死に飢えたようなＣＯＯＬな化け物だ。
だが実際に現れたのは、アラブの踊り子のような煌びやかな衣装を纏う、ちんまりとして可愛らしい中性的な子供である。
確かにその異様な色素と背に負った翼、額の眼などは人外っぽい。
しかし、悪魔というにはあまりにも……。
「どうしたんだい、人間。君も早く自己紹介しないか。名前が分からないと少し面倒だからさ」
まじまじと見つめているとクスリと嗤う悪魔が催促したので、龍之介も悪魔に倣って名乗り始める。
「えと、雨生龍之介っす。職業フリーター。趣味は人殺し全般。子供とか若い女とか好きです。最近は基本に戻って剃刀とかに凝ってます」
「剃刀か……良いねぇ。シンプルな物ほど、自分好みに変えるのが楽しい」
「あ、やっぱアンタもそう思う？」
同意を受け、龍之介はへらりと軽薄な笑みを浮かべた。
と、悪魔の視線が下方に向く。
何を考えているのか分からないオッドアイは、生贄役に置いていた少年と、二つの死体をじっと見つめている。
「龍之介、この子供は？」
「あ、忘れてた」
まさか本当に現れるとは思ってなかった悪魔の登場により、すっかり意識から消えてしまっていた。
「アンタのために用意したんだよ。早速、食べる？」
龍之介の何気ないような言葉に、少年は再び悲鳴を上げた。
色黒の悪魔は少年と死体を何度か見つめたあと、魔方陣から一歩踏み出す。

だが進む方向は少年のいる方ではない。向かう先にいるのは龍之介だ。
「ん？　どしたの、悪魔さ」
首を傾げながら言い終える前に、悪魔は何事かを唱えて彼の胸を突く。
途端、龍之介は言葉を失くし、愛嬌を感じさせる眼から正気の色が消えて胡乱になり、心ここにあらずといった状態になる。
術にちゃんと掛かったのを確認し終えた悪魔――――キャスターは、それからようやく少年の方へ歩を進める。
少しでもキャスターから離れようと少年はもがくが、それは功を成さず、数秒でキャスターが彼の前まで接近する。
もう終わりだ。死を覚悟して、少年は目を閉じた。
そんな少年の耳に届いたのは、ビリッ……という粘着質な何かを外すか破るような音。
「……？」
怪訝に思い、恐る恐る目を開く少年。
そんな彼の目に映ったのは、少年を拘束するガムテープを剥がすキャスターの姿だった。
拘束を外したキャスターは口を塞ぐガムテープも取り、少年の体に自由を与える。
己を戒めるものから解放された少年は、呼吸を整える。
「ねぇ、ぼうや」
高くも低くもない不思議な声を持つキャスターは、視線を二つの死体に投げかけながら、少年に尋ねる。
「もしお父さんとお母さんが生き返るとしたら、君はどうする？」
「え？」
「生き返らせて欲しい？　欲しくない？　どっちかな」
キャスターの言葉に、そんなことが出来るのかと、少年は驚愕する。
少年はまだ幼かったが、それでも死というものが何かを理解出来る年齢ではあった。死んでしまったものは、決して帰って来ないということも。

しかし、目の前に現れた美し過ぎる存在は、その不可能を可能に出来るという。とても信じられる話ではない。
だが、もしそれが本当だったならば。
「い、生き返って欲しい……」
ぽつりと答えて、少年は黒い翼の持ち主に縋る。
「お、お願いします……！　父さんと、母さんを、生き返らせてっ!!」
「良いよ」
懇願への答えは軽く、しかし奇跡のようなものだった。
美貌の悪魔は見蕩れるような笑みを湛えると、死体の方へと向かう。
男とも女ともつかぬそいつは龍之介にしたときと同じように、何事かを唱える。少年には、何を言っているのか、どういう意味の言葉なのか分からない。ただ、先ほどよりも少し長かった。
それを全て唱え終えたとき、死体の指がぴくりと動く。
少年はまさか、と思い見守っていると、
「う……？」
「一体、何が……」
二つの死体――――父と母が、起き上がった。
見れば、致命傷となっていた傷は跡形もなく消え去っており、二人は怪訝そうに異様な光景と化したリビングを見渡している。
生きている。
嘘でなく、冗談でなく。
本当に、生きている。
「う、うぅ……うぁぁぁあああああー……っ」
少年はぼろぼろと枯れたはずの涙を流し、生き返った両親へと駆け寄り、二人に抱きついた。
わんわんと大泣きする我が子にしばし怪訝にしていた二人だが、次第に記憶が蘇ったのだろう。ハッと息を呑んだ後、二人もまた目尻に涙を溜めて、愛する我が子を抱き締めた。
そんな親子を見つめていたキャスターは、足音もなく近づき、声を掛ける。

「早くここから出て行った方が良いよ」
この場にはまるで似合わぬ風貌をしたキャスターに、夫婦は目を見張る。
だが、直ぐ傍で殺人鬼が佇んでいる姿を見て、キャスターの言葉の意味に気づいた。何やら呆然としているようだが、いつ我に返るか分からない。今の内に逃げないと、今度こそ自分達は死ぬ。
「さぁ、早く。彼が動く前に」
「君は逃げないのか？」
「平気だよ」
天使のような微笑でそう返すので、彼は何も言えなくなった。
「ありがとう、この恩は絶対に忘れない」
そう感謝を述べて、三人の家族は悪夢の部屋から出て行き、玄関へ向かう。
「ばいばい。それから……『頑張って』ね」
彼らの後姿を――――キャスターはニタリと嗤いながら、見送った。

◇◇◇

ここは一体どこだろう。
龍之介は、自分以外には何も見えぬ空間を見渡す。
その空間に、あの悪魔はいない。少年も死体も見えない。あの家に置かれた家具や、血に濡れた壁や床すらない。
そこは自分以外の全てが存在しない、漆黒の空間だった。
「おいおい、一体何がどうなって」
少しばかり眉をひそめて周囲を窺っていると、体に異変が起こる。
「なんだ？」
痛みがないが違和感がある。一体何事かと、龍之介は己の手に目線を下ろした。
体が、溶けていた。
「え？」
驚いて眺めている間も、体はだんだんと溶けて――――腐っていく。表面を覆う皮膚が溶け、濁った血が零れ、肉がぐずぐずに崩れ落

ち、骨が露出する。
異常は指先に留まらなかった。龍之介の体は、あらゆる箇所から一斉に腐敗してゆく。
「こりゃ何が起きて……」
言いながら腐りゆく体から目を離すと、そこに鏡があった。
なかったはずの、どこから現れたか分からない姿見。
その鏡面に映る龍之介の顔は、既に半ば崩れていた。
夜の女性たちに人気だった端整な容貌は、常人ならば目を逸らしたくなる有様と化している。死後硬直を終えて弛緩し、泥状に変化していく腐肉が骨の上を滑り落ちていき、まだ辛うじて残っている肉には蛆が湧いている。茶色の目玉は眼窩から外れて、神経によって辛うじてぶら下がっている状態だ。
己の体が、どんどん、崩れていく。
その体が、みるみる、腐っていく。
雨生龍之介という存在が、死に、侵されていく。
それは常人ならば、耐え難い惨状だった。
一体誰が耐えられるというのだろう。生きたまま肉体を殺され、醜くおぞましく朽ち果てていく様。それをまざまざと見せ付けられて、誰が正気を保っていられるというのだろう。
だが、龍之介は、違った。
「そうか……そうだったのか」
失くしたものがようやく見つかったかのように、彼は呟く。
迷い込んだ森から出る道を見つけたかのように、彼は呟く。
目の前の現状は、例えるならば、死の舞踏。
どれだけ美しくとも、偉くとも、死んでしまえば皆同じ。最後は何もかもが消え去って、同じ骨だけの死体と成り果てる。
すなわち、死とは平等。
すなわち、死とは共同。
すなわち、死とは併合。
死は常に命の傍にあり、生の隣に佇み、死んだ途端に同一と化す。
死は命と共に有り、

命は死と共に在る。
「これだ、これだよ……俺が捜し求めていたのは!!」
死に行く己が姿に歓喜しながら、龍之介は叫ぶ。
今まで実感出来なかった死。
今まで理解出来なかった死。
だからこそ、実感したかった。
だからこそ、理解したかった。
その恋焦がれてきた祈願が、今、達成された――――っ！
「そうか！　そうだったのか!!　皆、みーんな同じだったんだ!!」
狂えるほどの喜びを露に叫んだ瞬間、世界が正常に引き戻された。
何もない空間に色と形が戻り、死にゆく過程にあった肉体が元の形を取り戻していた。
「あれ?!　さっきのは……」
ようやく見つけた、捜し求めていた物がなくなり、龍之介は少し慌てる。
そんな彼の視界に入ったのは、クスクスと嗤う美しい子供の姿。
「あはは！　ぶっ壊して傀儡にしてやろうと思ったのに、まさか、こんな最高にイカレて最高に面白い奴だったなんて！」
その言葉と共に、龍之介は理解する。
己が捜し続けていたものを与えてくれたのが、目の前の悪魔であるのだと。
「なぁアンタ！　さっきのを、さっきの光景をもう一回俺に見せてくれ！」
そうすれば、もっともっと、分かるはず。
実感し、理解し、その先にあるものを知れるはず。
「俺が追い求めて、恋焦がれたものを、アンタの力で魅せてくれよ!!」
「良いよ」
狂信するような龍之介の願いに、キャスターはあっさりと頷く。
「けど、その前にこっちを見てみようか」
その後、ゆったりとした付け袖から水晶玉を取り出して、それを龍之介の目の前に差し出した。

そこには、ある冒涜的な光景が映し出されていた。
「あれ、このぼうやたち……」
「一回蘇らせたあと、偉大にして愚かな王の下に送ってやったのさ」
嘲りの色を乗せる、紅と蒼の瞳。
それは狂ったように踊り続ける家族に、殺人鬼・雨生龍之介の魔の手から逃げた家族に、注目していた。
彼らは死んでいた。
体は生きている。
心臓も脳も生きている。
あの肉体は生きている。
だけど、心が死んでいた。
「死は大きく分けると、二つの種類になる」
涎を垂らし、虚ろな眼で壊れたように踊り狂う家族を見下ろしながら、怪物は告げる。
「一つは龍之介、君が与えることを得意とする肉体的な死。だけどね、我が――――僕が好きなのはもう一つの方。精神、つまり心の死なんだよ」
「……心の、死？」
「そうさ。肉体はね、殺すのは容易い。だけどその分、早いんだよ。すぐ終わってしまう。たった一瞬、刹那の出来事。それもまた儚く美しいね」
だけど、それじゃあつまらない。
「だから僕は、心を殺す」
何度も何度も追い詰めて。
希望と絶望を与えてやり。
「延々と、永遠かのように」
長く、永く、心を甚振り。
壊れゆくその様を愉しむ。
「それが、僕の求める『死』の形」
歌うように語るキャスターは、水晶玉から映像を消して袖の中へ戻す。

と、
「……ねぇ、龍之介。契約をしよう」
深い闇を孕んだ邪悪な美しい瞳が、スッと青年へ向けられる。
「僕は君の願う通り、何度でも君が腐敗し惨たらしく死ぬいく光景を見せてあげる。君が求める死を魅せてあげるよ」
薄い唇を三日月のように吊り上げながら、キャスターは甘美に囁きかける。
「代わりに君は、僕を愉しませろ」
その心奪われるような声音に、傲慢さを滲ませて。
「ありとあらゆる絶望にもがき苦しみ、足掻いて、狂って、壊れて、死ぬ連中の姿を見させろ」
世界の全てを支配せんとする、罪深き帝王の如く。
「単なる虐殺はつまらない。息つく間もない死は面白みがない」
退屈を嫌い、遊戯を求める無邪気な幼子のように。
「ゆっくりと、ゆったりと。愛おしく愚かな連中の心を、聖女のごとく慈しむように、聖母のごとく愛するように――殺すんだ」
此の世で最も素晴らしき教えを説く、聖者めいた響きをつけて。
「僕たちの手で、その尊き死を与えてやるんだ」
残酷で、冷徹で、冷酷で、残忍な言葉を――囁き掛ける。
「……もちろん、一気に潰してしまうのもありだけどね。まぁぶっちゃけてしまえば、僕たちで『面白おかしく愉しいことをしようぜ』ってことさ」
人生楽しんだもん勝ちだもんね、と最後は茶化すように怪物は言う。
「COOOOOOOOOOOL!!　最っ高だよアンタ！」
怪物の言葉に、龍之介は狂喜乱舞した。
「分かった。俺ぁアンタについていくよ！　師匠、アンタの殺しを、アンタの愛を、皆に見せよう。皆を魅せよう！　俺たちで皆みんな、平等に愛してやろうぜ!!」
己の術で壊れるなく、さらにその先を求める狂人の、満足のいく肯定。

「師匠、か。あはは、理解の早い教え子を得られて嬉しいよ、龍之介！」
それを聞いたキャスターは美しく愛らしく、冒涜的な表情で微笑んだ。
平穏と正常から切り離された空間。
日常を壊され血と狂喜で彩られた場所に描かれた魔方陣と、そこに放り投げられた一冊の書物。
そして〝此の世全ての悪〟に汚された、穢れた聖杯。
それは死と殺戮を撒き散らす一人の殺人鬼と、この世全てを冒涜する怪物という、決して出会わせてはいけない者たちの会合を許してしまった。
彼らの進む先には、
彼らが進む後には、
一体、何があるのだろうか？

002

冬木の港倉庫街の外れに、隠れるようにひっそりと彼らはいた。
彫りの深い顔立ちと逞しい体躯、日焼けとは違う色黒の肌。日本人でないことは明らかな男たちは、積み荷を背に依頼客が来るのを待っている。
背後にずらりと並んだ積荷は、高さがそうない縦長の長方形と大振りな正方形をしている。どちらも人一人が入りそうな大きさで、正方形に至っては時折ガタガタと音を立てながら揺れる始末。男の一人が、静かにしろとばかりに箱を蹴る。
そうして待ち合わせの時刻が近づいた頃、依頼客がやって来た。
『やぁ、待たせたね』
流暢なアラビア語で気さくに声を掛けるのは、黒々とした髪を短く刈った青年。すらりとした長躯を私物だろうダークスーツに包んでおり、手袋や靴は黒い本革製。引っ提げたアタッシュケースも黒で統一した徹底振りに、青年独特の拘りを感じる。
彼を初めて見る新参者が惚けているが、慣れているのだろう。青年は特に気にした様子もなく歩み寄ってくる。
『頼んだものは用意出来てる？』
『あぁ、勿論だ』
応と答えて、男は木箱を指先で軽く叩く。
『そう。なら良かった』
満足のいく答えに青年は微笑みをたたえ、頬にかかる髪を払った。
その顔貌は今まで見てきた誰よりも美しく、些細な仕草一つひとつが見惚れるほどに優美だ。身につけるものは黒で纏められているのに、地味という言葉が思い浮かばない。彼自身も含めて非常に華やかだ。
彼と顔を合わせるのは何度目かになる男だったが、これほどの美貌の持ち主がいるのかと毎度のようにため息をつきたくなる。
『それで、幾らくらいになるかな』
『死んでる方は一体二十万、生きてる方はそうだな……一人当たり六

十万くらいだな』
『分かった。はい、どうぞ』
男は差し出されたアタッシュケースを受け取り、開いて中身を確認する。
中に入っているのは日本円の札束。為替すれば、丁度先ほど要求した金の総額になるだろう。男は唇にうっすらと笑みを浮かべた。
『交渉成立だ。好きに持っていきな』
『これからも宜しくね』
『あぁ、こちらこそ』
売人に客という関係にある二人の男は、互いに固く握手した。
――――戦場に転がってる死体と攫ってきた孤児でこれだけ儲けられるとは、夢のようだ。妙なものを頼む変人だが、容貌は秀麗で羽振りも良い。今後も仲良くしていきたいものである。
目の前の男が人ならざる化け物と知らぬ男は、楽観的にそう思った。

◇◇◇

召喚されたキャスターが第一に行ったのは、現代での権力と財力を得ることだった。
龍之介は芸術家気質の殺人鬼。そしてキャスターは人が壊れて死ぬ姿を好む怪物だ。そうでなくとも、魔術回路があるだけの素人以外から魔力を得る必要があり、結果として生贄は必要不可欠だった。
だがしかし、悲しいかな。好き勝手するには、ガタガタぬかす連中を黙らすだけの金と権力が必要なのである。
幸い、この街は海に面しているので海外での貿易が可能だ。株などで手早く金を作ったキャスターは海外マフィアと手を組んで後ろ盾を作り、警察と直接交渉。コネクションと脅しで龍之介への干渉をなくすよう約束させた。
そして生贄兼材料は、海外マフィアの伝手を利用し購入する方向で決定。
仕入先は主にアフリカ大陸の、貧しい地域。抗争で量産される死体や、餓死するしか未来のない孤児や奴隷。どこで死のうと殺されよう

と誰にも悔やまれることのない、生まれることさえ望まれなかった者たちだ。
このような方法を選んだのには、無論理由がある。
第一はキャスターたちサーヴァントが召喚される切っ掛けとなった、聖杯戦争。それをするにあたり定められたのは、神秘の秘匿。魔術などを露呈させれば、排除が決定される。
キャスター的にはそれはそれで面白そうだから別に構わないが、そうすると遊ぶ方向性が狭まってしまう。それはいけない。娯楽は多面的な方が良い。よって、魔術的方法を使わず金で解決することに決めたのだ。
そしてもう一つの理由。他所から生贄を調達することにしたのは、冬木で集めると面倒くさそうなのに眼がつけられそうだと思ったからだ。
真名がナイアーラトテップのキャスターは『混沌・悪』という英霊らしからぬ属性を持つが、サーヴァントというのは大抵は正義感が強そうな良い子ちゃんである。元が英雄なのだから当然だろう。
そういう奴がいる中で、殺人事件を起こすのは弱みを与えるということだ。キャスターはか弱いクラスなのだ。セイバーなどから一斉に袋叩きにされる口実を、自分からわざわざ作ろうとは思わない。
よって、このまどろっこしい方法を選んだ。
幸い、龍之介からは文句がなかった。これからも、材料集めと魂喰いについてはこの方針で進むことになるだろう。以上。

死体と孤児を買収したキャスターは、詠唱を用いて工房に運ぶ。
移動させ終えたキャスターは変身を解いて霊体に戻り、拠点に向かった。
キャスターたちの拠点は、街の死角になるような場所に立てられたビルだ。地上は三階建てで地下は二階という作りの、ちょっと変わったビル。それなりに値は張ったが、最高の条件が揃っている。当然、丸々一軒買い取った。
地上の階には、さしてめぼしいものはない。三階には龍之介が作っ

た（材料は市販の物）アートが展示されているが、地下に比べれば普通の範疇に収まるだろう。
そして地下――――人避けの魔術を施したそこは、頑丈な扉を開いた途端に生臭さの混じった鉄錆の臭いが充満する。
常識的な感性があれば不快に思う臭いを苦にもせず、キャスターは進む。実体化したキャスターは廊下の突き当たりに一室の、ドアノブに手を掛けた。
開いた瞬間、血の臭いが強烈に鼻粘膜を刺激する。
床一面を染める鮮血。壁には材料と作品が所狭しと並んでいる。
ここは彼のために用意した工房。龍之介の愛する芸術品を生み出すためのアトリエ。血と恐怖、そして死に彩られた発明所だ。
その主たる青年は、キャスターに背を向けて新たな芸術を作っている最中のようだった。
「龍之介～、何作ってるの？」
「ん？　あぁ、師匠じゃん」
キャスターの帰還に気づいた龍之介は振り返ると、師と呼ぶ怪物を歓迎するように両手を広げた。衛生面から着けさせたゴム製のエプロンと手袋には、夥しい量の血糊が付着している。
そんな彼の背後には生きたまま腹を開かれ、腸を引きずり出された裸の少女が座っている。か細い悲鳴を漏らす彼女は、精神が限界に至りつつあった。
「今ね、悲鳴で奏でる人間オルガンを作ろうとしてんだよ。けどさ、なんか思ったより上手くいかないんだよなー。悲鳴の音色って、ピアノみたいに場所を変えれば変わるもんじゃないみたいでさ」
いやぁ、困ったこまった。と、明るい声音で龍之介は語る。
良識ある人間から考えて、龍之介の行いは非道そのものだ。正義感溢れる人物ならば、彼の無邪気な口調で述べられる内容に憤死したことだろう。
しかし、彼の目の前に立つのは混沌と悪をこよなく愛するキャスターだ。可愛い教え子が困っているのならばと、子供を模した化け物は助言を与える。

「オルガンみたいな大型の楽器は、作るの自体が一苦労だからね。一朝一夕で納得のいくものはちょっと無理だと思うよ。……基礎と技術を培うためにも、まずは簡単な奴から作ってみれば？」
「簡単な奴って、例えば？」
「タンバリンや太鼓みたいな打楽器とか、あとはマラカスとか」
「ん～。簡単すぎて、すぐに飽きちまいそう」
「そう？　凝れば結構な物になると思うけど」
　龍之介の言葉にクスリと笑みを浮かべると、キャスターはあるモノを取り出す。楕円に近い球状の頭部と柄部分を持つ二つ一組の楽器……マラカスだ。
　ただ普通のマラカスと違うのは――――振った途端、まるでパイプオルガンを弾いているかのような多彩かつ繊細な音が鳴ったところだろう。
「うわ、何ソレ凄っ。どうなってんの？」
　これにはさしもの龍之介も興味を抱いたらしい。作業時に愛用する丸椅子から腰を挙げ、師の手に握られた楽器をマジマジと眺める。
　知りたい、教えて、と言わんばかりに目を輝かせるマスターの姿。それに満足を覚え、キャスターは仕掛けを教えてやることにした。
「中にいれる玉を小型のオルゴールボールにしてるんだよ」
「オルゴールボール？」
「日本なら北海道で売られてる、音玉って奴になるかな。始まりはケルト民族が創ったドルイドベル。玉の内部にオルゴールと同じような弦が張られてて、その上を金属の破片が転がることで音がする仕組みなんだよ。それを極小サイズにして複数作ったのを、これに詰めてみたの」
　口にすれば容易いが実行するのが不可能に等しいことを述べ、キャスターは再びマラカスを振る。そうすれば、しゃらん、と鈴とは違った柔らかで心地よい音色が奏でられた。
「玉は僕が作ったげるから、試しに製作してみない？　人骨とかを使ったオルガン・マラカス。材料はさっき補充したから、さ」
「やるやる！　なんてＣＯＯＬなアイディアなんだ、さすが師匠！」

興奮する龍之介の制作意欲は、背後で製作途中の人間オルガンから眼前の楽器へと完全に移行していた。
これなら食べても怒られないなと判断したキャスターは、少女の肉体から魂を抜き取り、体内で保存する。これは魔力を補充する時に食べる予定だ。
それから、龍之介の方へと振り返る。
「そういえば、勉強の方はどう？」
「順調じゅんちょう。さっき作った奴、見てみる？」
言いながら龍之介が引き出しから取り出したのは、グロテスクな外装の銃と人の心臓だった。おぞましいことに、銃は軟骨や骨繊維などで作られている。他にも、引き出しには人の指や眼球、歯などが納められていた。
――――さらに、それらは肉眼で見るには難しいが、血で紋様や呪文のようなものが記されてある。
そのおぞましい物品をしげしげと眺めた後、涼しい顔のキャスターは口を開く。
「結構な数が出来たんだねぇ。それで、効果は？　実地した？」
「あぁ。銃の方は歯とか装填して撃ったら肉が腐ったよ。一番威力があったのは指かなぁ、コンクリまで腐敗したくらいだし。この心臓の方は、指を撃ったのと同じ威力で範囲は手榴弾程度……もうちょっと広いくらいか？　多分、師匠の言ってた聖杯戦争でも問題なく使えると思うよ」
「サーヴァント相手にも通じる？」
「したことかないから分かんないって」
「じゃ、僕に撃ってみよっか」
キャスターはそう言うと、色黒の細い腕を龍之介の前に差し出した。
「りょーかい。んじゃ、試し撃ちっと」
龍之介は銃に眼球を装填すると、ノズルをキャスターの皮膚に突きつける。それから引き金に手を掛けた。
発射した途端、腕の表皮に直撃した眼球は破裂し、中に詰まってい

た液状組織をぶちまけた。
それと同時に鼻を突く刺激臭が漂う。見れば、キャスターの腕が溶け、肉が腐食し、それが露出する骨にまで浸透しつつあった。
魔力を流せば傷は再生していく。だが自らのマスターの一撃で腕を腐らされた事実までは、なかったことにはならない。
しかしキャスターの顔に浮かぶのは笑みであり、花弁のような口元は満足そうに綻んでいる。
「うん。死霊術も呪術も、魔術使いとしてきちんと身についたみたいだね」
と、教え子の明るい染髪を褒めるように撫でるくらいだ。

召喚されたキャスターがコネクションを得るのと同時進行で行ったのは、龍之介に魔術を習得させることだ。
魔術回路を持つ一般人でしかない龍之介の一番の強みは、魔術と全く関わりのないことである。頭でっかちな参加者は、キャスターのマスターである魔術士を探そうとするだろう。だが、その固定観念が頭にある限り、龍之介を見つけ出すことは出来ない。
その最大の長所を殺す行動に出たのは、聖杯戦争について説明した時に彼がこう言ったからだ。
「俺もその聖杯戦争っていうの、見てみたい!!」
好奇心旺盛な子供の眼でせがまれれば、キャスターも「一人より二人でやった方が絶対楽しい」と思い、マスターを参加させることにしたのである。
魔術を教えたのは、聖杯戦争を少しでも「遊んで愉しむ」ためのバリエーションを増やすためだ。今から魔術師にするのは難しいので、魔術使い、そして魔術のジャンルを定めて教育したのだ。
キャスターによる魔術の伝授は精神を押し潰す勢いのものだったが、教わる相手は龍之介。肉体が腐敗しながら死にいく幻覚に耐えたばかりか、それを更に催促した龍之介である。水を吸う乾いたスポンジが如く、魔術を驚くような速度で習得した彼は、キャスター的に「まぁ戦争に出ても大丈夫だろう」というレベルの魔術使いになった。

龍之介が得た中で特に優れているのは、死霊術と呪術。魔術回路にちょっと手を加えたが、ほとんど彼自身の才能と勉学による賜物だ。他にも黒魔術や呪医術、心霊医術を教えたが、やはり主力となるのは前述した二つであろう。

そうしてキャスターたちは戦争を愉しむために、準備した。

全ては、聖杯戦争を面白おかしく遊ぶために。

「龍之介、そろそろだよ。もうすぐだ」

紅と蒼の目を細め、キャスターはその美貌に期待の笑みを浮かべる。

「そうだな、あとちょっとで始まるんだよな。師匠っ」

龍之介もまた、わくわくと頬を紅潮させて今か今かと待ち構える。

「今回の戦争、思いっきり遊ぶぞー!!」

「あぁ！　Ｃｏｏｌに楽しんでいこう!!」

願いと命を掛けた、第四次聖杯戦争。

七つある陣営の中で最も危険であろうキャスター陣営は、お祭り前の子供のように無邪気に笑った。

キャスター陣営　データ　※画像追加

【キャスター】
マスター：雨生龍之介
真名：ナイアーラトテップ
身長：１４６ｃｍ（変化可能）／体重：３９ｋｇ（変化可能）
属性：混沌・悪
イメージカラー：虹色
特技：暇つぶし、教育
好きなもの：遊戯、ふざけること／苦手なもの：住処に火を放たれること
天敵：クトゥグア
触媒：ラヴクラフト小説
ステータス（補正なしでは魔力と宝具がランクＥＸ、その他はＥである）
筋力：Ｃ　耐久：Ｂ　敏捷：Ａ　魔力：ＥＸ　幸運：Ａ　宝具：ＥＸ
武器
アザトースの書、ネクロノミコン、エイボンの書、その他クトゥルフに登場する魔術書の原本全て。
保有スキル
【クラス別スキル】
陣地作成：Ａ
魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。
「工房」を上回る「神殿」が作成可能だが、キャスターは基本的に行動派であるため、自身が用いることは少ない。
そのため、工房の使用権は大半が龍之介に移行されている。
道具作成：ＥＸ
魔力を帯びた器具を作成可能。
不老不死の妙薬や神格を召喚する道具すら作成出来る。
仮礼呪も三つくらいまでなら、一度に作成可能。

ただし、満足のいく物を作るには試行錯誤の必要あり。

【固有スキル】

高速神言：Ａ

神代の言葉。魔術を発動するとき一言で大魔術を発動させる、高速詠唱の最上位スキル。

呪文・魔術回路の接続を必要としない。区分としては一小節に該当するが、発動速度は一工程と同等かそれ以上。しかも威力は五小節以上の大魔術に相当する。

呪文自体が「神言」である為、詠唱の長さと威力が比例するという法則は適用外。

専科百般：ＥＸ

専門スキルを使い分けることが出来る。

あらゆることに高い技能を持つため、大抵のことはＡランク以上の熟練度を発揮。主に悪戯や、その下準備で発揮される。

一般的に見て馬鹿じゃないかと思うような技能もある。

変身：ＥＸ

文字通り、「変身」する。

キャスターの場合は貌がないために千の貌、そして複数の化身を持つため、人間や動物だけでなく無機物にも化けることが出来る。

サーヴァント化、ひいては魔術師ということ制限が科せられ、「這い寄る混沌」や「月に吠ゆるもの」などに変身することは不可能。

神秘の伝道者：Ａ－

自身の持つ様々な魔術や技術を他者に伝授するスキル。

伝授された力は与えられた人物の実力に左右されず、最大限の力を発揮することが可能。

ただし、伝授された者は大抵自滅する運命を科せられる。

注意を払えば、発動しないようにすることは可能。

神性：×

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。

「粛清防御」と呼ばれる特殊な防御値をランク分だけ削減する効果が

ある。
キャスターは神霊そのものだが、弱体化により使用出来ない。
あるいは「外なる神」であるため、この世界では全く発揮されない線も有りうる。
宝具
名状し難き魔道書たち　（ザ・サドルァ・オブ・イビルノート）
ランク：C～EX
種別：対人宝具～対界宝具
レンジ：―
究極の悪戯っ子　（トリックスター）
ランク：EX
種別：対己宝具
レンジ：0
人物
魔術師のクラスで召喚されたサーヴァント。
極彩色のアラビア衣装を纏う絶世の美貌に嘲笑を浮かべた子供。浅黒い肌と虹色に光る透き通るような長髪、左頬の刺青、黒翼（普段は折り畳んでいる）と額の第三の目（普段は閉じている）が大きな特徴。
普段から笑みを浮かべており、両の目から真意を察することは出来ない。
相手の精神が壊れるまで徹底的に甚振るという残忍な嗜好を持つが、性格は非常に無邪気でマイペース。悪戯好きで悪ふざけに走ることもしばしば。割と世話好きで、気に入った相手は猫可愛がりする。容赦のなさは健在だが。
享楽的かつ大らかな気性で、探究心・好奇心が旺盛。ポジティブ思考で、何事も娯楽として楽しむ。細かい事を気にせず寛容。
人生楽しんだ者勝ちがモットーであり、退屈なことも不条理も愉しむ。道徳や倫理観は破綻しているが、非常に知的かつ理論的。矛盾すら抱きかかえて混沌を愛する。
優れた魔術の使い手であると同時に科学者でもあるため、科学に対

する忌避感がまるでない。むしろ科学は錬金術から派生したものだから、魔術の親戚という考え。そのため科学を嫌う魔術師を「食べ物の好き嫌いする子供」みたいだと思っている。

魔術を崇高だとは思っておらず、誇らしげにする理由が分からない。自分を含めた魔術師は「人を喰い物にする屑」、「他者を理不尽に犠牲にする外道」と評価しており、時計塔の魔術師たちの有様を大層嘆いている。でも嫌いというわけではない。

反面、柔軟な思考を持つ勉強熱心なタイプは大好きで、そういった相手には己の持つ神秘を教授する（非常にスパルタな方法だが）。

聖杯に対しては一切の興味がなく、聖杯戦争自体を楽しもうと考えている。

能力

ネクロノミコンを含めたクトゥルフ系魔術の使い手で、あらゆる魔術に精通した天才。魔術に関してはオールラウンダーであり、苦手ジャンルはない。

接近戦も好むが肉体面では頼りにならず、頭と技術を使った戦法を取る。奇襲やテロのような外道邪道の戦法も大好き。

最初は魔力と宝具以外が結構な大惨事だったが、マスターの強化と魂喰いを行うことで、『最弱』といわれるキャスターらしからぬ高水準のステータスを保っている。

キャスター全体図：線画

００３

待ち望んだ聖杯戦争が、ようやく開始された。
それでも、冬木市の街並みは変わらない。聖杯戦争は魔術師と英霊による、秘匿されるべき神秘の戦だ。当然、一般市民が知るはずもない。
そんな普段通りに見える街中を、悠々と歩く二人の人物。
キャスターと龍之介だ。
「龍之介ー、今日は何食べたい？」
厚手のダッフルコートを着たキャスターは現在、龍之介と似た髪色と眼をした子供に姿を変えている。普段の姿はあまりにも目立つので、変身のスキルを用いたためだ。それでも、キャスターの特徴たる中性的な美貌は健在だが。
そのキャスターに尋ねられた龍之介は少し気だるげに、答える。
「んー……あったかいもんなら何でもいいかな、俺」
「なんでもかぁ。じゃ、きのこのクリームシチューとフランスパンにするよ。副菜はサーモンフライに、ホウレンソウとベーコンのソテーね」
キャスターは万能的な化身ゆえに、専科百般：ＥＸを保有する。大抵のことにおいてＡランク相当の技能を発揮するスキルだ。
よって、料理も当然大得意だ。
「龍之介は趣味の時以外はぼんやり気味だねー」
「あー。よく言われるよ」
と、オレンジがかった茶髪を掻く。ひどく、面倒くさそうに。
殺人鬼の姿ばかりが目立ち、ひょうきんで饒舌な印象を受ける龍之介だが、普段は喋るのも億劫なくらい無気力だ。片方の面しか知らぬなら、彼のギャップの激しさに驚くだろう。
ただキャスターは、気に入った相手には甲斐甲斐しい性質のようだった。だらけた様子の龍之介に苛立つばかりか、むしろ上機嫌に彼の世話を焼く。手間が掛かる子ほど、可愛いという奴かもしれない。
そうしていつものようにキャスターが先導して買い物していると、

その大きな瞳が街ゆく人並みから浮いた人物を捉えた。
「……龍之介～」
「んぁ？　なに？」
「サーヴァント見つけた」
　その言葉に、龍之介は重くしていた瞼を開く。
「嘘、どこどこ？　どいつ？」
「あそこ。あのロシア系美女の隣にいる、金髪碧眼の子。黒スーツで男装してる、すっごい胸がちっちゃいの」
　かなり失礼な、しかし非常に的を得たキャスターの説明で、龍之介も二人の姿を発見する。
　二人の印象を例えるならば、姫と騎士。
　長い銀髪を靡かせる貴婦人然とした女性を、黒スーツの少女が紳士的にエスコートしている。どちらも整った容姿だが女が淑やかかつ柔和なのに対し、少女の方は凛々しく毅然としている。
　纏う空気はどこまでも清らかで、洗練されていた。
「印象的に、セイバーかランサー……多分セイバーのクラスだね。パッと見だけど、規律正しい騎士様って感じ？　遊び相手には良いけど、遊び仲間には出来そうにないなぁ。龍之介、ステータス見れる？」
　向こうの二人に勘付かれないようにしながら、こっそりと尋ねる。
　眼に回路を繋げて魔力を通した龍之介は、少女のステータスを覗いたあと、首を傾げる。
「……なぁ、セイバーって確か『最優』のサーヴァントだよな？　そのステータスが、キャスターの師匠と同じ。いや、ちょっと下にも思えそうなくらいだけど」
「そりゃあ、僕が他のキャスターより優れてるってことじゃない？　まぁサーヴァントに格下げされて、弱体化させられちゃってんだけどね。……ほんっとやになるよなぁ。今の状態で、クトゥグアやノーデンスと遭いたくないんですけど」
　クスクスと笑っていたが後半は打って変わり、苦々しい顔でぼやくキャスター。その表情から、相当に弱体化させられてるんだなと龍之介は推測した。

じっと見られていることに気づくと、キャスターは笑みを浮かべ直して明るく喋り出す。
「ま、皆動き出すのは夜でしょ。帰ったら仮眠を取って、準備しようね」
「はーい」
良い子の返事をして、龍之介たちは拠点に戻った。
◇◇◇
午後八時を過ぎたころ、二騎のサーヴァントが殺しあった。
片方は全身を黄金色に包んだ、傲然とした印象と面構えの若い男。
もう一人は肌も髪も服も黒い、闇が人の形を成したような髑髏面。
彼らはおそらく、アーチャーとアサシンだろう。と思ったのも、アーチャーらしき金の男が背後に浮かばせた武器を投擲し、侵入してきたアサシンらしき髑髏面を瞬殺したからだ。
第四次聖杯戦争初日にして初の殺し合い。それはアーチャーによる圧倒的な勝利を持って、幕を閉じた。
が、
「馬鹿だろコイツ」
そのアーチャーたちのやり取りを『八百長』と見抜いたキャスターは、水晶玉を前にして真顔でぼやいた。
それを聞き取った龍之介は、作業を一旦中止して師の方を向く。
「どしたの、師匠」
「いやさ、ちょっと質問して良い？」
「うん？」
「龍之介にもしアサシンのマスターになった仲間がいて、そいつと仲違いで敵対するフリをするなら、どうする？」
水晶玉をクルクルと指先で回転させながらの質問にしばし考え、作戦を練り固めて、龍之介は少しずつ説明を始める。
「そうだなぁ……俺なら、まず一日か二日くらい大人しくさせるかなぁ。決行する場合は、遅効性の薬を……食事だと分かりやすいから塗布するタイプ？　を仕込んで、俺をある程度身動き取れなくするんだ」

「うん、それで？」
「で、アサシンにそこを襲わせる。アサシン的には暗闇の方がいいから、薬が深夜あたりに効くように調整したほうが良いな。うん」
　死体分解用の鉈でグサッ、と刺す演技をしながら、答える龍之介。
「でだ、それを何とか避けたあと、アサシンのマスターが追撃を見舞う。多分逃げ惑うことになるから、先にトラップ仕掛けとくのもありかなぁ。薬で動きづらいから余裕がなくなってトラップに掛かりやすくなる分、演技臭さは消せるんじゃないかな」
「うんうん」
「攻撃を喰らう俺は魔術で防御しながら、師匠を呼ぶよ。アサシンと師匠とが殺し合って、俺とアサシンのマスターも殺しあう。軽く周辺が壊れる程度に」
「なるほど。それから？」
「アサシンはマスター、要するに人間を殺すのが得意なサーヴァントだから、同じサーヴァントの師匠とやり合うのはキツイだろ。だから薬の効果が切れた頃に、アサシンを先に切り上げさせて、二人が逃走。俺は師匠に言って、アサシンたちに追撃。……で、師匠に訊きたいんだけど」
　不意に顔を上げた茶色い瞳が、紅と蒼のオッドアイを見据える。
「あのアサシンって、生きてんの？」
「大方生きてるだろうね。たぶん身代わりか分身を作る宝具持ちだよ。そうでなくとも、彼らはアサシンを失っても平気なんだと思う」
「そっか。んじゃ、教会に逃げ込むまでにアサシンを抹殺。それと、少なくともマスターも怪我するくらいの威力で攻めるな。オッケーなら半殺しにする」
　メスについた血で、罠を仕掛けるなら此処にこう、攻撃威力と狙う場所はこのくらいと綴りながら、己ならこうするだろうと青年は語る。
「あとは裏切り者を完全に殺す名目で使い魔を張り付かせて、情報交換。アサシンのマスターも怪我を癒すために閉じこもる振りをしながら、他所の状態を調べたり奇襲してもらう。他の陣営がいくらか

減ってから、残る陣営に一緒に攻め込む……ざっくりとだけど、俺が立てたのは大体こんな感じ。どお？」
と、龍之介は己が策の評価を求めた。
己自身を危険に晒し、相手も負傷させる八百長を。
アサシンのマスターが心変わりすれば、キャスターが気まぐれを起こせば、容易くどちらかが死ぬようなやらせを。
そうでもしなければ、参加者を騙し切ることなんて出来ないと思ったから。
殺意なき演技で、聖杯を望み殺しあう者たちを騙せると思わなかったから。
だからあえて――――龍之介はそんな策を練ったのだ。
多くの人を殺め、命を奪った殺人鬼たる彼は、そんな策を練った。
演技といえど殺し合いには、リアルティ溢れる殺戮劇が必要だと思って。
「合格」
満足のいく教え子の答えに、キャスターは親指をグッと立てる。
「さすが龍之介だね、唐突な質問だったのに中々に素晴らしい策だ。……それに比べてアーチャーのマスターは、お粗末過ぎ。いくらやらせにしたって、あれはないない。相手がアサシンなんだから殊更にね」
と、先ほどみた八百長試合にぐさぐさと手酷い評価を与えるキャスター。
アサシンはクラス別スキルとして気配遮断を持っているのだ。それにアーチャーがすぐさま気づいて迎撃するのは不自然極まりない。
しかも弟子に攻撃されたというのに、逃走する弟子を見送る甘さ。これで戦争しようというのだから笑える。片腹大激痛だ。
「彼、僕を腹痛で行動不能にしたいのかな？　そんな風にすら思えてくるよ」
だとしたら、彼の目論みは大成功だ。キャスターの腹筋はベキベキである。
先ほどから酷評されっぱなしなマスター……遠坂時臣。

情報によれば火属性を用いる優れた魔術師のようだが、どうやら実戦経験は皆無らしい。相手を策で弄するだけの謀略性、狡猾さがない。命のやり取りによる辛酸を舐めたことがないから、真っ向勝負しか出来ないだろう。

「あと、アーチャーの攻撃方法を見せたのは大失敗だ」

フッ、とキャスターの唇に嘲笑が乗せられる。

「何？　師匠、もうアーチャーの正体が分かったわけ？」

「うん。あんな大量の武器を無差別に使役するってことは、あらゆる武器や宝をその手に収めた名高き男……人類最古の王者ギルガメッシュしかいない」

だとしたら、あの一挙一動に滲む傲慢さも説明がつく。

あれは己が始まりにして最強の王であることから裏打ちされた、絶対的な自尊心によるもの。此の世全てを手中に収め、一度は自らの手で不老不死を得んとしたほどの実力を持つ、絶対的存在であるからこその誇り。己が己であるがための気高さだ。

この世の始まりはその足で世界を駆け廻り、天地を納めた自分也。

あとから生まれた弱者が周囲に担がれ『王』を名乗るなど、不届き千万。

だからこそ、ギルガメッシュは誇り高く傲慢なのだ。

「マスター……遠坂時臣は勝つために彼を呼んだみたいだけど、よりによって相性最悪のサーヴァントを選んじゃうなんてね。ギルガメッシュは王だけど冒険家でもあるから、型に倣ったような言動を取る相手は退屈極まりない」

ギルガメッシュは色々と型破りな王なのだ。そして未知を愛する冒険者であったため、マスターになるなら同じく型破りな者が相応しい。

遠坂時臣と対照的に、破天荒な人物こそが。

「彼、途中で飽きられて、ぶっ殺されるかもね」

人一人の死を軽い口調で予測し、無邪気に語るキャスター。

英霊を指定して召喚したい場合、呼びたい英霊と深い縁のある触媒を使用するのが望ましい。だから、聖杯戦争の参加者は触媒を容易し

てサーヴァントを召喚するものが多い。
だが裏を返せば、マスターとの相性を無視して召喚するということだ。指定する英霊との縁深い触媒を選べば望む英霊を呼べるが、当然、マスターの方針や性格と合わぬサーヴァントが出てきてもおかしくない。
キャスターも一応触媒となるものを用いての召喚だが、龍之介が（偶然）使ったのはラヴクラフトの小説だ。指定が緩い触媒だったから、彼の気質に合う者として自分が選ばれた。
「他の陣営はどんな感じだろうね？　仲良いかな、それとも最悪かな。決裂寸前になっちゃってる場合もあるかもね」
とはいえ、他所の奴がどうなろうが知ったことではない。
龍之介も同意見なのか、彼は至極平坦な相槌を打つ。
「ふーん。とりあえず、仲悪い陣営はご愁傷様ってことか」
「そだねー。ま、死んじゃうまでは遊ばせてもらおうよ。皆で仲良く、ね」
「だなっ」
赤黒く染まったメスをクルクルと回し、龍之介はニッコリと笑う。冒涜的な所業をしていながら、浮かぶ表情は神の使いがごとく無垢で純粋だった。
それに釣られて、キャスターも唇を綻ばせる。
「……倉庫街の辺りで魔力が動いてる。多分、他のサーヴァントたちだね」
「おっ？　そろそろ行く？」
「うん。風邪引かないようにコート着て、必要な物持っていくんだよ？」
「分かってるって」
明るく答えながら、龍之介は裾長いフードコートを着て、武器類を入れた鞄を背負う。
武器は特性の狙撃銃と手榴心臓、革手袋の甲に取り付けた特殊な糸に、その他諸々。コートの裏には無論、作成した銃弾や爆弾を入れている。

初日で遊ぶための準備はバッチリだ。
「それじゃ、行こうか」
キャスターは愛弟子であるマスターへと手を差し伸べ、告げる。
あぁ、アーチャーと比べて自分はなんと幸運なことか。
これほどまでに、相性抜群のマスターを引いたのだから。

004

既に冬の季節を迎えた街は、夜ともなれば殊更に冷たい。周りが熱源を持たぬ金属だらけの倉庫街ということもあり、肌を撫でる風すら氷のようだ。

しかし、霊体化しているキャスターには関係ない。むしろこの熱源のなさは熱を発する存在――――生物の居場所を探すには適するだろう、と好意的かつ前向きに捉えていた。

『龍之介、そっちはどう？』

別行動し物陰に潜む龍之介へと、念話を繋いで問いかける。

『んとな、今トラップ仕掛けてるとこ。なんか結構近いトコに人がいる感じがするんだよなー』

『そう。こっちも隠れてるのがいるみたいだよ。魔術で姿を隠してるみたいだけど、いけそう？』

龍之介に持たせた特製狙撃銃は、銃身内に龍之介自身の血液を塗りたくり呪術を付与させた礼装だ。これにより、発射する死霊術による加工を施した腐敗魔弾に呪術を付加させ、サーヴァントにも威力を発揮するようになる。

しかし、それ以外はスコープを取り付けただけの代物だ。それに熱感知機能はついていない。この暗闇の中、姿の見えぬ敵に当てられるかどうか、少しばかり不安になるのは仕方ないだろう。

だが、龍之介はそんな心配は無用とばかりに答える。

『へーきへーき、水温察知を使えばいけると思うよ。こんな寒い中なら、人の体温くらい分かるって』

――――水温察知。

生物ならば必ず水を必要とし、体内に水分を貯留している。そして体温を調節するのに、貯蔵した水が使用される。

その水の熱量から対象を割り出すのだ。

当然それは、つい最近まで魔術回路も魔力も一般人でしかなかった龍之介が簡単に出来る芸当ではない。

だがしかし、キャスターは彼の回路を改造することで可能としたの

だ。

雨生家は回路こそ生きているものの魔術師としては既に廃れており、その神秘は一族に伝えられていなかった。よって、キャスターたちには雨生家がどういった魔術師の家系で、どんな魔術を使うのかは分からない。

だから、開き直ったキャスターは『好き勝手に弄くる』ことにした。

とはいえ、どんな魔術に適した回路にしようかと悩むはめになった。サーヴァントも攻撃できるよう呪術は絶対に学ばせるが、後は特に決めていない。

魔術を得意とするゆえに思いつくジャンルが豊富で、色々選択肢があったキャスターは、大いに悩んだ。

すると龍之介が、打開策を何気ない調子で口にしたのだ。

「日本の諺に『名は体を表す』って奴があるんだけど、これってあり？」

聞いた途端、その手があったかとキャスターは目から鱗だった。

名は体を表す――――己を示す名前・名称が、姿や本質を現しているという意味を持つこの言葉。

龍之介が言ったこれを丁度良いと思ったキャスターは、躊躇無く提案に飛びついた。そして諺に則って、名前に合わせた魔術が使えるよう改造することに決定。

同時に日本という部分から、基盤も思いつく。絶対に呪術を覚えさせようと思っていたので、呪術＝東洋。すなわち陰陽五行思想に発想が繋がったのだ。

こうしてキャスターは名と思想を元に、魔術回路に手を加えた。

改造する魔術回路の持ち主は、『雨生龍之介』。

雨は水。

水は胎内と霊性を兼ね備える。

水は癒しの泉、胎内と等しく生命に関与する。

水行は太極から分裂した陰が北に移動して生じた。

雨生龍之介。

水の龍。

水に属する龍は、黒竜。
黒竜は邪悪であるともされ、水と闇を司る。
闇と水は共にある。
水は霊性、闇にも通ずる。
闇は太極図で言えば、陰。
陰は受動的な性質。
闇や肉体、水などを司る。
『雨生龍之介』
『水を生む黒き邪竜』の性質を持つ魔術使い。
だから、胎内と霊性に特化した魔術回路にした。
だから、水と闇に適した魔術回路に作り変えた。
そして生命を操ることと呪いに特化した魔術使いにした。
死霊術と呪術を操ることへと特化した、魔術使いにした。
死と呪いを生み出す魔術使い。
それが今の『雨生龍之介』だ。

勿論、これは通常の、正常な魔術師が考え得るものではない。
元々持っている魔術回路に手を加え、人為的に魔術を会得させる。
それは間桐臓硯のような、外道に堕ちた魔術師の考えるような所業だ。
そして臓硯ですら、短期間にして施すことは不可能だ。
架空元素の属性を持つ桜を蟲を用いて調整し、まともな教育をしていなかった孫を一年で急造魔術師に変えた彼の妖怪でも――。
たった半年以下で元の属性を無視した回路に造り変え、そしてそれを使い物になるようにしろと言われても無理であろう。
しかし、キャスターはその『無理』を可能とする。
キャスターの『宝具』は、そんな不可能を無理矢理にでも可能に変える。
常識を覆し、
理を破壊し、
無茶苦茶を叶え、

無謀を嘲け笑い、
馬鹿な幻想を――――実現させる。
ありとあらゆる不可能とて、キャスターが行うに限りそれは可能となる。
それはキャスターを知る者が、あらゆるものを冒涜する混沌の怪物へと抱いた幻想が具現化した宝具が持つ能力。
大半のマスターにとって致命的欠陥を持つ、最強最悪の宝具による力だ。
……それについてはまた追々にするとして、龍之介はこの宝具を用いた改造で短期間にしては優れた魔術使いになった。
その彼が大丈夫だと言っているのだ。
ならばと、キャスターは龍之介の言葉を信じることにする。
彼が、彼だけが、己のマスターなのだから。
サーヴァントが、マスターの言葉を信じずにどうするのか。
『……分かった。じゃ、好きなタイミングで好きにして良いよ。大怪我はしないようにしてね。僕からは以上』
『了解!』
明るい返事の後、通信は途切れた。
念話を終えたキャスターは、眼前へと意識を戻す。
そこにいるのは二人の騎兵。
蒼いドレスに銀の鎧を纏う凛々しき姫騎士と、
深緑を身につけた甘く蠱惑的な美貌の槍騎士。
セイバーとランサー。
両者は名乗りを上げぬ一騎打ちを行おうとしている。
さて、彼らのどういった英雄だろうか。どれほどの力を持つのだろうか。
姿を消したキャスターは、特等席で彼らの実力を拝見とかかった。
◇◇◇
激しい鎬が削られる。
剣檄は火花を散らし、二人を中心として巻き上がる風が周辺にあるものを揺らし、吹き飛ばす。

ランサーが用いるのは赤い長槍。柄部分に呪符が貼り付けられている。
セイバーが用いるのは――――形が見えぬ、予想だが剣。おそらく魔術で形状を隠している。よほど有名な武器なのか。あるいは形状を隠したほうが有利な代物なのか。
ともかくとして、さすが三騎士のクラスといったところ。どちらの実力も素晴らしい。だが、やはりクラスとステータスによって差が出来るのだろう。若干、セイバーの方が有利に見える。
『師匠、ししょー』
そう思っていたら、龍之介の方から念話がきた。
『なに、龍之介』
『アサシンが近づいてきた』
『あぁ、やっぱ生きてたんだ』
『師匠の予測が当たってたな、なんか二人くらい見える』
『姿はどんな？』
『男と女』
返答に、ふむ……とキャスターは思案する。
姿が違うということは、単純な分身や身代わりではなさそうだ。
だとすれば、一番濃厚な線は多重人格者。生前が多重人格であると知られる英霊。黒人としか思えない外見、装い。そしてアサシンというクラス。
それらから、二体目のサーヴァントの真名が大体分かった。
『あぁ、ハサンだったか』
『え？　破産？』
『惜っしぃー』
それだと暗殺教団は貧乏になる。
裕福ではないかもしれないが、少なくともジリ貧ではなかったはずだ。
お茶目な聞き間違えをしたマスターに苦笑を浮かべ、キャスターは龍之介に彼らについて講義を始めた。
『ハサン・ザッバーハ。暗殺教団っていうところの教主、山の翁を務め

た一人だよ。ハサンは襲名で、今回の奴は百の貌を持つとされるハサンだろうね。なるほど、多重人格だったことにちなんで肉体を分けれるようになったのかー』
『ふーん……強いの？』
『今みたいな状態だと、多分弱い』
そう思った理由は、最初のアサシンが（やらせとはいえ）アーチャーに瞬殺された点からだ。多分、分裂と力も分断されてしまうのだろう。
『なら、今なら戦力減らせるんじゃない？　殺っとく？』
それを聞いた龍之介が、軽い調子で許可を求めてくる。
だがキャスターが返したのは、否だった。
『二兎追う者は一兎をも逃がすってのが、日本の諺でしょ？　今動いたら、近くにいるっていう連中に勘付かれる。そしたら僕がいる方にいる奴らを、不意打ち出来なくなる可能性が高い。向こうが襲ってこない限りは、無視しておいてくれないかな？』
『そうだな。分かったよ』
どうせなら、楽しい遊びをするほうが良い。
キャスターと同じ思考に至った龍之介は、あっさりと引き下がった。
『ありがとうね、龍之介』
マスターに礼を述べて、眼前に意識を戻す。
その頃には、戦況は一変していた。
先ほどまで押していたセイバーの顔は、少々苦しげに歪んでいた。代わってランサーが彼女を追い詰めているようだ。
その原因は、恐らく――――槍。赤い槍からは付いていたはずの呪符が剥がされており、槍先が目に見えぬ剣を突き、絡める。その度に剣を覆う風が剥ぎ取られ、少しずつ刀身の形が露になっていた。
――――破魔の槍、か。
あれには気をつけた方が良いだろう。あの槍は、魔術を用いる己と相性が悪そうだ。ランサーと戦う時は、召喚系を多用する方向でいこう。それとも龍之介に不意打ちをさせるか、とキャスターは対抗手段

を考える。
と、不意にセイバーが武器を下ろした。
どうしたのかと眺めていると、セイバーが装備していた鎧を外す。
露になった鎧の下を一瞥し、キャスターは秀麗な顔を引き攣らせた。
『うっわぁ……』
『どしたん？　師匠』
『あの子……マジで胸ないのか』
そう豊かではないだろうが、それでもスーツの厚めの布地や鎧で着痩せし過ぎて可哀想なことになっているんじゃないかと思っていた。
だがしかし、そうではなかった。
比喩でもなんでもなく、なかったのだ。
まさに断崖絶壁。
まさに水平線。
つまり貧乳。
言い方を変えたらペチャパイ。
『白兵戦するには好都合だろうけど……あれだけ潔いまな板振りを見せられると、なんか哀しい。切ない』
『そんなに酷いの？　あのセイバーって子』
『うん……神様って、惨いことするよね』
今度、豊胸の薬でも作ってあげようかな。
そう考える程度に、キャスターはセイバーの胸を憐れんでいた。

己が胸を憐憫されていることなど露知らぬセイバーは、剣を再び構えると、後方に魔力を溜める。
そして、それを爆発させた。
魔を破る槍を持つランサーに、これ以上の打ち合いは不利になる。
だからセイバーは、一気に片をつけることにした。
魔力の爆発と風により推進力を向上させての、突貫。決まれば、一瞬にしてランサーを討ち取ることも不可能ではない。
だが、キャスターから見てそれは愚策としか思えない手段だ。

サーヴァントの正体が知れていない状態で、後退も中断も出来ない突撃。それは相手の持つ宝具次第で、返り討たれる確率を上昇させるということ。相手の宝具が一つとは限らないのだ。

キャスターのそんな推測は、『大当たり』だった。

姫騎士が弾丸のごとく接近して来ると、美丈夫は足を動かす。それは地面に隠した第二の槍を掘り起こす動作だった。彼は爪先で黄色い短槍を放り上げると、それを手に取ってセイバーへと斬りかかる。

少女は咄嗟に身を捻る。矮躯の少女の姿をしていようと、流石セイバーのクラスと言えよう。青い姫騎士は驚異的な身体能力を発揮し、槍で貫かれることだけは避けた。

だが、完全に避けきることは出来なかった。黄色い穂先は彼女の左腕を捕らえ、切り裂く。鋭い刃面に鮮やかな紅が散らされる。

着地し立ち上がると同時に、力なく垂れ下がるセイバーの手先。左手の腱を切られたのだろう。あれでは、両手で剣を持つことなど出来ない。満足に剣を振るうことなど不可能。

すぐにセイバーの傷を治さんと魔力が流されるが、しかし腕は動かない。銀髪紅眼の女が治癒したと言うが、そんな様子は欠片も見られない。

すると、美丈夫が不敵に告げた。

――――我が短槍でつけられた傷は、決して癒えることはないと。

紛うことなく、最優のサーヴァントが弱体化された瞬間だった。

身を潜めてそれを聞いたキャスターは、危険度はセイバーよりランサーの方が上だと判断する。

どちらも騎士然としたサーヴァントだ。だがセイバーは騎士道が強すぎて、絡め手に弱い。対するランサーは、単純ではあるものの策を弄する。加えて二つの武器が持つ特性……厄介極まりない。

だが二つも魔槍を見せてくれたお陰で、彼の正体も知れた。

同時に、こいつの陣営は大丈夫なんだろうかとワクワクしながら思う。

『ディルムット・オディナ……マスターが女がいる男だと、相当に拗れるだろうなぁ。気になる気になる～っ』

黒子の呪いが原因だが、寝取り騎士として知られる男だ。ドロドロとした三角関係による愛憎劇が見れそうだ。開催されたら是非呼んで欲しい。

ときに、これでセイバー側の分が圧倒的に悪くなったわけだが。さて、ここからランサー陣営はどう動き出すだろうか。

胸躍らせながら続きを待っていると、誰かの悲鳴が聞こえた。

次いで、空から巨大な戦車が降って来た。

００５

轟音と共に走る雷光。
それは天より光臨した巨大な戦車によるものだ。
戦車には二人の好対照な人物が乗っていた。片方は大柄で逞しい、磊落という言葉が似合う赤髪の偉丈夫。現代から見て時代錯誤な出で立ちから、サーヴァントであることが窺える。戦車に乗っているから、十中八九ライダーだ。
そしてもう一人、ライダーらしき男に食って掛かる小柄な少年。ダークグリーンのセーターにスラックスという学生らしい服装と、綺麗に揃えた黒髪。奔放そうなライダーと真逆に繊細げな若者である。おそらく、彼がマスターだろう。
キャスターと龍之介は似た者同士だが、あちらは凸凹コンビといったところか。突如現れてそうそう、唖然とする空気の中で漫才みたいなやり取りをしている。が、キャスターたち同様に仲は良好なように思えた。
その凸凹コンビの片方、ライダーが両手を上げて高らかに名乗りを上げる。
「我が名は征服王イスカンダル！　此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!!」
周囲は、彼のマスターも含めて唖然とする。
「何を――考えてやがりますか、この馬っ鹿はぁあああああああ!?」
彼の魂の叫びは、皆の心情を代弁していた。
『何あいつ、面白い』
キャスターは別だったが。
『龍之介りゅうのすけー』
『師匠？』
『ちょっと実体化して良い？　面白い陣営がやって来た』
『ん？　あぁ、あのでっかい旦那と小さめな奴か。ほんとだ、面白そう。うん、良いよー』
『やったー』

今まで身を潜めていたキャスターは、嬉々として姿を現した。
◇◇◇
ウェイバー・ベルベットは頭が痛い思いだった。
唐突に己がサーヴァント――――ライダーに『神威の車輪』に乗せられたかと思うと、爆走した戦車はセイバーたちの前に降りた。
そしてあろうことか、ライダーが隠すべき真名をあっさりとバラしたのだ。
思わず叫んだのは仕方ないことだろう。
と――――その時、コンテナの上から何者かが姿を現し、ひらりと地へ舞い降りた。
「あはは！　面白い人だねぇ、征服王って」
涼やかで心地よい声の主を見て、ウェイバーは目を奪われた。
なんて異質で、美しいのだろうと。
「初めまして、サーヴァントとそのマスター諸君」
軽い調子で挨拶するそいつは小柄で華奢だった。きめ細かな肌は褐色で、遠坂邸に現れたアサシンと同じく黒人だ。
だがしかし、まるで違う。
アサシンが常闇に溶け入るような漆黒だったのに対し、こいつが纏うのは七色……あるいは虹色というべきか。
そいつは裾にまで模様をあしらった、極彩色の絹の衣装に身を包んでいる。上は胸前面だけ覆い隠すホルダーネック状のトップス、下は裾の膨らんだ細身のズボンに腰布とスカーフを巻いている。細腕や腰には金と宝石細工の装身具が絶妙な配分で着けられ、絢爛豪華だ。
その衣装に負けず劣らず、本人も派手だった。
膝に達するほど長い髪は水晶めいた透明感で、光にかざされればオーロラの輝きを放つ。薄いベールに覆われている分、神秘性を帯びている。
その下にあるのは、稀代の芸術家が作り上げたような端整な顔。性別は男とも女ともつかず、曖昧だ。そしてどちらでも構わないと思ってしまうほど、美麗な顔貌がそこにあった。
可憐と妖艶を併せもつ眼に嵌っているのは、大粒の宝石。ビーフ・

ブラッドのルビーと、ロイヤルブルーのサファイアである。
子供が悠然と微笑めば、左頬の幾何学的な刺青が、笑みに合わせて妖しく歪む。その僅かな動きにすら、魅了される。
煌びやかで、色鮮やかで、神々しい。
周囲の空気すら、そこらの一般人とは別格に思えた。
あんな存在が、今だかつていただろうか。
「ほぉ……これはまた随分と、めかし込んだ奴だのぉ」
顎鬚を擦りながらのライダーも、子供に見えるそいつの姿に驚いているようだ。声音に感嘆が滲んでいる。
他のマスター、サーヴァントも同然だ。
中でも、ランサーは動揺が強かった。深緑の美丈夫は、その整った顔に驚愕と唖然を浮かべ、震える己の足を見下ろしていた。
あのランサーが己の意志に反して、眼前の極彩色に屈しかけているのだ。ウェイバーには手に取るように分かった。
何故なら、自分もその状態にあったから。
目の前の絶対的存在に、肉体が平伏せんとしているから。
「しっかりせい、坊主」
ライダーが、隣に立つ己がサーヴァントが、惚けて膝をつきかけているウェイバーの首根っこを引っ掴む。そして頬を軽く叩いた。
なんとか、ウェイバーが正気に戻る。ライダーの腕を叩いて持ち上げられた体を下ろさせ、自分の足でしっかりと地に立つ。
改めて見るとやはり圧倒感を受けたが、耐性がついたらしい。先ほどのようにはならなかった。
「そこのちんまいの。キャスターのクラスと見るが、出会いがしらに余のマスターを屈服させようとするのは止してもらおうか」
いつになく、鋭い視線を投げかけるライダー。
「……うにゃ?」
視線を向けられた子供は、きょとんと、不思議そうな顔で首を傾げる。
心底、何のことかと言いたげに。
「確かに僕はキャスターだけど、そんなことしたつもりはないよ?」

「……まことか？」
「勿論。君が面白そうな奴だから出て来ただけで、彼を潰すつもりなんかなかったもん。大体、初対面に自己紹介もなく、そんなことする理由ってある？」
「ふーむ……そりゃなんとも、厄介な奴だのぉ。お主は」
誤魔化しやはぐらかしのないキャスターの言葉に、ライダーはボリボリと頬を掻く。精悍とした顔は、少々渋い。
当然だろう。それはつまり、目の前のキャスターは己の意志に関係なく、他者をひれ伏せさせるだけの圧倒的カリスマを持つということなのだから。
この中で誰よりも小さな矮躯と、裏腹にだ。
「まぁ、悪気はなかったというのなら仕方あるまい。今回は許すとしよう」
「ども～」
キャスターの返答は大分ゆるかった。見た目相応に子供っぽいようだ。
「ところで、この二人の決闘に乱入して名乗った理由は何？」
矢継ぎ早に、自分が思うままに喋るところも幼さを強調する。
「……それは俺も気になっていた」
子供の後に続く、美丈夫。こちらもキャスターによる屈服に勝ったらしい。ランサーは整った顔に険を込め、ライダーを一瞥する。
「何の用だ、征服王。理由もなく一騎打ちに水を差したとなれば、ただでは置かんぞ」
「なに、簡単なことよ」
一呼吸置くと、ライダーは簡潔に言い放った。
「ひとつ、我が軍門に降りて聖杯を余に譲るつもりはないか？　さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征服する快悦を共に分かち合う所存である」
言い終えたライダーは、セイバー、ランサーの順に目をやった。配下に出来るタマではないと思ったのか、キャスターは無視された。
しばしの沈黙の後、二騎のサーヴァントが言葉を返す。

「その提案は承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは今生にして誓いを交わした新たなる君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」
「そもそも。そんな戯れ言を述べ立てるために貴様は、私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？　戯れ言が過ぎるぞ」
　誇り高き騎士姫と槍騎士は怒り心頭のようだ。彼らからはウェイバーが身を竦めるような気迫が発せられている。
　しかしライダーは暢気に頬を掻くと、
「待遇は応相談だが？」
　と続けて、二人に「くどい！」とばっさり切り捨てられた。
「いやー、交渉決裂かぁ。勿体無いなぁ、残念だなぁ」
「ら、らいだぁぁぁ……」
　拒否されたというのに豪快に笑う己がサーヴァントへ、ウェイバーは弱弱しい声をかける。
「ど～すんだよぉ。征服とかなんとか言っときながら、総スカンじゃないかよぉ……。お前本気でセイバーとランサーを手下に出来ると思ってたのか？」
「いや、まぁ、〝物は試し〟と言うではないか」
「〝物は試し〟で真名バラしたんかい!?」
　ウェイバーの突っ込みスキルは、ライダーのおかげで日々ランクアップしていた。したくなかったのに。
　そんな二人のやり取りを、楽しそうに見ているキャスター。
　ウェイバーに文句を言われるライダーは、そちらに意識をやった。
「もう一つ試しといくか」
「ちょっ!?　お前、いくらなんでもキャスターなんて……」
　慌てて止めようとしながら、キャスターのステータスを見るウェイバー。
　筋力：C　耐久：B　敏捷：A　魔力：EX　幸運：A　宝具：EX
「え、あれ……嘘だろ!?」
「どうした、坊主？」

驚いた様子のウェイバーに、ライダーが訝しげに声をかけてくる。
「あの派手なキャスターのステータス、三騎士並に高いんだよ！　魔力と宝具に至ってはＥＸだっ!!」
「ふぅむ。マスターが優れた魔術師なのか、知名度が桁違いに高いのか……」
魔術師のクラスたるキャスターはサーヴァントの中では弱く、外れクラスと称されることもある。平均ステータスは、アサシンにも負けるレベルだ。最弱のクラスと叩かれることだってある。
そんな今までの常識を破壊する、アラビア風の出で立ちをしたキャスター。一体どれほどの実力者なのだろうかと、ウェイバーは生唾を飲み込んだ。
対するライダーは、キャスターらしからぬ強さがお気に召したらしい。
「能力が高いのならば好都合というもの。キャスターよ、お主、余の軍門に降る気はないか？」
「良さそうではあるね～」
「はぁっ!?」
他二人とは違い、好意的な反応を返すキャスター。ウェイバーは先ほどから驚かされっぱなしだ。
先ほどから口数少ないセイバーすら、思わず制止をかけるほどだ。
「キャスター……正気か？　貴殿もまた聖杯戦争に参加するため、こうして現界したサーヴァントのはず。あのような男の世迷言に乗ると？」
「ん～。僕も僕のマスターも、聖杯に掛ける願いなんてないからねー。くれるんだったら貰うけど、欲しい人が他にいるなら譲るよ。僕たちにとっての聖杯は、その程度の価値でしかないから」
これには周囲も呆然とするしかない。聖杯に掛ける願いがあるから召喚に応じるサーヴァントが、その願望機に望むことがないというのだ。
キャスターは周りの反応にクスクス笑いながら、ニタリと唇を吊り上げる。

「でも、まぁ、ライダーの提案は蹴らしてもらうよ」
「んぅ？　何故だ？　お主、願いがないと言ったではないか」
「うん。僕たちは、聖杯戦争そのものが目的だからね。けど、一応はファラオをしていた身でもあるから、簡単に降ったら駄目なんだよ。かつての国民が悲しんじゃうでしょ？」
「あぁ、なるほど。それもそうだなぁ」
「何納得してるんだよ！　やっぱ結局失敗してんじゃないか！　少しはカリスマＡランクを発揮しろよ!?」
　切れまくるウェイバーを、やはり愉快そうに子供は見ている。
「まぁそれだけが理由じゃないよ。ライダーたちとは対戦相手でいたいんだ。一つの景品を求めて対戦するゲームなんだからね」
　言って、キャスターは仰々しく両手を上げる。
「そんじゃあそろそろ、この場にいるもう一人の英霊様にもご参加頂こうか」
「え？」
　美貌の子供は、その他の参加者たちが戸惑うのを無視して、続ける。
「さて――――今、我々を閲覧なさっている、偉大なる英雄王。始まりにして最強の王、ギルガメッシュ王。その高貴なお姿、御拝謁願えませんかね？」

006

呼びかけに応じて、誰かが街灯の上に姿を現す。
それはキャスターとは違う意味で、絢爛豪華な男だった。なにせ髪も鎧も耳飾りも含めて、黄金である。鍍金掛けで誤魔化した安作りではない、重厚な輝きを放つ本物の金。
精悍と端整を併せた顔、そこに収まる瞳だけがガーネットの如き深い紅。
サーヴァントはそれぞれ、独特の空気を纏っている。
セイバーならば毅然。
ランサーならば颯然。
ライダーならば轟然。
キャスターならば悠然。
そして男――――遠坂時臣の召喚したアーチャーは、傲然。
どこまでも尊大で、ふてぶてしく、目に映る全てを見下ろしている。
キャスターの呼びかけに、アーチャーが応じた。
ならば奴が、ギルガメッシュ。
古代ウルクを治め、統括した英雄王。
原初の王にして神殺しと謳われる、最強の男。
ウェイバーはド肝が抜かれる思いだった。
英雄の中で最も優れた一人であろうアーチャーに。
そんな英霊を召喚してみせた遠坂時臣に。
そして、正体不明であったアーチャーの正体を容易く当てたキャスターに。
肝が抜かれるどころか、心臓ごと潰されかねない気すらした。
「……そこの矮小な雑種よ」
緊張感から静寂が立ち込める中、ウェイバーたちを見下すように立つアーチャーが、小さなキャスターに視線を定めて口を開く。
その唇の端は、緩く吊りあがっていた。
「我が真名を識る賢しさ、そこらの有象無象と違うようだ。褒めてつかわす」

「王の中の王からの賛美、感謝感激の極みだよ。ギルガメッシュ王」
人を容易く怒らせそうな上から目線だというのに、キャスターはまるで堪えた様子はなく、微笑を浮かべて応じた。下がった目尻は、彼の言動を微笑ましげにしてさえいるようだ。意外と精神年齢は高いのかもしれない。
「だが、何故我がここに居ると暴いた？」
「簡単だよ、英雄王。王にして冒険家であった貴殿が、あんなつまらぬ八百長をやらされて満足出来る訳がない。ここで繰り広げられた見事な一騎打ちに、心惹かれて訪れる可能性が高いと踏んだんだ」
「フッ……、キャスターのクラスで召喚されるだけあるな。その矮躯による不利を補うだけの知恵を、持ち得ているとみる」
片や黄金色、片や極彩色のド派手なサーヴァントたちは至極当然とばかりに会話している。だがウェイバーを含めた一同は、その会話の内容にまるで追いつけない。完全に置いてきぼりだ。
それに焦りを感じたセイバーが、キャスターに声を掛けた。
「待ってくれキャスター。貴様はなぜアーチャーの真名が分かった？
それに八百長とは一体どういう……」
「あぁ、そのこと？　簡単だよ。アーチャー陣営とアサシン陣営は手を組んでいて、アサシン側が早々に脱落したと見せかけて情報収集や奇襲をするために下手糞な演技をしたんだ。そのお陰で、僕はアーチャーの真名に推察を立てることが出来た。向こうのお間抜けマスターには感謝しないとね」
あっけらかんと、当たり前のように答えるキャスター。
やはり一同ポカンと顎を落とすばかりだ。そうでないのは作戦を論破されマスターを貶されたというのに、愉快そうに笑うアーチャーだけである。
ウェイバーたちはもちろん、あのアサシンとアーチャーの戦いを見ていた。
アーチャーの攻撃はまさに圧巻。圧倒的なまでに、そして理不尽なほど高威力の暴虐、蹂躙とまで言えるものだ。
ただし、それはたった一瞬。瞬く間に終わってしまった。

キャスターは、その瞬く間で八百長と真名を見破り、理解したという。
「ちなみにさっきの『脱落したと見せかけて』で察しがつくだろうけど、アサシンはまだ生きてるよ。サーヴァントはまだ七騎いるから」
「何!?」
「ほぉ？　そう断言する理由はなんだ？」
早々に倒されたと思っていたアサシンが生きていると聞き、セイバーたちが驚きの声を上げる。
が、やはりアーチャーだけは笑みを深めて確認を取る。
「だってアサシン、『百の貌を持つ』方のハサンでしょ？　僕のマスターが彼らの姿を複数見つけてるからね」
「……あの不遇な雑種は、実体化したまま行動しているのか？」
「よほど見つからない自信があったんだろうね」
「……ふ、は、ふはははははっ！　自信満々の割に滑稽過ぎるぞ！　脱落した振りをするなら、暗殺する時まで霊体化しておれば良いだろうに!!」
「あの杜撰さは本人たちか、マスターの命令からしてるのか……どっちだろうね」
「どう考えても時臣だろう！　八百長といいアサシンの扱いといい、時臣は我を笑い死にさせたいのかっ」
と言いながら、腹を抱えそうなほど大爆笑する英雄王。アサシンはおろか己のマスターすら扱き下ろし、笑いの種にする始末だ。
が、真名も策も看破するキャスターに、その他大勢は冷や汗だった。
「……ふむ。さすがは魔術師のサーヴァント、といったところか。ちんまい割りに、とんでもない洞察力と分析能力の持ち主ときた。……配下に加えられなんだことがちと惜しくなってきたなぁ、これは」
赤毛を掻きながらのライダーの呟きに、ウェイバーは賛成だった。
見た目に反する明晰な頭脳と知識量。それだけでも十分脅威であるというのに、そこに桁違いなまでの魔力が加わるのだから恐ろしい。
己が力を存分に発揮出来る『工房』から自ら飛び出て、敵対する英

雄たちが集う場へ舞い降りた型破り――――なるほど。暗黙に定められた掟を無視し、現れるだけのことはある。今までキャスターに貼り付けられた最弱のレッテルを、こいつは易々と引っぺがす実力者なのだ。

そして工房外であっても、奴は強い。中で戦えばどれほどの強さとなるか。底が知れない。間違いなく、この聖杯戦争において一番の難敵といえよう。

他の陣営も同じ結論に至ったのか。セイバーとランサーは武器を構え、キャスターからじりじりと離れて間合いを計る。

騎士姫たちの様子に、笑みを浮かべるばかりの英雄王と子供。

そこに、黒い人型のナニかが現れた。

それはまるで呪いのような存在だった。

アサシンと同じで非なる黒をまとう、紫紺に近い色の甲冑と剣の兵士。顔を兜で隠したそいつは、しかし身に染みて感じるような狂気を撒き散らしている。

バーサーカー。

狂戦士と名づけられた彼のクラスは、本来は弱いサーヴァントを狂化でステータスアップさせて戦う。その分命令を効かずに暴れ回り、魔力を枯渇させてマスターを死に至らしめることさえある自滅を孕んだクラスだ。

たがこのバーサーカーも、キャスター同様に例外だった。

戦を経験したことのないウェイバーとて分かる。あのサーヴァントは、決して弱小な英霊などではないと。

「なぁ征服王。あいつには誘いを掛けんのか？」

「誘おうにもなぁ。ありゃぁ、のっけから交渉の余地がなさそうだわなぁ」

ランサーにそう返しながら、征服王は話し相手をウェイバーへ移行させる。

「で、坊主。サーヴァントとしてはどの程度のものなんだ？　あやつは」

「分からない……」
ライダーの問いに、信じられないという顔をしながら言うウェイバー。目を凝らし、バーサーカーらしき紫紺のステータスを見ようとする。
だが、出来ない。
「あいつ、ステータスも何も見えないんだよ……っ」
「ふぅん。ステータスを隠す、幻影系のスキル……いや宝具持ちってことか。西洋甲冑を身につけている点から、ヨーロッパ系の出身なのは確実だね。その中から、姿や素性を隠して行動した逸話のある英雄を絞り込めば……」
いつの間にか隣にいたキャスターが、紫紺の狂戦士を眺めながらブツブツと検索を始めていた。紅と蒼の目で冷えた視線をバーサーカーに投げかける。バーサーカーは己に向けられた科学者めいた視線を無視し、アーチャーたちの方を向いている。
「どうやら、あれも厄介な敵みたいね」
「五人を相手に睨み合いでは、迂闊に動けません。しかしあの鎧、どこかで……」
セイバーとそのマスターが、小声で相談し合っている。
「セイバーは多分、ブリテンの騎士王だよね。そのセイバーが知ってるなら、可能性として高いのは円卓の騎士か……パッと思いつくのは二人なんだけど。あいつはどっちだろ」
姫騎士の言葉を聞き取ったキャスターの呟き。もう既にバーサーカーが誰であるのか、確定の寸前に至っている。ウェイバーは改めて、隣にいるキャスターの厄介さを痛感した。
と、底冷えする殺意の声が響く。
「……誰に許しを得て我を見ている、狂犬」
声の主はアーチャーだった。先ほどまで笑っていたはずの英雄王は、その真紅の眼で不快げにバーサーカーを一瞥している。
同時に、彼の背後にある空間が歪んだ。
歪みから引きずり出されるのは剣と槍。どちらも一目で宝具と分かる。

「せめて散り様で我を興じさせよ。雑種」
吐き捨てんばかりに出たのは、死の予告。
アーチャー……ギルガメッシュはサーヴァントの切り札たる宝具を、矢のように発射した。狙うは無論、紫紺の狂戦士。バーサーカーは回避しない。する間もない。二つの武器の着弾箇所は盛大に爆ぜて、爆煙を巻き起こす。
アサシン同様、呆気ない幕引き。
――――かと思えた。
「奴め……本当にバーサーカーか？」
「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのぉ」
「あははっ！　モードレッドかと思ったらそっちか!!」
ランサーは驚いたとばかりに、ライダーは顎を擦り感心しながら、キャスターはケラケラと笑いながら、揃ってバーサーカーのいた爆心地を見ている。
彼らの言葉の意味が、ウェイバーにはさっぱり分からない。
「ど、どうしたって言うんだよ。一体」
「分からんか、坊主」
征服王はほれ、と指差す。
そこにいるのは紫紺のバーサーカー。驚いたことに、奴は無傷だった。その手には先ほど放たれた黄金の剣が握り締められていた。槍は見当たらない。
「ま、まさか……嘘だろ？　冗談だよな？」
「冗談ではないぞ。奴は一撃目の剣を避けて掴み取ると、第二撃の槍を打ち払ったのだ。……キャスター。お主、あやつの真名に察しがついとるようだが。バーサーカーは何者だ？」
「何バーサーカーだろうねぇー？」
ライダーに問われた極彩色は、意地悪い笑みでとぼけてみせる。
「うぅむ……教えてくれんのか。つれない奴だのぉ」
「何でもかんでも人に聞いてたら、悪い人に嘘八百教えられるかも知れないよぉ？　君のマスターだって分析能力に長けてるんだ。彼と一緒に考えてみたら？　謎々は、自分で当ててこそのものだよ」

ライダーは上手く言いくるめられ、「うむ、それもそうか」と納得する。ライダーたちの回りだけはやけに明るい。
が、その和やかさは忌々しげな声で塗り潰される。
「その汚らわしい手で、我が宝物に触れるとは……そんなに死に急ぐかっ、狗っ!!」
アーチャーの紅い瞳には燃え滾るような怒りが宿っている。憤怒の眼差しが向けられているのは、バーサーカーと、バーサーカーの握り締めた剣。
あれはアーチャーの宝具。英雄王ギルガメッシュが世界を駆けて手に入れ、その手で宝物庫に納めた宝の一つ。
最古の王が所有する、紛れもない一級の宝。
それを血に飢えて狂う匹夫が、我が物のように握っている。
あれはギルガメッシュのものだ。
他ならぬ最強の王のものだ。
許可なく手に取り、まして振るうなど言語道断!
王の宝物を奪い我が物とばかりに扱うなど、万死に値する!!
「そんな……馬鹿な……」
ウェイバーは、恐怖のあまり言葉を零す。
こめかみに青筋を浮き立てた英雄王の背後には、光り輝く宝剣、宝槍の数々が出現していた。一つひとつが全て、優れた武器であり宝具であると如実に分かる。まさに世界の秘宝、最高の切り札である。
それら全てを背に配し、君臨するウルクの王が怒声を上げる。
「その小癪な手癖の悪さを持ってどれだけ凌ぎきれるか……見せてみよ!」
アーチャーの言葉を合図に、宝具の一群が射出される。
バーサーカーは逃げる動作も防ぐ動作も見せず、英雄王より奪い取った剣を構えて、迎撃体勢に移った。

007

宝具の群れが暴れまわる。投擲された武器は立ち並ぶコンテナに牙を向き、鋼鉄の巨大な箱を貫き、砕く。一つ一つが必殺の威力を誇る刃たちは、地面ごと容赦なく破壊していく。

だがしかし、アーチャーの武器たちは本来の獲物――――狂戦士のサーヴァントには届かない。

バーサーカーの戦う様は、在り得ない。その一言に尽きた。

嵐の如く、ゲリラ豪雨に勝る攻撃を、バーサーカーは全て凌いでいく。手に持った剣で防ぎ、弾き飛ばし、回避し、掴み取る。理性なきバーサーカーに理性はない。あったとしても、音速に近い速さで降り注ぐ攻撃に一々考える暇などない。

反射神経でそれをしているのだ。

体に染み付いた感覚だけで、英雄王の蹂躙から身を護っているのだ。

まったくもって、在り得ない。

「英雄王は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いのとの相性は最悪だな。黒いのは武器を拾えば拾う分だけ強くなる」

「手にした武器を自分の物が如く使いこなすのが、彼の特技なんだよ。ギルガメッシュ王は、ちょっと頭に血が昇っちゃってるみたいだねぇ。融通が利かなくなって、深みに嵌っていっちゃってるよ」

ウェイバーを挟むように並んでいる二体のサーヴァントが、各々に分析した内容を口にする。それを聞いていたウェイバーは、不意に爆音が止んだのと風切り音が響き渡るのを耳にした。不可解さに、眉を寄せる。

二つの不可解さの理由は、すぐに分かった。爆音が止んだのはアーチャーが出した武器が無くなったから、そして風切り音は手にしていた剣をバーサーカーがアーチャー目掛けて投げたからだと。

クルクルと回りながら飛来する刃は、アーチャーが足場とする街灯の柱部分を両断した。ずるりと崩れ落ちる足場から跳び、彼は地面に着地する。

黄金の鎧を纏っているとは思えぬ俊敏さを見せたアーチャーは、鎧がガシャリと鳴る程身を震わせた。
「痴れ者が……っ」
零れたのは怒りの言葉。
「天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ！」
顔を上げた眼は見開かれ、ありありとした怒りの炎が燃え滾っている。
全身から立ち上る怒気は、ライダーの言葉に不快感を見せたセイバーやランサー以上のものだ。
「その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残さぬぞ!!」
彼が叫んだ途端、先ほど以上の数の宝具が展開される。
そのあまりの多さに誰もが息を呑んだ。そうでないのは「あーあ」と、どこか愉快げに呟いたキャスターだけだ。ライダーですら、目を見張るほど在り得ない光景ということだろう。
英雄王ギルガメッシュ。
世界中の宝をその手に収め、己の庫に納めたという最古の王者。その逸話は知っているが、それでもこの宝具の数は異常だ。威力も異常だ。
桁の違い、というものを思い知らされる。
あんな数が投げられるのか、と身を強張らせていると――――アーチャーがピタリと身動きを止めた。
それから、機嫌悪く吐き捨てる。
「貴様如きの陳言で、王たる我の怒りを鎮めろと？　大きく出たな、時臣」
不満ではあるが、納得はしたのだろう。アーチャーは展開した大量の武器を消し、鼻を鳴らしながらバーサーカーを一瞥する。
「命拾いしたな、狂犬」
同じ大地に立っていようと、アーチャーの傲慢不遜な態度は変わらない。彼は己のとバーサーカーを除いた、他サーヴァントたちへと視線を投げかける。

「雑種共、次までに有象無象を間引いておけ。我とまみえるのは真の英雄のみで良い」
英雄王はどこまでも尊大に言い放つと、霊体化してこの場から去った。
呼吸すら奪うような威圧感が一気に掻き消され、ウェイバーは大きく息を吸い、乱れた呼吸を整える。
「フム。アレのマスターは、あやつほど剛毅な性質ではなかったようだな」
「その分、お間抜けで甘ちゃんだけどねー」
こいつらの心臓には毛が生えてるのだろうか。ライダーとキャスターはニヤニヤ笑いながら暢気そうに告げる。
「何笑ってるんだよ！　まだバーサーカーが残ってるんだぞ!?」
「心配するな、坊主。次の相手は、どうやら決まってるようだぞ」
「え？」
「というより、今の彼には彼女しか見えてないんじゃない？」
……彼女？
ウェイバーの頭の中に、女に分類されるサーヴァントは一人しかいない。残るサーヴァントは何れも男だ。キャスターは性別不明だが、奴の口振りから『彼女』はキャスターではなさそうだ。
見やれば、紫紺の狂戦士は、兜を被った顔をセイバーへと向けている。奥でギラギラと輝く双眸は、最初からお前が狙いだと言わんばかりに姫騎士を見つめている。
聞こえる唸りはか細く、地を這うが如く低い。ゾッと背筋を冷たくさせるような、掠れた亡霊の声音。
そう思っていた途端、立ち止まっていたバーサーカーが行動を再開させた。素早く手に取ったのは、二メートルほどの長さの鉄柱。先ほど切り落とされた街灯の柱部分だ。
「Ａ――ｕｒｒｒｒｒッ!!」
咆哮。
それと共にセイバーへと振るい降ろされる金属柱。
片手が使えぬセイバーは突如として襲い掛かる攻撃に目を丸くし

ながらも、重い一撃を目に見えぬ剣で防いだ。
本当の意味での、狂戦士の暴走が始まった。
◇◇◇
ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、口元を綻ばせて笑った。
隠すべき真名を晒したライダー、圧倒的知力を発揮するキャスター、最強の英雄たるアーチャー、卓越した武芸を見せるバーサーカー……予想外の人物たちにより場は二転三転としていたが、現状は好ましい方向に進んでいた。
最優と謳われているセイバーは現在、単身で暴れ狂う狂戦士と打ち合っていた。バーサーカーとは思えない程洗練された攻撃を凌いでいるが、ランサーの宝具で左手を封じられ、腕一つで戦うしかないセイバーの勝率は低い。手負いの状態で勝てるほど、あのサーヴァントは弱くない。
どうやらあのバーサーカーは、手にした物を擬似的に宝具化させる力を持つらしい。ただの鉄柱一本で、セイバーを押している。あのアインツベルンの召喚したサーヴァントが、不利に陥っている。御三家のひとつが初日にして脱落せんとしているのだ。ケイネスの口元は自然と釣り上がるのもさもありなんというところだろう。
アーチャーはマスターの命令で撤退し、ライダーとキャスターは傍観する姿勢を見せている。御三家とはいえ一介のマスターでは、ゲイ・ボウによる傷を治すこともバーサーカーを戦闘不能にすることも出来まい。セイバーの敗北は決定されているようなものだ。
だというのに、それを邪魔するものが一人、現れる。
激しく打ち合う両者の間に入り込み、そいつは卓越した槍捌きを用いて、狂戦士の攻撃を弾き飛ばした。
体の線に沿った深緑の衣に、必要分だけの防具。
ややウェーブがかった髪を後ろに撫でつけ、右目の下に呪いの黒子を持つ秀麗な男。
「悪ふざけはそこまでにしてもらおうか、バーサーカー。そこのセイバーにはこの俺との先約があってな。これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ」

「ランサー……ッ!!」
絶好の好機を崩さんとする不届き物。
それはよりによって、己が召喚したサーヴァントだった。
ディルムット・オディナ。彼の美しき騎士は伝承通りの高潔さを持つ。だがそれは、ケイネスにとっては余計なものでしかなかった。
ケイネスにとってサーヴァントは使い魔。主の命令に従い、主のために行動すべき存在だ。それが人としての心、まして騎士道などというものを持っていることは邪魔でしかない。
そもそも、ケイネスはランサーを信用してはいなかった。ディルムットは主君の妻を寝取り、裏切った男だ。ソラウという愛しの婚約者を持つケイネスに、異性を魅了する黒子を持つランサーを信頼する余地などない。彼の掲げし忠義や騎士道すら、信じられるかどうか。
ケイネスは声帯に指先を宛がい、潜伏場所がバレぬように魔術で声の拡散を行う。
『何をしているランサー。セイバーを倒すなら、今こそが好機であろう』
「……っ!」
現在の主の言葉に、ランサーは息を呑んだ。
それからすぐに、その秀麗な面を上げて進言する。
「セイバーは、必ずやこのディルムット・オディナが誇りに掛けて討ち果たします! 何となれば、まずはそこな狂犬めを先に仕留めてご覧に入れましょう」
ディルムット・オディナはどこまでも高潔で澄んだ心をしていた。
「故にどうか、我が主よ! この私とセイバーとの決着だけはどうが尋常に……ッ!!」
ランサーは声を震わせ、己が主君に乞うた。
好敵手と認めた相手には、最大の敬意を示す。ランサーは騎士王たるセイバーをサーヴァントの中で一番の好敵手と認めていた。
だからこそ正々堂々刃を交え、誉れ高い一騎打ちにて決着をつけたいのだ。
このような結果で、セイバーから勝利を手にしたくはないのだ。

それは最も忠義に飢え、誠実かつ真摯でありたいディルムットの数少ない願いであり想いだった。
だがそんな騎士としての思いなど、魔術師たるケイネスが知ったことではない。ケイネスは序盤で使うのは惜しいと思いながら、手の甲を見やる。
『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪を持って命ずる』
告げた途端、手の甲に刻まれた赤い紋章の一角が消える。
魔術で視力を強化し、ランサーの顔を見やる。女を惑わす甘い美貌には無念そうな表情が浮かぶ。槍を手にセイバーへと襲い掛かる様を見て、ケイネスの溜飲が少しばかり治まった。愛する婚約者を誑かすかもしれない男への同情など、ケイネスには欠片も思い浮かばなかった。
そうして、ランサーとバーサーカーは並び立つ形で、セイバーとの距離を少しずつ縮めていく。二対一となったセイバーの可憐な顔に、苦々しさが覗き見えるようになった。
「……アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に、せめて貴女だけでも離脱して下さい。出来る限り遠くまで」
淡々としたセイバーの言葉は、けれど自分達の状況が切迫していることを証明していた。ケイネスは勝利が確実な物になったと確信する。
そのとき、
ぞくりと、
言いようのない怖気を感じた。
「……ッ!?」
今まで感じたことのない、純粋かつ強烈な悪意を感じ取り、ケイネスはいきなり谷底へ叩き落されるのに似た恐怖を覚える。
全身に絡みつく毒蛇のような、禍々しい視線。一体どこから差し向けられたものかと、視力を強化して出所を探る。
だが、探るまでもなかった。
その眼差しは、どこまでも自然に、そして堂々と向けられていた。

「キャスター……!!」
ライダーの戦車の手摺にもたれる、極彩色の子供。男とも女ともつかぬ奴は神々しい美貌に嘲笑を乗せ、ケイネスに向けて手を振っていた。
左右で色の違う大きな瞳には、姿を隠しているケイネスがハッキリと映し出されている。
――――まさか、居場所が見抜かれている……!?
そんな馬鹿な、とケイネスは小さく呻いた。
ケイネスの魔術迷彩は完璧だ。アインツベルンでさえ居場所を知れぬよう、隠蔽魔術を幾重にも施している。ランサーに命ずる時にも、魔術を用いて声の出所が分からぬようにした。それを見つけ出されるはずがない。
だがしかし、相手はキャスター……英霊として呼び出されるほどに秀でた才を持つ『魔術師』だ。現代ではない、今よりも神秘の強かった時代から召喚されしサーヴァントである。いくらケイネスが優れた魔術師であっても、見破られる可能性はなくもない。
どちらにしろ、まずい、とケイネスは思った。
最大の刃であり盾であるサーヴァント……ランサーは、令呪を用いてセイバーに差し向けた。今のケイネスはほぼ無防備に等しい。今の状態でこちらの居場所を見抜いているキャスターから攻撃されれば、まともな防御が使えない。例え使えたとしても魔術迷彩が解け、他の参加者にも居場所が知れる。一気にこちらが不利になる。
かといって、防がなければ確実に死ぬ。ウェイバー……不肖の教え子の言葉通りなら、キャスターの魔力はEXだ。サーヴァントの対魔力Aを持ってしても防ぎきれぬ、桁違いの魔力。そんな威力を浴びせられれば、一溜まりもない。
もしやキャスターはただ傍観していたのではなく、この瞬間を待っていたのだろうか？
そう考え、悔いるも遅い。後悔が先に立たずとはよく言ったものである。有利な状況になったことに浮かれ、冷静さを欠いた不覚にケイネスは歯噛みした。

それでも三秒に満たぬ速さでどうするべきか考え、退却することを選んだ。そして決断に移ろうとする。

が、

「遅いよ?」

キャスターは鈴の鳴るような澄んだ声音で、ケイネスに言い放つ。

途端、腕と脇腹に言い表せぬ激痛が襲い掛かり、肉の腐る悪臭が鼻粘膜を刺激した。

００８

「ぐぁあああああ……っ!?」

悲鳴。

それは先ほど拡散の魔術で響いたランサーの主のものだった。

「ケイネス殿!?」

今まで身を隠していた彼がよろめきながら脇腹を押さえている。その姿を見たランサーは、驚愕で目を見開いた。

「なんだぁ?」

「さ、さぁ……?」

ライダー陣営も何が起きたのかイマイチ理解出来ず、困惑している。

だがセイバーの耳は聞き取っていた。ランサーの主が悲鳴を上げる前、微かに銃声が鳴り響いていたのを。

同時に、腹の底から怒りが湧きあがっていた。

――――切嗣……貴方という人は……!!

衛宮切嗣。

セイバーを召喚した本当のマスターであり、アイリスフィールの夫。そして騎士たる己とはおよそ相容れぬだろう魔術使い。己が信条のためならば手段を選ばぬ『魔術師殺し』と呼ばれる男。

おそらく片手が使えぬセイバーの不利を立て直そうとしたのだろうが、だからといってランサーのマスターを狙撃するなんて。本来のマスターに怒りを燃やしながら、しかしバーサーカーから目を放すことはしない。

そうしていると、バーサーカーの背後に小柄な姿を見る。

「……キャスター?」

何を思ったか、褐色の肌をした子供は戦車から飛び降り、煌びやかな髪や衣装を舞わせながら軽やかに地に降りた。

同時に、ライダーが何かを感じ取り、目を細める。

「いかん、坊主っ!」

「へ? ――――ぐぇっ!?」

マスターである少年はライダーに思い切り首根っこを引っ掴まれて、蛙が潰れるような悲鳴を上げた。サーヴァントの突然の行動に、当然彼は怒りの声を上げようとする。
だが次の瞬間、彼の居た場所を音速で何かが通り過ぎた。
「なっ、なっ……!?」
怒鳴ろうとしていたマスターは、恐怖で腰が抜けて、へなへなと座り込む。あと一秒でも遅ければ、彼は死んでいただろう。
「つたく、随分と無粋な輩がおるらしいな」
流石のライダーも、これには顔をしかめている。セイバーも同感だった。まさか、完全に無防備なマスターまで狙撃するとは思いにもよらなかった。
だが呆れと怒りは、驚愕と困惑に変わる。
「――――がぁっ……!?」
「ランサー!?」
第三の狙撃。
それはマスターではなく、サーヴァントたるランサーに向けられた。
サーヴァントは戦闘機一機分の強さを持ち、現代兵器が効きづらい。まして三騎士と呼ばれるセイバー、アーチャー、ランサーは対魔力のスキルを保有していることが多く、マスターたちの攻撃は三騎士に対しては通じにくい。
だというのに、狙撃手はランサーを狙ったのだ。切嗣らしくない攻撃だと、セイバーは違和感を覚えた。
そして、もう一つの驚愕。
被弾したランサーの体が、その着弾した部位の皮膚と肉が、腐っている。
対魔力を有しているはずなのに、威力を一欠片も軽減出来ていないのだ。
「一体どういう」
呟きの途中、セイバーは嫌な予感に駆られた。
セイバーはスキルとして直感をAランクで保有している。ほぼ未

来予知の域にあり、視覚・聴覚が遮断されていようと発揮される。
　そのセイバーの直感が、警報を鳴らしていた。
「ッ――――――アイリスフィール!!」
「え？」
　セイバーはバーサーカーの攻撃を弾き飛ばし、すぐさまアイリスフィールの元へと駆け寄った。一体どうしたのかと目を丸くする彼女を押し、今居る場から離れさせる。
　直後、左肩に激痛。
　そして腐臭。
「ぐっ……!!」
「セイバー!?」
　尻餅をついたアイリスフィールは、左肩を抑えて悲鳴を噛み殺す姫騎士の下に慌てて近寄り、その肩の傷を見て息を呑む。
「セイバー、肩が、腐って……!?」
　慌てて治癒魔術を掛けるアイリスフィール。
　怪我を癒してもらっているセイバーは、先ほど淡く軽蔑の感情を向けてしまった本当のマスターに内心で謝罪していた。
　切嗣はセイバーたち英霊を嫌っている。己がサーヴァントたるセイバーと会話をしないどころか、己の視界に入れようともせず、妻をマスターに見せかけて別行動を取るような男だ。
　だが伴侶たるアイリスフィール、そして子のイリヤスフィールへの愛情は本物だ。彼は心から自分の妻子を愛している。
　そんな彼が、愛する妻へと銃口を向けるわけがない。
「アイリスフィール……ッ、気をつけてください。切嗣と同じく、銃を使う魔術使いが居ます」
　それも、切嗣以上に凶悪な使い方をする魔術使いだ。しかも対魔力を保有するサーヴァントにもダメージを与える程の存在である。
　それを聞いたアイリスフィールの顔に、冷たい汗が滲む。彼女は狙撃手の次なる攻撃に警戒を払いながら、セイバーの傷を癒す。
　と、
　重々しい甲冑の足音が、近づく。

「A――urrrrr……ッ」
セイバーがどんな危機的状況であろうと、理性を失った狂戦士には関係のないことだ。霧と共に紫紺を纏うバーサーカーは、鉄柱を手に歩み寄る。
治癒を掛け続ける彼女を制し、セイバーは再び剣を構えようとする。幸い、腐敗の銃弾を受けたのは左側。そちらはゲイ・ボウによって剣が握れない状態だ。まだ剣は振るえる。
「くっ……！」
セイバーは立ち上がると、バーサーカーは擬似宝具となった武器を大上段に構えて飛び掛った。
――――赤い一筋の閃光が、そんな彼を吹き飛ばす。
「なっ!?」
「今のは……」
横から跳んできた、予期せぬ攻撃。二人は唖然とし、地面に転がるバーサーカーと、バーサーカーを吹き飛ばした人物を交互に見た。
それは深緑の槍騎士でなければ、赤毛の豪胆な大男でもない。
膝にまで達する長い髪は、オーロラ色に輝くプラチナブロンド。
超然とした美貌の中央には、鮮血のルビーと水面のサファイア。
唇が三日月の如く釣り上がるに合わせ、幾何学的な刺青が蠢く。
「ガンド撃ちは専門じゃないけど、それなりには使えるんだよ？」
背や腹を露出した異国の衣に身を包む子供――――キャスターは、うっそりと酷薄な表情を浮かべ、突き出した右手の指を銃に見立てて悠然と佇んでいる。
禍々しい感情を宿す瞳は、起き上がるバーサーカーを映す。
「■■■■■■■ーーー!!」
真横から攻撃を受けた狂戦士は、攻撃対象を姫騎士から子供へと移したらしい。鉄柱を拾い直し、クラスに似合わぬ洗練された剣術でキャスターへと襲い掛かる。
無手のキャスターは迫り来る狂戦士の姿に、ますます笑みを深めた。

在り得ない。そう思ったのは、今日で何度目になるだろうか。
バーサーカーの攻撃を軽やかに避けるキャスターの姿を見ながら、セイバーは思う。
バーサーカーの攻撃は、理性を失ってなお美しく流麗だ。そして無駄がなく素晴らしい。紫紺の狂戦士の振るう剣檄は、驚異的であり脅威なものだ。
「あはははははははっ！」
キャスターは笑いながら、それを回避する。
目にも鮮やかな髪や布を舞わせながら、踊るように避けていく。
当たるどころか、掠る様子すらなかった。
「これは一体、どういうことなのでしょうか」
ライダーのマスターの情報だと、キャスターは三騎士に近い高ステータスを持つという。
しかし、バーサーカーの実力がそれに劣るとは思えない。しかも狂化でステータスをランクアップさせているのだ。総合的に見れば、魔術師のキャスターより狂戦士のバーサーカーが勝っているに違いない。
だが彼の攻撃は、あの麗しいファラオに傷一つ与えられていない。どころか身につけた衣を汚すことさえ出来ていないのだ。それはおかしい。
どうしてなのかと考えながら、両者の戦いを眺める。いや、戦いとは言い難い。戦いと言うよりも――――遊戯。キャスターがバーサーカーで遊んでいると表現するのが、一番適するだろうか。
「■■■――――！」
「あはははっ」
咆哮と共に振り下ろされた攻撃を、キャスターは笑みと共に回避。
それから、バーサーカーの武器を振るう腕に片足を絡める。絡めた足を軸にして、身を捻ると同時に――――蹴撃。ダンスで用いるような靴の爪先が狂戦士の兜を強かに叩いた。
「――――■……■■■ッ」
蹴りによる衝撃で頭を振るバーサーカーは、腕に足を絡めた子供を

払い除けようとする。だがキャスターは籠手をした腕からひらりと身を逸らし、もう片方の足を首に絡めて、腕から背後へと移動する。
「あはっ」
己の良い様にされるバーサーカーを面白がりながら、子供は兜をした後頭部に人差し指を突きつけた。
指先に赤い輝きが閃き、光が兜を殴る。
――――ガンド。
元は北欧のルーン魔術の一つで、幽霊離脱をして自由に飛翔する魔術だ。
だが相手を人差し指で差して体調を崩すものは共感魔術『ガンド撃ち』と呼ばれる。
更に、直接的ダメージを与える上位ガンドは『フィンの一撃』と称される。
しかし、キャスターの放つそれは一撃というより、ガトリングと形容すべきものだった。
「あはははははっ!!」
キャスターはケタケタと笑い声を上げながら、バーサーカーにフィンのガトリングを喰らわせる。狂戦士は何とか極彩色を己から外そうともがくが、その前に子供は手を離れて首や背や腕に移動し、絶え間なくガンドを見舞う。首に回した足で輪を作り、ぐるぐると回転しながらガトリングを放つ様は凶悪だ。
アーチャー……ギルガメッシュに優位だったバーサーカーが、キャスターに悪戦苦闘している。わけが分からなかった。脳が思考することを停止させ、理解を拒絶してしまっているかのようだ。
「こりゃどういうことだ？　いくら能力が並外れているとはいえ、キャスターのはずであろう？　何故、バーサーカーが苦戦しておるのだ？」
傍観していたライダーも、顎鬚を擦って首を傾げている。
だがライダーのマスターは、観察している内に何か気づいたらしい。
「もしかしてあいつ……」

「何か分かったのか、坊主？」
問われた少年は、言いにくそうに口ごもりながらも己の答えを出した。
「……キャスターの奴……多分、バーサーカーの動きを先読みしてる」
「何だと？　そんなことが出来るのか？」
「そんなの僕が知るかよ！　でもキャスターの目が、バーサーカーの関節とか足の動きとか、あと多分だけど……兜の中の視線を見てる……気がする」
彼の言葉を聞き、セイバーたちは改めてキャスターたちに視線を戻す。
――彼の言うとおりだった。
動き回っているため分かりにくいが……笑い声を上げるキャスターの目は、愉快そうに吊り上げられた口や緩んだ頬とは裏腹に、冷静にバーサーカーを観察している。大きなオッドアイはせわしなく動き、狂戦士の眼や関節の動きを注意深く確認している。
バーサーカーが動き始めれば、一秒遅れてキャスターも行動を始める。
それはセイバーの直感とは真逆のもの――紫紺の兵が失った理性や知性を駆使する『知恵を生かした』演算型の未来予知。
力では劣るゆえに知力を利用する、魔術師らしい戦い方だった。
「――そろそろ、一発オトすか」
哄笑は唐突に終わりを告げた。
キャスターは首に足を巻きつけた状態で地面に手を突き、ぐっと下肢も後ろへと逸らす。
そうすれば、当然子供に合わせてバーサーカーの体が前のめりになる。狂戦士は何とか体勢を正そうとするが、キャスターはぼそりと何か呟き、行動を続ける。呟いたものは筋力強化のものだったらしい。足に加わる力が強まったように見えた。
そして狂戦士の体が――反転する。
全身を黒い甲冑で包んでいたことが仇になった。バーサーカーは防具の重さもあって体勢を戻せず、頭の天辺から地面に叩きつけられ

た。さらに、重さは速度を増させ、威力を高めた。
バーサーカーはしばらく身じろぎしたが、次第に動きを止めた。そして黒い甲冑姿が溶けるように消える。
アイリスフィールにセイバーは視線を向ける。聖杯の器たる彼女は、サーヴァントが聖杯に捧げられたかどうかが分かる。
残念ながら、彼女は首を横に振った。バーサーカーはまだ消滅していない。実体化が解けただけのようだ。
「ざーんねん、逃げられちゃった」
心底残念には思っていない、明るい声音でキャスターは後ろ手を組む。
最弱のクラスと嘲られてきたサーヴァントが、現戦争において最も能力値の高いサーヴァント相手に、圧倒的勝利を手にした瞬間だった。

009

気が付けば、狙撃手は攻撃を止めていた。二騎が戦っていた間も響いていた発砲は彼、もしくは彼女がバーサーカー退けた頃には、聞こえなくなった。

その頃には、セイバーの肩の傷は癒えていた。迎え討とうとした敵の姿はなく、煌びやかな髪と衣が風に吹かれてなびく様だけがそこにある。

「キャスター……――――っ！」

あまりにも衝撃的な結果ではあるが、助けられたことには変わりない。子供に礼を言おうとセイバーが口を開きかけた時、黄色き槍が襲いかかってきた。

すぐさま避けて、投槍の主の方へと向く。

「くっ……ランサー」

「すまない、セイバー……」

深緑の槍兵は申し訳なさそうな顔で謝罪し、姫騎士になお槍を向けている。令呪によって身を縛られている今の彼は、ゲイ・ジャルグでセイバーを打倒するためにしか動けないのだ。

そんな彼の様子にキャスターは、ランサーとそのマスター……ケイネスを交互に見やる。と、ぼそぼそっと何を言ったか聞き取れぬほど高速で呟いた。

呟きは二種。どちらも魔術の詠唱だった。片方は召喚系であるらしい。もう片方の魔術が姿を消すものであったようで全貌は窺えないが、ガラスを引っ掻くような不快な鳴き声が聞こえた。

呼び出されたそれは巨体な上に飛行するようで、羽ばたく音と共に旋風が巻き起こり、バーサーカーの用いていた鉄柱が転がる。

「そこの二人を捕らえたら、頭上辺りの空で待機しておけ。間違っても、白痴の王がいる所へ飛んで行くんじゃないぞ。破ったら夜鬼も呼ぶからな」

静かな、王たらんとする者の声で、キャスターがナニカへと命じる。

命じられたナニカはまたもや不快な鳴き声を上げた後、ランサーの

体が宙に浮いた。
「何だ!? このっ、放せ……姿を見せぬとは卑怯なっ」
「見せてもいいけど、ドアップで見たら気を失う程度じゃすまないよ？」
自身を捕らえるナニカへ叫んだ美丈夫に、ナニカの代わりに極彩色が返す。その後、ナニカはケイネスの元へと向かい、彼も同様に捕らえた。
二人を捕縛したナニカはキャスターに言われた通り、子供の頭上にある空で浮上したらしい。ランサーたちが羽ばたく音に合わせて上下に揺れる様子は、傍目で見ると心臓に悪いものだ。誤って落下しないかとひやひやする。
「安心しなよ二人ともー。話が終わったら、君たちの負った怪我はちゃんと治してあげるからさ」
暢気に投げかけられる言葉は、あまりにも予想外のもので。
「治す、とは？ どういうつもりだ、キャスター」
「その通りの意味だよ。彼らの負傷は、綺麗サッパリ治すんだ。僕は失くした手足だって再生出来るし、死者蘇生の魔術も習得してるからね」
「死者蘇生……」
そんなことまで可能なのか。と、アイリスフィールが息を呑む。いや、息を呑んだのは彼女だけではない。誰もが戦慄を覚えているだろう。
死した人間を蘇らせることが出来る。
つまりそれは、マスターを殺したとしても消滅する寸前であれば蘇生出来るということだからだ。身を隠している切嗣はキャスターを倒せぬならマスターを倒そうと考えているだろうが、それも困難を極めるということになる。
まったくもって厄介な陣営だ、キャスターたちは。
ライダーも同じ考えに行き着いたのか、顎を撫でて眉根を寄せている。
「死んだ者すら蘇らせるとはのぅ……しかし。なんだ、お主。絶好の

機会だというのに、ランサーを倒さんのか？」
「だって、今倒したら勿体無いじゃん」
「……勿体無い？」
思わず、怪訝に呟いてしまった。
それだけキャスターの答えは、セイバーにとって信じられないものだった。
負傷したサーヴァント、もしくはマスターを打倒する。セイバーならば騎士道に反するために行わないが、魔術師のキャスターが騎士道など意に介することはない。今の状況を好都合と考え、攻めるに違いないと思っていた。
しかし、実際は真逆だ。キャスターは彼らを潰すどころか、受けた傷を癒そうと考えている。
しかも、その理由が『勿体無い』から、である。
一体なにが、勿体無いというのだろうか。怪訝に思うのも仕方ない。
「キャスター。貴様は何が勿体無いというのだ？」
「だって、まだ初日だよ？　初日で、聖杯戦争が始まったばっかりだっていうのに、勿体無いじゃない。今からこのゲームを楽しく遊ぶっていうのに、いきなりプレイヤーが欠けるなんてさ」
キャスターの主張が、まるで分からなかった。
子供の主張が意味不明に感じたのは、アイリスフィールも同様だ。赤い瞳には不審が浮かんでいる。
「んー。セイバー陣営はお堅いねぇ……んじゃ、色んな国を征服してきたライダー親方に尋ねるとしよう」
「親方!?」
「おぉ、なんだ？　ちんまいの」
マスターの少年がビックリしているが、親方と呼ばれた当人はけろりとしている。彼は軽く相槌を打って、キャスターの質問を待つ。
「ライダー、君がいる国の近くに二つ城があるとします。一つは平和ボケして警備が杜撰な城、もう一つは手練揃いによる堅牢な城。攻め落としやすいのはどっちかな？」

「そりゃあ当然、前者の方であろう」
「そうだね。……なら、攻め落とし甲斐があるのは？」
「ん？　それならば後者になる……あぁ、そういうことか」
今の簡単な問いかけで、合点が言ったらしい。ライダーはニヤリと笑い、戦車の上からキャスターを見下ろす。
隣のマスターは、眉をひそめたままだ。
「納得がいった。だからアーチャーの真名を当てたり、アーチャー陣営の目論見を暴露したり、バーサーカー相手に圧勝してみせたり……なるほど。他陣営の警戒心を煽る真似をしておると思ったら、そういう狙いがあったわけか」
「な、何だよ？　何一人で納得してるんだ？　あいつが何したいのか、分かったのかよ？」
「坊主、何も難しいことを考える必要などない。こやつは既に目的を言うておる。ちんまいのは、言葉通りのことをしたいだけだ」
「言葉通り？」
言葉。キャスターの言葉。
聖杯を求めぬ、キャスターの言葉。
聖杯戦争そのものを目的とする、子供の言葉。
「キャスターはな、ゲームをしたいのだ」
「はぁ？　……ゲーム？」
「そうだ。それも簡単に敵を潰せる、難易度の易いゲームではない。手ごたえ、遊びごたえのある、戦争という遊戯がしたいと言っておるのだ。だから、ランサーたちに早々に退場して欲しくないのだろう」
「せいかーい！」
ライダーの推察は的を得ていたらしい。キャスターはキャッキャと笑いながら征服王に拍手を送る。
「僕は遊びや茶番には全力を尽くすタイプなんだよ。僕たちが尽くすは当然だけど、相手側にも尽くして欲しいの」
「……我々は、手を抜いていると？　そう言いたいのか」
こちらを見下す言い分に腹が立ち、剣を構える。
だがキャスターはまるで怯みも構えもせず、続けた。

「んー、少なくとも遠坂やケイネスは手ぇ抜いてる感じかなー。魔術を使うお貴族様特有の黴臭い考えがこびり付いてる上に、実戦経験皆無だからね。八百長の仕方といい、ただ隠れて自分は高みの見物だけしてるところといい、思考がちょっと甘いんだよ。なまじ力があるだけに、敵を侮りすぎてるね」
　だが遠坂の企みは看破され、ケイネスは重症を負った。
「これで少しは警戒心を持って、策を弄するようになってくれると嬉しいね。これは戦なんだから、決闘だの何だの馬鹿馬鹿しいじゃん。縛りを科してプレイするのも良いけど、戦争ゲームは何でもありが魅力だよ？　謀略、策略、人質、爆破、情報操作、闇討ち、騙し討ち、毒殺、色々しないと損だよ」
「……」
　魔術師の役割を持って召喚されたこの子供は、随分と性根が腐っているらしい。キャスターの主張は外道もいい所だ。切嗣と同じ方針を述べる極彩色に、青い騎士姫は不快感を覚えた。
「……キャスターよ、貴様は私に騎士道を捨てろと？　我らの誇り高い騎士としての有り方を、自ら汚せというのか!?」
「そこまでは言ってないけど、拘り過ぎるのは良くないと思うよ？」
　発した怒声は身を痺れさせるような強さを放っていたが、向けられる当人は不思議そうな顔をしている。
　セイバーの言葉を奇妙だと言いたげな顔で、眩い髪を掻く。
「なぁんか王としてより、騎士としての思考に偏り過ぎてない？　今の君が騎士王を名乗るの、止めた方が良い気がしてきた……王と名乗るか、騎士と名乗るか、一回決めといたほうが良いと思うよ。うん」
「何だと？」
「あ、言っとくけど、今のは貶すつもりで言ったんじゃないよ？　ファラオだった身としての発言だから。だからちょっと落ち着こうか」
　どうどう、と馬を抑えるような仕草をしてから、再び口を開くキャスター。
「……ねぇセイバー、君は騎士としての誇りが大事？」
「当然だ」

「それは命よりも？」
「当たり前だろう！」
「民の命よりも？」
そう返された瞬間、冷や水を掛けられたような気分になった。
民を導き国を治める王でありながら、ただ誇りと国を守る騎士としての思考だけになっていたと自覚したからだ。
「あ、やっぱりね。拘り過ぎて意固地になりかけてたか」
身動きを止めたセイバーを見て、やれやれとキャスターは首を振る。
「凝り固まった思考は、現代の魔術師のあり方と同じくらい、よろしくない。唾棄すべきものとは言わないけど、拘り過ぎは注意だよ。拘るほどに意固地になり、頑固になる。そうすると視野が狭まる。狭まれば、何も見えなくなる。至る考えも減ってしまう。自らを追い詰め、崩れ落ちてしまうのさ」
守るべきものがあるのに、それを忘れてしまっては意味がない。
目的あっての手段であるのに、目的を忘れるほど拘ってはいけない。
手段を目的にしてしまうのは、本末転倒だ。
キャスターはそう反論する。
「忠義に飢えるランサーが、自分の騎士道に拘り過ぎたせいで護るべき主君を守れなかった。ついさっきのことが良い例じゃない」
頭上で捕らえられた槍兵を指差し、麗しき魔術師は言う。
一時間にもならぬ前の出来事であり、さらには先ほど述べられた件もあり、セイバーは言い返すことが出来なかった。
自分達の思考が凝り固まっていたのは、間違いようのないことだからだ。
「そう、君たちは自覚が足りない。これは大会じゃなく、戦争なんだ。思考は柔軟に。作戦は綿密に。いざという時の行動は迅速に。そして心は残酷に」
真紅と群青の瞳を細め、左頬の刺青を歪め、ニタリと嗤うキャスター。

月明かりに照らされ、キラキラと神秘的に輝く美貌の持ち主。そいつが浮かべるのは、身の毛がよだつほど酷薄で退廃とした微笑だった。

「僕たちは君らをすぐに脱落させるつもりはないよ。壊れる寸前まで潰すつもりではあるけどね？」

倒しに来るのなら返り討ちにしてあげる。

守りに徹するなら潰しに出向いてあげる。

敗北の危機にあるなら助けに来てあげる。

己が弱さを嘆くのなら力を貸してあげる。

ギルガメッシュよりも柔らかに、穏やかに、傲慢に、残虐に。

キャスターは全ての陣営に向け、歌う様な響きをつけて宣言する。

「そういうわけだから、今後ともよろしくね」

と言って、無邪気に手を振る。

どこまでも微笑を絶やさず、緊張感の欠片もない姿に、何故かぞっとした。

010

キャスターの宣言が始まる、数分前。
ケイネスが射撃された時、切嗣は引き金に掛かりかけた指を止めた。
「舞弥、迎撃中止。それから、今の狙撃手を探してくれ」
『了解』
そしてアサシンを討たんとした助手に新たな指示を飛ばし、狙撃銃をいつでも撃てるよう構えながら辺りを見渡す。
「くそっ……一体どこだ？」
切嗣の中には僅かな焦燥が生まれていた。
自分とは別の狙撃手――――おそらく魔術使いがいる。しかもそれは他の陣営も狙うほど攻撃的で、サーヴァントを傷つけられるような術の使い手だ。焦りを覚えるのも当然のことだった。
「示し合わせるように撃ったから、おそらくはキャスターのマスターだろうが……ともかく、見つけ出して先手を取らないと」
弾丸の飛来から、潜伏している方向はある程度分かる。そして射撃と発砲音の秒差でこちらとそう遠く離れていないはずだ。切嗣は移動しながら魔術使いを探そうと階段を下りていく。
――――と、急に胸が締め付けられるように苦しくなった。
「ぐっ……、!?」
ぐらりとバランスを崩れる体を持ち直そうとしていた切嗣は、目を見開き、己の行動を中止させた。
瞬間、切嗣の居た場所目掛けて何かが飛来する。
それは小さく、丸い眼球だった。目標を失い通り過ぎた眼球は、向こう際にあった金属に直撃する。着弾と同時に破裂し、中の粘液が付着すると、その箇所から鼻の据える臭いが漂う。
金属が溶けて、腐っていく臭いだ。
体勢を崩した切嗣は、降りようとしていた階段から転げ落ちる形となる。体の節々を痛めるが、受身を取ったお陰で大きな怪我はない。起き上がると同時に銃を構え直し、駆ける。

「ガンドでこちらの動きを止めたあと、腐敗弾で仕留めるやり方か……っ」
魔術使いはキャスターほどガンドに長けていないようだった。だが遠距離から切嗣の動きを一瞬だけ止める力があり、そこから畳み掛けるように撃ってきた。それだけでも十分驚異的な術使いである。
『切嗣、発見しました』
通信機を介して、舞弥が報告する。
「場所は？」
『倉庫街の西側にあるコンテナ上を移動しています。どうやら、切嗣を標的にしたようです。そちらに向かっています』
「そうか。……どんな相手だ？」
『フードコートのせいで顔は分かりませんが、女ではないでしょう。細身の若そうな男です。狙撃銃を持っていますが、鞄を背負っていることから、他にも武器は所持しているかと』
「分かった」
切嗣はキャリコＭ９５０を取り出しながら、耳を済ませる。
自分を基準とした左後方上から、足音が聞こえる。切嗣は銃をそちらに向けて、引き金に指を掛けた。
だがコンテナ上から現れたのはフードの人物ではなく、握り拳大の物体だ。
「心臓……!?」
脈を打たぬ、人体に二つある重要な器官の片方。それが剥き出しになった状態で、宙を舞っていた。驚愕で目を見開く切嗣の前で、赤黒い心臓は地へ落ちてく。
その様を見た途端、まずいと思った。
切嗣は急いでその場を離れ、コンテナの後ろに回った。回ることが出来たと同時に広がる腐敗臭。どうやら、着弾と同時に周辺を腐らせる手榴弾のようなものだったらしい。
「眼球……心臓……死霊魔術師かっ」
目に見えた二つの死体のパーツから、相手の使用する魔術に察しがいった。

死霊魔術師は本来、死者を食屍鬼に作り変えて使役する。しかし、魔術使いたる奴は、死体のパーツを礼装に変えて攻撃するタイプらしい。

「死霊魔術で思いつくのは獅子劫だが……いや、決め付けるのは早い」

コートの襟で腐敗時に出るガスを吸い込まぬようにしながら、切嗣はコンテナの後ろから身を出した。

飛び出した眼前には、銃口が突き出されていた。

「――――っ！」

「あっ」

引き金が絞られる直前、咄嗟に銃口を肘で突き上げ、軌道を逸らす。

放たれた大臼歯は斜め上に直進したあと、コンテナの向こう側へと落ちた。

「あっちゃ～、接近し過ぎたか。いっけね」

軽い口調をした眼前の人物は、フードの奥から脱色した髪を覗かせている。ガスを吸わないためにか鼻から下は布で覆われており、黒々とした瞳と黄色身を帯びた肌だけが視認出来る。両手は黒い皮手袋に覆われ、利き手側にグロテスクな拳銃を下げ、利き手でない側は狙撃銃を脇に抱えた状態だ。

「そんじゃ、接近に切り替えようかね？」

言うや否や、年若そうなフードの人物は狙撃銃を放り捨てた。同時に拳銃を左手に移し――――右手を振り上げる。

自然な動作で振るわれたのは、袖口から出て来た不気味なナイフだ。薄く短い刃が喉元目掛けて軌道を描く。ワルサーの銃身でナイフを受け止めた後、キャリコを構えようとする。

だが腹を抉る爪先で、不可能となった。

「ぐぁっ」

骨で守られていない臓器が、蹴りによって形を歪める。顔を僅かに歪めた切嗣はそれでも地を蹴り、続け様に放たれた腐敗の弾丸を回避する。

そして反撃。

フードは「おっと」と呟きながら、鉄箱の後ろに身を隠す。次々と

放たれる弾丸が鉄板を凹ませるが、これを破壊するだけの弾を消費するのは勿体無い。射撃を止め、敵から距離を取ることを選択する。ナイフを受け止めたワルサーの表面が少し溶けて異臭を放っていた。
「接近戦も不味いな……舞弥、君のいるところから奴を狙撃出来るか？」
『難しいかと……動きがかなり早いですし、出来るだけコンテナに身を隠すようにしながら移動しています』
「そうか。分かっ」
言い終える前に切嗣は前方に何かを見かけ、足を止めた。
「……トラップか」
睨み付ける先には、張り巡らされた鉄線の網。艶消しされた細めのワイヤーは鑢掛けされていて、触れるだけでも皮膚を裂きかけない鋭利さがあることが窺えた。目を凝らさないと見落としそうな細さと隠匿性。気が付かずに突き進んでいたら、血塗れになっていただろう。
邪魔なワイヤーをナイフで切ると、それがスイッチとなったのか、頭上から心臓や眼球が投下される。
「一つだけでも厄介なのに、二段構えときたか」
切嗣は舌打ちした後、魔術を使用する。
「Ｔｉｍｅ　ａｌｔｅｒ　――　ｄｏｕｂｌｅ　ａｃｃｅｌ！（固有時制御――――二倍速）」
たった二節の、極めて短い詠唱。
それにより展開される固有時結界は魔術師殺しの体内でのみ張られ、彼の体内における時間経過時間だけを早めた。
切嗣の肉体は、この瞬間だけ通常の二倍早くなる。死体の一部から作り出された腐敗兵器が降下し、肌に触れる前にその場を通過。
通り過ぎた直後、背後で大量の腐臭と腐敗ガスが充満する。無理矢理に体内経過を速めたことで来る反動に脂汗を滲ませながらも、切嗣は駆ける。
「最初の攻撃といい、今の罠といい……随分と用心深いな」
おまけに謀略家だ。逃げた先に罠があった点から、こちらに逃げる

よう誘い込まれた可能性が考えられる。心臓を投げられた際も、切嗣が迎撃しようと待ち構えているのを予測していたのかもしれない。
「舞弥、あちこちに罠が仕掛けられている可能性が高い。見つけたら撤去してほしい」
『了解。気をつけて』
応答を聞いた後、通信を一旦切る。
今まで一切の情報がなかったキャスターのマスターは、どうやら遠坂やケイネスのようにはいきそうもなかった。正統な魔術師ではない、あくまで魔術を道具として用いる利己的な魔術使いだ。戦略的思考は切嗣と酷似している。
「だとすれば」
と、切嗣は己がいるコンテナの上に標準を定めた。
すると、そこから飛び越えてくるフード。ナイフは仕舞われ、拳銃だけを手にしている。
「予想通り、奇襲してきたか」
やはり考えが似ている、と自嘲しながら狙いを定めて撃ち放つ。
だがフードもまた切嗣の考えなどお見通しだったらしい。そいつはよじ登ってきたコンテナを蹴りつけ、銃弾から逃れて地面に着地した。
すぐさまナイフで切りつけようと振り返るが、その前に眩しい白色の光で視界が遮られる。
思わず目を閉じると、数拍遅れて頭部に痛みと衝撃が襲い掛かった。
「ぐっ……!!」
地面に倒れ付すのを堪え、敵の姿を確認する。
フードの若者は、拳銃を持つ方とは逆側の手に柄の長いジェラルミン製の懐中電灯――――マグライトを握っていた。アメリカでは警棒代わりに警官が所持している代物だ。どうやら、振り返り様に取り出した懐中電灯のライトで目晦ましをし、怯んだ所を殴ってきたようだ。
「随分と不意打ちが手馴れているな」

「ん～、そう？」
クルクルとマグライトを回し、一定距離まで近づくフードの男。時折覗き見える双眸からは、何を考えているか今ひとつ分からない。
――――やりにくい男だ。同じ魔術使いだけに面倒くさい。
魔術師であれば挑発や誘導で魔術を使わせ、起源弾を用いて破壊することが出来る。
だが目の前の男は魔術使い。起源弾が力を最大限に発揮するような、強力な魔術を使う可能性が低いのだ。利便性を重視した、切り札を用いるのが勿体無く思うような低位魔術だけを使用するに違いない。
この切り札は、目の前にいるマスターより魔術師たるキャスターに用いた方が得策だろう。今後のためにも、起源弾はまだ隠しておいた方が良い。
そう思っていると、
「ん～。初日はまぁ、こんくらいで良いか」
目の前のフードが、構えを解いた。ナイフを仕舞い、マグライトをズボンに吊ったホルダーに納める。
「……何のつもりだい？」
「いや、今日はもう結構楽しめたからさ。そろそろ家に戻ろうかな～って。お楽しみは後にも残るようにすんのが吉、って師匠が言ってたしさ」
「師匠？」
「えーっと。キャスターって言ったら、分かりやすい？」
どうやらキャスター陣営は師弟に近い関係性らしい。
英雄と呼ばれ担がれているだけの虐殺者を師に仰ぐなんて、切嗣からすれば正気の沙汰ではない。自然と顔が険しくなるのが分かった。
「なるほど？　つまり、僕に背を向けて帰ると？」
だったら好都合、その瞬間撃ち抜いてやる。と、トリガーへと掛ける指に力を込めようとする。
だが、彼は首を振ると
「いや、あんた帰らせてくれそうにないから……ちょっと寝ててくん

ない？」
両手を合わせて頼み込むようにしてから、手袋の甲部分に触れる。
そこから指で引き出されたのは、細い紐状のものだった。数本の細い糸を束ねたように見えるそれは、艶のない黒に紅が滲んだ色合いをしている。いや、あれは糸というよりも……。
「髪の毛、か……？」
切嗣の呟きに、フードは答えない。
「Ｂｅ　ｗｒｏｎｇ，Ｄａｎｃｅ，Ｍａｉ　ｓｔａｙ　ｈｅｒｅ　ａｎｄ　ｄｉｅ（狂え、踊れ、舞いて死ね）」
響いたのは、死人の如く冷たく静かな詠唱の声。
「――Ｄａｎｃｅ　ｏｆ　ｄｅａｔｈ（死の舞踏）」
詠唱を終えた後、フードは引き出した髪で編んだ紐を鞭の如くしならせる。
切嗣は固有時制御を使おうと、二節の詠唱を始めた。
だが鞭の先端は音速を超えると言うもので。
切嗣が魔術を発動させるよりも早く、彼の攻撃がこちらに襲い掛かる。
「Ｂｌｏｏｄ　ｄｉｓｃｈａｒｇｅ（血液排出）」
付け足された詠唱と共に、紐の先端が肌を撫でた。
それだけのことで――――血管から赤い血飛沫が吹き出た。
「な、んだと？」
鮮やかな血が地面を汚す様を、呆然と見下ろす。
怪我は薄い、傷は浅い。
だが引きずり出すように撒き散らされた血液の量はおびただしく、死にはせずとも膝を着かせるには十分過ぎた。
一気に大量の血が流れたことで、眩暈が起きる。
酸素が十分に配給されなくなったことで、呼吸が苦しい。
「だいじょーぶだって、ちょっとぼんやりする程度にしか抜いてないからさ。そんじゃ、また今度遊ぼうなー」
言いながら、去って行くフードの若者。
待て、と銃を構えようとするも、失血のせいで体はロクに動かな

かった。

011

失血で朦朧としていた意識が戻った頃、既に奴の姿はなかった。
「くそ、逃げられたか……」
「切嗣」
歯噛みする切嗣の元へ、舞弥が駆け寄ってくる。彼女の体を包む黒服は、砂埃などで薄く汚れていた。
「遅れてしまい申し訳ありません。かなりの罠が仕掛けられていました」
「いや、気にしないでくれ。……そういえばあのマスターは狙撃銃を放り捨てていたな、回収できたか？」
「いえ、私がそこに向かったときにはありませんでした」
舞弥の返答に、敵の武器を手に入れられなかったことが悔やまれる。
「素性を知られる証拠は残さないか……言動に反して冷静だ」
セイバーたちの持つ耐魔力を無視して攻撃を与えられるということは、キャスターのマスターは呪術を習得しているに違いない。
呪術は己の肉体を素材にする。あれに皮膚や毛髪、血液が付けられている可能性が高い。それを調べて相手の情報を得られればと思っていたのだが……。
「ないのなら仕方ない。初日で死霊魔術使いと分かっただけでも十分と考えるべきか。それで舞弥、撤去した罠はどういったものだった？」
「それが……」
重要視する罠の系統だけでも知っておきたい切嗣に問われて、眉をひそめながら口ごもる舞弥。さしもの彼女でも、言いにくいようだ。
それでも彼女が語った罠は、かなりの凶悪性を誇っていた。
「臓器を敷き詰めた落とし穴に、クローズライン、ブービートラップ、手榴弾代わりの心臓にワイヤーをつけた簡易地雷……か」
「ほとんどの罠が同じ場所に複数設置されていました。掛かった相手に対する殺意が強い罠でしたね」

「よくもまぁ、そんなえげつない手段を思いつくもんだ。僕が言えた義理じゃないが」
本当に、えげつない。
遠近どちらの戦い方でも危険な武器類、簡素ながらに殺傷性の高い罠。魔術使いであるがゆえに、起源弾を使いにくいという問題点。切嗣に勝るとも劣らぬ奇襲・謀略性。そして不明すぎる素性と能力……。なんとも殺しにくいマスターがいたものだ。さしもの切嗣も、奴を仕留めるのは骨が折れそうだった。
そう思うと同時に、キャスター陣営について少し分かったことがある。
「……キャスターのマスターは、多分僕ほど指定力のある触媒を使っていないだろうね。大方、強さよりも相性の良さで召喚されている」
「でしょうね」
同感だったのか、舞弥も頷く。
そう……キャスターたちはおそらく、似たもの同士だ。
スコープ越しに見たキャスターと、先ほどのマスター。
どちらも非常にひょうきんで、どこか幼さを感じさせる。言動は妙に明るくて、度胸も行動力もあり過ぎる。まるで遊戯を楽しむ子供、悪戯好きの悪ガキだ。聖杯戦争が何かをちゃんと理解しているのか、怪しく思えてくる。
だが馬鹿でも間抜けでもない。むしろ非常に狡猾な切れ者だ。
頭の回転は速く、思考は柔軟。二重三重に策を練り、準備する用意周到さ。行動的なのに素性を知らせぬ証拠隠滅能力。外道邪道も気兼ねなく行う割り切りぶり。――そして破綻しているだろう、道徳観念。
奴らは良識や常識を知っているが、歯牙にもかけない。自分の行いに反映させず、非道な行為に心を痛めることもない。むしろ楽しんでいる節がある。
端的に言うならば、理知的な狂人なのだ。奴らは。
「ああいうタイプが一番厄介だ。あいつらは言峰と同レベルで危険だね。今まで影も形も見せなかったのに、始まった途端にほぼ全陣営を

掻き回す暴れっぷりだ……手始めにケイネスの拠点を潰す予定だったが、それも難しくなった」
「そうですね。今夜はもう、拠点に戻った方が良いかと」
「ああ。……まったく、派手にやってくれたもんだよ。忌々しい」
煙草に火をつけながら、不機嫌に眉をひそめる切嗣。舞弥の使い魔を飛ばしてもらい、アイリスフィールたちの様子を確認する。丁度、キャスターがこちらに不都合な宣言をするところだった。
本当に面倒な連中だ。キャスターたちの行動は、他の陣営の警戒心を煽るには十分過ぎる。何を仕出かすか分からない連中のせいで、大半が慎重に動くようになるだろう。彼らの持っていた余裕や油断を、奴らが一気に潰した。
おかげで、事前に練っていた策がいくつか使えなくなった。
「キャスター陣営……とんだ伏兵が出て来たな」
サーヴァントもマスターも厄介極まりない。しかも聖杯に対する願いがないため、好き勝手に動き回る可能性が高い。その上、「遊びは全力で尽くす」ときた。それはつまり、気負わない癖して隙を作らないということだ。
あのマスターにしてやられたのは情報の無さや罠だけでなく、肩に掛かるプレッシャーの差もあるだろう。切嗣が背負うのは全人類の平和。対する奴には何もない。失うことを恐れるだけのものがない。だからああも軽快に動く。
自らに科した重さの違い。覚悟からくる苦悩の有無。
このハンディキャップになりうるアドバンテージを、どうするものか。
「それでも、僕は絶対に勝つ。勝たないといけないんだ」
誰に向けるでもない宣言と共に吐き出す煙は、ゆらゆらと危なげに揺れた。
◇◇◇
キャスターの宣言のあと、ライダーたちはマッケンジー夫妻の家に戻った。
自分達の寝床である二階のベッドに腰掛けながら、ウェイバーは今

日あった様々な出来事を纏める。ライダーは床に胡坐を掻き、煎餅を齧っていた。
「坊主、この聖杯戦争……一体どうなると思う？」
「そんなの聞くまでもないだろ。ぜーったい、想像以上に厄介になる。あの性質悪いキャスターのおかげでっ！」
ライダーの問いに、悪態を吐きながら答える。頭痛の原因は、極彩色を纏う可愛い顔してえげつない子供だ。
あの子供のせいで、各々の陣営が簡単には動けなくなった。それはしばらく襲撃されないということだが、同時に狡猾な作戦で襲いかかられる可能性が膨らんだということでもある。
うかうかしていたら誰かが動き出す。ライダーのステータスは悪くないが良いとも断言できない。追い込まれる前に動かなければならないのだ。慎重かつ迅速に。緻密な策を練って。
「とにかく、あのキャスターの真名を解明しないといけない。素性が完全に分かってないのはあいつだけだ、これだけでもアドバンテージになってる」
「だが、エジプトの王にして魔術師だ。かなり絞り込めるんじゃないか？」
「馬鹿言うな！　エジプト王でキャスタークラスに当てはまる奴が、一体どれだけいると思ってるんだよっ！」
楽観的なライダーに言い返しながら、彼の煎餅を一枚取って齧り付く。
元来、エジプトは神に対する信仰心が強く、ファラオの周りには決まって神官が存在していた。ファラオ自身が神官をしていた例だってある。
「一番有名なのはツタンカーメンだけど、外見年齢を考えると幼少から政治をしていたエジプト最古の王スコルピオン1世の線もある。もしそうなら、あの王は蠍の女神信仰だ。蠍の毒で殺されるかもしれない」
「剣を持たずして殺されるのは勘弁願いたいなぁ。……だが、あやつを男と断定するのは早計だぞ？」

「え？　……ああ、そうか。あんなに綺麗な顔をしてるもんな。世界三大美女に挙げられている、クレオパトラ7世っていうのも有り得そうだ」
二人は互いの意見を出しながら、キャスターの真名を推察していく。
だが考え出せば考えるだけ、候補は次々と挙がっていく。一時間もしない内に、誰であっても有り得えそうだと思えてくる。もうお手上げだった。
「くっぉお……一旦キャスターの件は置いとくしかないな。まだ初日だ、情報収集していけば何とかなるっ」
「余も同感だ。今はちんまいの自身より、アサシンを警戒するべきであろう」
頭を抱えてベッドにうつ伏せたウェイバーに頷き、ライダーはまだ暗い窓を一瞥した。
「あ、そうか。アサシン……ハサン・ザッバーハ」
思い出したように、アサシンの真名を呼ぶウェイバー。
脱落した振りをして生き残っていたというアサシンは、キャスター曰く百の貌を持つハサンだ。
百の貌、というのがどういう意味かは分からないが、キャスターはアサシンのことを『彼ら』と呼んだ。
つまり、身代わりか分身を作り出せるということになる。
「よほどの気まぐれを起こさぬ限り、ちんまいのはまだ余や他の陣営を直接潰そうとはせんだろう。口振り、素振りからそう感じた」
それはウェイバーも思った。キャスターはかなりの快楽主義だ。魔術師らしいか否かで言われれば、全然違う。どころか、対極にあるだろう。見目麗しい極彩色は堅実的な考えは出来るが、趣味嗜好は娯楽に傾いていそうだ。
バーサーカー、ランサーを倒さなかった点から、奴はまだ本気じゃない。聖杯戦争というゲームをしたいあいつは、誰も倒す気がない。今のところ。
「だが、誰とも敵対し協力する姿勢を見せるあやつのことだ。アサシ

ンに手を貸す可能性がある」
「……キャスターがアサシンに魔術付与した武器を渡したり、僕たちを潰せるような策を教える。奴らがそれで攻めてくる可能性があるってことか？」
「そういうことだ」
「……」
アサシンとキャスター。
聖杯戦争で召喚されるサーヴァントの中で、弱小クラスに分類される英霊。そいつらが手を組むことが、これほど恐ろしいと感じた参加者は今までいただろうか。
少なくとも、ウェイバーは恐ろしかった。魔術においては何でもありのキャスターに、いつでもこちらの寝首を掻けるアサシン。もし奴らが手を組んだらと思うと身震いする。
そんなウェイバーの背を豪快に、だがいつもより優しく叩くライダー。
「安心せい。おそらくアサシンもキャスターたちを危険視しておる。同盟を組もうと言われても、簡単に頷きはせんだろう」
「でも」
「坊主、お主はもう寝ろ。もう大分遅い。寝不足で自慢の頭が働かんとなると困るのは我々の方だ」
「……いつ襲われるか分からないのに、眠れるもんかよ」
「余が寝ずの番をしてやる、丁度眠らずとも平気な体だからな。アサシンが姿を現したら、余が返り討ちにしてやろう。だから安心して眠れ」
そこまで言われると、先ほどまでの不安感が少し薄れた。
「分かった。……気をつけろよ」
「言われずとも分かっておるわ」
己が主の言葉に、豪快に笑いながら応じるライダー。
ウェイバーは照明を消し、布団に潜り込んで目を閉じた。

012

セイバー、ライダー陣営が帰還したのを見送った後、キャスターは召喚した怪物――――シャンタク鳥にランサーたちを降ろさせる。
己が眷属を魔術で帰らせた後、極彩色の子供は両者の前へと歩み出た。
怪我をしながらも、ランサー陣営はいつでもキャスターを攻撃できるように身構える。だが当人はその反応に何とも思わぬ様子でクスクスと笑い、高速で詠唱を行った。
すると二人の、血と膿の混じった腐臭を漂わせる傷口がみるみるうちに塞がっていく。三十秒もせぬ間に、ランサーとケイネスの負った怪我は跡形もなく消え去った。
「はい、終わり。もう帰っても良いよ～」
エジプト神官にも思える見目のキャスターは、秀麗な顔に笑みを浮かべて告げる。彼もしくは彼女から、敵意や殺意、警戒心すら感じられない。
こちらがどんな行動に出ようがいくらでも対処出来る。それを疑っていないのだ。実質、キャスターにはそれだけの実力が備わっているだろう。
サーヴァントとはいえ、幼いとも言える子供に侮られている事実に、ケイネスは屈辱と憤怒で顔を歪ませた。
「あはははっ、良い顔をしてるねぇ。今まで綺麗だった経歴に傷がついたのがそんなに嫌なの？」
歯軋りしながら睨めつけるケイネスに、子供はケタケタと笑い声を上げる。
「そう図に乗っていられるのも今の内だぞ、使い魔風情が……っ。我々を生き残らせたことを、貴様は後に後悔することになるぞ」
「おぉ、怖い怖い。うふふ、そうだね。気をつけるとするよ。……いや～、実際に転落してきた人の言葉は説得力があるもんだね」
血反吐を吐くようなケイネスの言葉にさえ、キャスターはまるで怯まない。どころか、先ほどの件を揶揄して皮肉る始末。ケイネスはギ

リギリと奥歯を鳴らし、子供に掴みかかろうとした。
だがそれを制し、キャスターの細い喉元に槍先を突きつける武人が一人。
「キャスターよ。我が主に対するこれ以上の侮辱は、この俺が許さんぞ」
「おや？　忠誠云々言っといて主君を碌に守れない駄犬が、主に代わって吠えるのか」
ランサーの牽制を前にしてなお、キャスターが怯むことはなかった。どころか、躾のなっていない猟犬を見るように目を細め、鼻で笑う。
これにはさしものディルムッドも眉間に皺を寄せるが、己が失態は理解しているらしい。潔く、その事実を認めた。
「そうだな。お前の言うとおりだ、年若きファラオよ。だからこそ、恥の上塗りはしない。俺はケイネス殿への忠誠を貫き通し、主の刃となり盾となる」
「よく言うね。忠誠を誓える相手なら、誰でも良いくせに」
キャスターがそう返した途端、ランサーが身を強張らせた。
それを見て、ケイネスはやはりかと肩を竦める。同時に自分の推測が正しかった。目の前の男はかつて果たせなかった忠義を貫きたいだけで、相手がケイネスでなくても良かったのだ。
そんな奴の、まして婚約者を誑かせる者の騎士道を、ケイネスがどう信じろというのか。
ランサーの様子から悟ったことを推察したおかげで、逆にケイネスは冷静になることが出来た。その点に関しては、目の前の子供に感謝すべきか。
「キャスターよ。貴様に問いたいことがある」
「なぁに？」
「先ほどの狙撃手……魔術使いは、貴様のマスターだな？」
「うん、そうだよ」
存外、あっさりと、頷く極彩色。
先に確認したかったことを知ることが出来たケイネスは一つ頷き、

本来問いたかったことを続ける。
「キャスター。貴様、魂喰いをしているな？」
「なっ……!?」
「あら、バレちゃった？」
己が主の口から出た衝撃の言葉に、ランサーが息を呑む。
対するキャスターは、色鮮やかな付け袖で口元を隠しながら笑みを深める。まるで悪戯が成功した時のような反応だ。己が行っている非道に、呵責の類を一切抱いていない。
「やはりな。見た限り、貴様のステータスはキャスターにしては素晴らしいものだ。だがいくら知名度、マスターの実力があろうと、筋力や耐久力のランクがそこまで高くなるはずがない。少し考えれば何らかの不正、非道行為を行っていると分かる」
「じゃあ何で、魂喰いだと思ったのかな？」
「貴様のマスターが使うのは、本来のものとは多少違えど死霊魔術の類だ。ならば、材料となる死体が必要になる」
死体を手に入れるのに都合が良いのは、戦場か墓場だ。
だがこの日本は平和そのもので、戦と呼べる物は現在行われている聖杯戦争くらいのものだ。そして日本では火葬が適応されているため、墓場を荒らしても死体が手に入らない。
「キャスター……貴様には魂が、マスターには礼装を作るための死体がどうしても必要だ。その両方を手に入れるために、どこからか生きた人間を調達しなければならない。だがこの冬木市で調達すれば教会に目をつけられる。となれば、残る方法は一つ――――海外からの輸入、これしかない」
ケイネスは淡々と、しかし内心の激情を押さえ込みながら、崖へと追い詰めるように推理したことを語っていく。
青い瞳で様子を窺えば、己のサーヴァントが怒りと驚愕で戦慄きながら子供を見据えている。そしてケイネスもまた、子供に侮蔑のまなざしを向ける。
それでも、キャスターは笑っていた。
「あっははは。本当におもしろ可笑しいね、君たちって。いきなり正

義の味方を気取って、馬っ鹿みたい」
　実に愉快そうに、嗤っていた。
「どこでどうなろうが誰も困らない、気にも留められない、悔やまれることも悼まれることもない。無価値なものとして扱われる程度の、ゴミだってのにさ」
　嗤いながらキャスターが言った途端、赤い長槍が放たれた。
　だがひらりと避けられ、皮膚も髪も服も掠ることなく、キャスターが一歩後ろへ退く。
　フィアナ騎士団の騎士だった深緑は、燃え滾るような怒りの眼差しで極彩色を睨み、先ほど突き出したゲイ・ジャルグを構える。
「わぁ～びっくりした。イキナリ攻撃するなんて、ひどいなぁ」
「この、この下郎が!!　貴様、貴様らは何人……一体どれだけの罪なき命に手をかけた?!」
「どうしてそんな、自分ごとみたく怒ってんの？　何の干渉もせずとも飢え死に確定の孤児や奴隷、たかだか三十七人程度だよ？　身内でも何でもない赤の他人のためにそんな怒るなんて、ほんと面白いねー」
「黙れ！　それは貴様の行為が正当化される理由にはならない!!」
「そんなの自覚してるって、いくら何でもさ。僕が何やっても許される存在じゃないことなんて、他ならない僕自身が分かってることだよ。君のマスターじゃないんだから、そこらへんは理解出来てるよ～」
　ディルムッドの怒りを受けてなお、子供は嗤い続ける。
　怯まない、恐れない。むしろ彼の怒りを面白がっている。愉快極まりないと腹を抱えている。
　そうしてなお、おぞましいほど美しい。
「それにさ、ただ買って捌いてるわけじゃないよ？　業者に頼んで美味しいもの食べさせて、体を綺麗にして、新品の服や玩具を与えて。僕たちに届けられるまでは贅沢してもらってるんだから。その分、値段も高くなるけどね」
　肩を竦め、困った風に説明するキャスター。

だが、奴がちっとも困っていないことはケイネスの目から見ても分かる。むしろ、キャスターは楽しんでいるのだろう。
今までしたこともない贅沢で喜んでいた人間の顔が恐怖と絶望で歪み、喉が張り裂けんばかりの絶叫を上げながら死に行く様を。
「それにさ、聖杯戦争するにあたってのルール違反はしてないじゃない。舞台になる冬木市に被害は出してないし、交渉や輸入は全部お金で解決してる。魔術の神秘は漏らしてないし、民間人も無事。貧しい国でのたれ死ぬ彼らの死因がちょっと変わる程度のことじゃん」
キャスターの言い分は、あまりにも身勝手だ。人を人と思っていない。家畜か玩具のようなものと思っている。命を完全に見下し、冒涜している。
子供の言葉を聞いたランサーは全身を小刻みに震わしていた。激情のままに襲い掛かろうとしている身を、必死に押さえ込んでいるのだ。
ケイネスはしばし子供とランサーを交互に見たあと、目を瞑る。
「……そうだな。確かに貴様は魔術の神秘、聖杯戦争におけるルールに触れる行いはしていない。その点に関しては、文句のつけようがない」
「ケイネス殿!?」
愕然とした顔をこちらに向けるランサーを手で制し、ケイネスは続ける。
「だがキャスター、その所業は人として外れている。貴様らは下衆であり外道だ。それ以外に貴様らに相応しき言葉はない。このアーチボルト家九代目当主ケイネス・エルメロイは、貴様の如き屑を魔術師とは認めん！　決して!!」
「ケイネス殿……!!」
漆黒に銀の粒が浮かぶ空の下、人気のない冷たい倉庫街に響き渡るケイネスの弾劾。
一字一句あますことなく耳にしたランサーは、感服して主の名を呼んだ。
「……ふぅん？」

そんな二人の主従の様子に、キャスターは目をすぼめる。
今まで笑みを貼り付けていた顔を、つまらなそうにして。
「魔術師のくせにお綺麗なことを言うもんだ。僕ら魔術師は基本、他人食い物にする屑だってのに……魔術を嗜む者はさも崇高とばかりの語りっぷり。おかしすぎて逆に笑えない。最近の魔術師は脳味噌が腐敗して、頭蓋内にお花畑咲かせてる奴が多いよねぇ、困った困った」
「なんとでも言え、外道。そして恐れ、脅えるが良い。貴様の心臓を貫くは、我がサーヴァント……ディルムットが持つゲイ・ジャルグだ」
「その通りにございます、我が主。……今宵は既に遅いため、見逃そう。だが次に会う時は死を覚悟しろ、キャスター。貴様はこの俺が討つ」
「はいはい、そーですか。その前に人間関係破滅しそうに思えるけどね」
意気投合した主従に嘲りの笑みを向けた後、キャスターは溶けるように姿を消した。
極彩色が消えるのを確認した後、ケイネスはランサーに告げる。
「良いか、ランサー。アレを同じ人間と思うな。貴様が行うのは一騎打ちではない、化け物狩りだ」
「はっ。我が槍にかけて、必ずしやあの怪物の首を討ち取ってみせましょう」
主が命じ、騎士が承る。
そこにはセイバーの時のような意見の違い、亀裂が生じることはなかった。双方がキャスターに対し同一の見解を出し、するべきことが一致したのだ。
「ふん。その魔を絶つ槍に関しては、期待しておくぞ」
「このディルムット、その御期待に添えてみせましょう」
そうして、二人は拠点たるホテルへと戻っていった。

013

「予想外の強敵が出ましたね、時臣師」
教会の一室で一人佇む、裾の短い神父服を纏った男――――言峰綺礼は、同盟相手であり魔術の師匠たる遠坂時臣に述べた。
アサシンを通じて見た、光景。倉庫街での言動を全て報告し、綺礼は時臣の言葉を待つ。
『そうだね。正直、聖杯戦争において一番の敵はロード・エルメロイらと思っていたが……少しばかり考えを改めねばならないようだ』
通信機から発せられる師の言葉。それは最弱と呼ばれてきたキャスターへの認識を改めるものだった。歯牙にも掛けていなかったサーヴァントに目論みと真名を看破されたことで、少しばかりの懸念を抱いたのだ。
だがしかし、声からは焦りが窺えない。アーチャーの正体を見破られ、アサシンが生き残っていることを暴露されても、時臣はまだ余裕を失っていない。
キャスターは今までの例になく強敵だ。しかしそれでも、『実力はギルガメッシュの方が上』と思っているのだろう。人類最古の王を呼んだ時臣の、勝利に対する自信はかなりのものだ。そう簡単に崩れ去るものではなかった。
『それで、マスターの方の情報と連中の拠点は分かったかい？　アサシンに追跡させたのだろう？』
「無論。しかし、見失ったようです」
『見失った？』
「ええ。正確に言うならば、撒かれたというべきでしょうか」
答える綺礼の脳裏に浮かび上がるのは、くたびれた黒コートの男と戦った、年若そうなフードの人物。
背格好から男と分かる奴は、豹のような身軽さで足早に立ち去っていった。倉庫街に配置していたアサシンらは、彼について情報を得るべく霊体化したまま尾行した。
だがしかし、マスターの素性や拠点について一切分からなかった。

アサシンはその件について謝罪と共に報告したが、報告する本人自体が訝しげにしていた。なぜ見失ったのか分からない、とばかりに。
というのも、男は途中で忽然と姿を消したのだという。
アサシンの追跡は、途中までは順調だったのだ。だが、フードの男は曲がり角を曲がった途端、唐突に消えてしまったらしい。アサシンは慌てて周辺を探し回ったが、結局姿はおろか足跡などの痕跡すら見つからなかったという。
まさに煙のようだったと、アサシンは項垂れながら語っていた。
つまり、相手は戦いだけでなく素性を隠す術にも長けている。
「戦闘の様子などから考えて、キャスターのマスターは暗殺者の類でしょう。アサシンの追跡を撒いた点から見ても、相当の実力者です」
『魔術使いの暗殺者……か。どこの者かは知らないが、大方、アインツベルンのように他の魔術師が雇って参加させたのだろうね』
通信機越しからでも分かる程、時臣は呆れた様子だった。
魔術師は生粋かつ正統派であればあるほど、魔術の神秘に頼る。反面、科学技術や機械を嫌う傾向にある。化学兵器を使う魔術使いが、聖杯戦争に参加していることを好ましく思っていないのだ。
「時臣師。キャスターは全ての陣営と敵対し、協力する姿勢を見せています。どうしますか？」
『予定は変更しないつもりだよ、綺礼。キャスターの実力がどれほどであっても、マスターが何者であっても、今のままで構わない。我々には英雄王がついているのだからね』
「……」
師の返答に、綺礼は微かに眉間を寄せる。
時臣が危惧していないことが、綺礼は不思議だった。
その英雄王が、キャスターを中々に気に入っていることを。
キャスターがバーサーカーを叩きのめしたと知り、ギルガメッシュが上機嫌になっていることを。
アーチャーの関心が、時臣よりもキャスターに傾いていることを。
だが師にも師なりの考えがあり、その上で問題ないと判断したのだろう。と綺礼は思った。ならば綺礼がぐだぐだと言っても仕方ある

まい。
そう考え、綺礼は小さくため息を吐くに留めた。
◇◇◇
全身が悲鳴を上げていた。
体中を蟲が暴れ回り、血と共に吐き出された蟲が醜悪に身をくねらせた。
「ははっ……あ、ははっ」
それでも雁夜の口から零れ落ちるのは嗤い声だった。
薄汚れた路地の地面に座り込む。目深に被ったパーカーのフードから覗き見える、白髪と土気色の肌。死人のような顔は左半分が硬直し、醜く歪んでしまっている。口元は吐いた血で、そこだけ鮮やかな紅をしている。
祖父、臓硯により寄生させられた刻印蟲。それは素質はあるが鍛錬をしていなかった雁夜の擬似的な魔術回路を与えたが、同時に彼の生命を蝕んでいた。結果、彼の体は左半身が麻痺し、左目が見えなくなった上、長くとも数週間と言う短命を科せられていた。
それでも、彼は嗤っていた。
あの時臣のサーヴァントに煮え湯を飲ませてやったと、彼は喜んでいた。
「時臣、貴様の吠え面を見たかったぜ……あは、はははははっ――――」
「小娘を救うだの言っていたが、本音は『憎い男を破滅させたい』……といったところか」
「――――は、は……っ!?」
だがその喜びは、静かに紡がれた一言で凍りつく。
頭から氷水を浴びせられた心地の雁夜は、自分の目的が桜の救出から憎い男への復讐に摩り替わりかけていた事実に顔を青くする。
「無様な格好の割りに、随分と楽しげに嗤っていたな。雁夜」
そんな彼に、一人の男が歩み寄る。
文字通り突然現れたそいつは、赤銅色の肌と長い漆黒の髪をしている。端整と精悍を併せもつ容貌に、すらりとした長身。手や首には宝

石細工の装飾品をつけているが、服は襞を細かくとった腰布に縞模様の前垂れと金で出来た三角のプレートをつけている程度。ただでさえ寒い冬の夜道を歩くのに、適した服装をしているとは言えなかった。

だが肌を刺す冷たさをまるに気に止めた様子のないそいつは、顔面蒼白で地べたに座る雁夜を見下ろしている。

「……バーサーカー」

「それはあの狂犬の役割だ。私をそう呼ぶな」

クラス名で呼ぶと、男は不快と言わんばかりに唇を歪めた。

正気に戻った雁夜はそれを無視して、男に問う。

「桜ちゃんの方は、どうだ？」

「今は寝ているが」

「そうじゃない。臓硯の奴から、ちゃんと守れているんだろうな？」

首を振って言葉を続ければ、彼は仏頂面で鼻を鳴らす。

「私が小娘を隠す度に、老いぼれ蟲が口煩くてかなわん。同じ人外でも我が神とは正反対だな。姿は醜悪で、声は耳障り。実に鬱陶しい。なまじ力があるだけに、私では潰せんのが腹立たしいな」

「お前の意見には同意だが……お前の場合、あのキャスター以外は皆鬱陶しいとか無価値としか思ってないだろう」

「当然だ。我が神より美しく聡明で素晴らしき存在などいない。この愚かしい世界の中で、あの方だけが唯一の光。誰もが偽る世界の真実そのもの」

此の世全てが忌々しいと言わんばかりの顔が、この時ばかり――――崇拝する神に関する時ばかりは、陶酔に変わる。

元々狂っていた人格に、狂化が付加されたことで狂気が打ち消されたとはいえ、やはり話が通じないところがある。

「バーサーカーの魔力喰いは厄介だけど、お前も違う意味で厄介だよ……ネフレン＝カ」

またいつものように神について語りだす美男に、雁夜は深々と嘆息した。

間桐邸でバーサーカーを召喚した当初は、雁夜も臓硯も心底驚いた。
何故なら魔方陣に佇む人影が二つ……クラスにつき一人しか現れないはずのサーヴァントが、二人もいたからだ。
内一人は倉庫街で暴れさせた紫紺の鎧甲冑。聖杯を通して召喚した、正式なバーサーカーである。何も語らず、言葉を理解せず、ただ獣の如く暴れて周囲を蹂躙し血で染め上げる。まさに言葉通りの狂戦士だった。
そしてもう一人が今雁夜の目の前にいる男。狂信する神のためあまりにも冒涜的な行為を繰り返したことで、歴史から抹消された暗黒のファラオである。
こいつは正式なサーヴァントではなく、そもそもその行いから英霊として呼ばれるだけの資質を持ち合わせていなかった。
だというのに、なんとこいつはバーサーカー（真）に無理矢理ついて来る形で現界したのである。しかも理由が、「我が神がこちらに現れた気配がした」からというものだから、驚き呆れる。
そんな擬似的英霊……いや、亡霊の『ネフレン＝カ』。
正式なサーヴァントでないために、彼のステータスランクは総じて低い。だが『二重召喚』というスキルにより、バーサーカーにしてキャスターたる彼の魔力と魔術は魔術師としてもサーヴァントとしても申し分ないものだった。
ゆえに彼にしてもらっているのは、桜の護衛と魔力配給の肩代わり。魔力喰いのバーサーカーゆえに雁夜の魔力は多少削れるが、それでも大半は彼が担っている。今の桜が蟲蔵で陵辱されずに済んでいるのも、雁夜がこうして吐血するだけで済んでいるのも、一重にネフレン＝カのおかげだ。
「それにしても、今日の一連の出来事……お前が夢で見た通りだったな」
口元の血を拭いながら、雁夜が思い返すのは見るもおぞましい壁画。
予知夢の力を持つというネフレン＝カ。彼は昨晩、長大な壁を作成

して就寝し、翌朝目覚めると同時に恐ろしい壁画を描いたのだ。
目を血走らせ一心不乱に描いた後、絵の内容から語った未来。それはつい先ほどの出来事と、全て一致していた。
「正直、半信半疑だったが……お前の予知能力は本物だな。相手が何をするかが全て分かるなんて、これはかなりの強みだぞ」
今回のことで彼の予知夢への評価を改め直し、賞賛する雁夜。だが当人は目をすぼめ、雁夜を馬鹿にするように鼻を鳴らす。
「ふん、当然のことだ。神より与えられし我が未来予知は無敵。偉大なる神が運命を支配する限り、私の予知が覆されることはない」
「……それはつまり、キャスターが決定した未来じゃないと予知出来ないってことか……？」
「そうだが」
「……」
未来予知は完璧なものではなかったらしい。敵がその「無敵の力」を握っているとなれば、そう頼りに出来そうもない。雁夜は顔を覆って俯いた。
……擬似的宝具を使う英霊に、擬似的なサーヴァント。蟲に頼って魔術回路を底上げにマスターになった雁夜には、贋物がお似合いということだろうか。
まぁ、でも、何でもいい。と、雁夜は考える。
桜を救えるのならば、なんでも構わないと。
「……バーサーカーの魔力消費は激しいだろうが、出来れば保ってくれよ」
「貴様こそ、あの狂犬の手綱をしっかりと握っていろ。アレが暴走したのは、お前の躾不足が原因だろうが」
「正論過ぎて言い返せないな……」
疲労感から投げ出された足を爪先でつつかれながら、雁夜は苦笑する。
その後、フッと、笑みを安堵に変える。
「ネフレン＝カ」
「なんだ」

「済まなかった。あと、ありがとうな」
「……なんだ、急に？」
と、気持ち悪い者を見る目を雁夜に向けるネフレン＝カ。それでも雁夜は前言を撤回しない。
「お前のお陰で、目的を見失わずに済んだ。……本当にありがとう」
言いながら、不自由な体を曲げて頭を下げる。
桜を救うために参加しておきながら、己の憎悪を晴らすことしか考えていなかった先ほどの自身を恥じる。彼の一言がなければ、雁夜はあやうく目的を復讐に変えるところだった。道を踏み外しかけたところを何とか引き戻してくれた男に、雁夜は感謝していた。
礼を言われた男は、無愛想な美貌をしかめた後、雁夜を軽く蹴った。
「ぐほっ……！」
軽い蹴りでも、刻印蟲に蝕まれた体にとっては大ダメージを与える危険な攻撃だ。それを知っているにも関わらず、ネフレン＝カは数度雁夜を蹴った。
「つまらんことで礼を言う暇があるなら、私を神の御前まで連れて行け。そのために貴様に手を貸しているのだぞ、雁夜」
「分かってる分かってる！　だからっ、踏みつけるのは止めてくれ!!心底痛い！」
「痛くしてるのだから当然だ、たわけ」
言いながら皮膚から浮き出た蟲を踏み潰した後、彼はようやく足を退ける。痛みにのた打ち回っていると、ネフレン＝カに何かを投げつけられる。
「へぶっ……なんだ？　毛布？」
「小娘からの餞別だ。『夜は寒いから暖かくしてくださいね』と言っていた」
「さ、桜ちゃん……！」
「泣くな。ただでさえ醜い顔が殊更醜悪になる」
「み、醜い言うな！　これは蟲が原因なんだからなっ、俺にはどうしようもないことなんだ!!　くそ、これも臓硯のせいだ……」
「愚痴はそこらの塵屑に聞かせていろ。私が聞いてやる義理なんぞな

い」
桜の優しさで涙ぐむ雁夜をボロクソに言った後、ネフレン＝カは踵を返す。
その後ろ姿を見送ったあと、雁夜は柔らかな毛布に包まった。

014

昨夜の騒動から一夜明け、今日のキャスター陣営の朝食は和風だ。
主菜は皮までこんがり焼いた鮭と、海苔が入った出汁巻き卵。副菜はキャベツと豚肉のおかか和えに、葱と納豆を入れて焼いた油揚げ。味噌汁の具は三種のきのこに里芋とワカメ。艶々に炊かれた白ご飯は、ちりめんじゃこと桜海老のお手製ふりかけで彩られている。デザートは蕎麦湯の餡包みだ。
意外に思われるだろうが、キャスターは栄養バランスを考えて料理を作るタイプである。というのも、悪戯するにも戦うにも栄養は大事だからだ。そういうことから、色んな栄養を補給しやすくて美味しい日本食を作ることが多い。
反面、イギリスやアメリカの料理が食卓に並ぶことは滅多にない。
「なんか師匠が来てから、体の調子が良い気がするな。俺」
ご飯に乗っかる桜海老とじゃこの旨味を味わった後、龍之介は呟く。
料理が出来ないわけではないが、フリーターと殺人鬼を両立していた頃は色々と忙しくて、自炊をあまりしたことがない。大抵はコンビニ弁当や外食で済ませていたものだ。
そんな当時のことを思い出していると、キャスターはくすくすと笑いながら鮭を突く。
「コンビニ弁当はご飯とおかずのバランスが良いとは言えないからね、当然と言えば当然だよ」
「確かにそうかも知んないなぁ。……ちゃんと料理出来る様、レシピ本でも買って練習しようかな」
「そんなの買わずとも、僕が教えてあげるって」
「マジで？」
「ほんとほんと。龍之介のことだから、やり始めたら案外ハマるかもしれないよ？　料理も下準備とか色々するの、結構楽しいからね」
「へぇ～」
などと何気ない会話を交わしながら、二人は朝食を済ませてお茶を

飲む。それから黒文字で蕎麦湯を切って、小さく切ったそれを口に放り込む。柔らかな皮に包まれた餡が口の中で広がる。甘味の風味を楽しみながら茶を啜れば、自然と顔が綻んだ。
　抹茶を少し入れた煎茶は、餡包みとの相性が良い。日本茶独特の渋みと苦味が、砂糖で煮詰めた小豆の甘さによく合うのだ。
「ふぅ～。日本のご飯とお菓子は美味しいよね、ほんと」
　作った本人も菓子の出来に大満足なのか、幼い顔がいつになく緩んでいる。唇の綻び方も、普段とは打って変わって含みがなく柔和なものだ。
「日本人の、僕らをメディアに取り込む容赦の無さはちょっとアレだけど、食文化は凄く良いよねー。日本人の味覚が凄い発達してるお陰だね」
「え？　そうなの？」
「うん。人間が持ってるのは大抵生理学的な五味か、そこに旨味を足した六味だけど、日本人には渋味も加わるからね。五味と七味じゃ全然違うよ」
「そっか七味かー。……七味って言われると、唐辛子が思い浮かぶんだけど」
「そりゃそうでしょ。七味唐辛子作ったのって、日本人だもん」
「マジで？」
「マジだよー。江戸時代に、徳右衛門っていう人が漢方薬を参考にして作ったんだって。だから七味唐辛子は、日本生まれの調味料」
　日本人って七って言葉が好きだよねーと言いながら、キャスターは茶呑みを傾け味と香りを楽しむ。抹茶を少し加えると、香りがぐっと良くなるのだ。
「あと日本のお菓子は、甘いだけじゃないのも良いよね。沢山食べてもうんざりしないっていうか」
「ふうん。……師匠の国の菓子は？」
　尋ねると、キャスターは困ったように肩を竦める。
「激甘だよ。アメリカもエジプトも、お菓子は甘いのが当然ってばかりでさ。砂糖めちゃくちゃ使うから……特にアメリカは色も派手過

ぎるから。日本菓子に慣れたら、ちょっとなぁ」
「あー。アメリカの菓子って、蛍光色が普通にあるんだっけ」
「そうだよ。ちょっと淡く色づいてる程度なら良いんだけど、ド派手な蛍光ピンクとか青とか……緑が普通にあるから。おまけにチョコの中にキャラメルとかクリームが入ってたりするから、日本人はあんまり食べる気しないと思う」
「うわぁ……」
師から聞かされるアメリカの食文化に、さすがの龍之介も引き気味だった。
明らかに着色料を使ったと分かる、激甘のケーキやチョコレート……出来れば食べたくない。
「昔はイギリスの植民地だったから……飯マズが浸透しちゃったとか？　飯の不味さまで受け継がせるとか、ブリテンまじ怖い」
「いや、それだけが理由じゃないよ。元々アメリカは荒野だったからね。開拓するために大量のカロリーが必要だったんだよ。料理する時間も惜しいから、味付けは塩胡椒だけみたいに簡素化したわけ」
「で、出来たのがハンバーガーとかポテトなわけかぁ。そう考えると、日本って恵まれてるんだな。同じ島国でもイギリスとは大違いだ」
「だね。イギリスって、色々と不憫な国だよね。薔薇とか刺繍とか、お茶菓子や紅茶は凄く良いけど……料理だけはちょっと」
言い合う二人の脳裏に浮かぶのは、金髪をお団子にした青い騎士王の姿。あの国で王をするのは、本当に大変だっただろうと少しばかり憐憫を覚える。
まぁ、他人事なのでどうでもいい。
デザートも食べ終え、龍之介は食器を洗いながら今日はどうするのかとキャスターに尋ねた。
昨日はかなり暴れまわったので、ほぼ全陣営が簡単には動かないだろう。表立っての動きはそうないと思われる。ならばこちらが動く他ない。
すると、子供はクスクスッと悪戯っぽい微笑を浮かべる。
「大丈夫だいじょうぶ、今日の標的はもう決めてるから」

「へぇ。そこって一体どこ……あ。あそこか」
「そう。龍之介の予想してるとこ」
食器の水分を布巾で拭いながら、キャスターは続ける。
「あそこのマスターだけはあんまり被害入れれなかったからね。多分、まだ頭ん中は甘いと思うんだ～。……鼻くらいは圧し折っておかないと」
「やっぱりそう言うと思ったよ師匠。で、いつ行く？」
「お昼。ご飯食べた後ね」
「食後の運動がてらってわけだ、なるほど。準備はどれくらいしとこうか？」
「そう多くなくて良いと思うよ。悪ふざけする程度だし」
「ＯＫ。じゃ、午後一時くらいにしよう」
「賛成っ。ランチはスタミナがつく奴にするね」
聖杯戦争において最も性質が悪い陣営は、和やかに洗い物を終えた。

そして午後一時過ぎ、昼食を食べて少しばかり休息を取った二人は、とある場所へと向かった。
訪れた先にあるのは、西洋風の豪勢な屋敷。背の高い樹木の中に、赤茶けた壁の家が威厳を感じさせる程堂々と鎮座している。
二人は門を開き、張られた結界をパパッと解いてから、屋根の上にある風見鶏が目印の家の前まで進む。
そして扉をノックする。
「遠坂さーん、こんにちわー！」
「折角なんで、遊びましょー！」
二人はニコニコと笑いながら、真昼間に敵陣を訪れていた。
◇◇◇
時臣は、キャスターをすぐには殺さず捕獲する予定だった。
綺礼曰く、キャスターの言葉が真実ならば、あの子供は神代の『魔法使い』だ。根源に到達し、根源の渦より死者蘇生という実現不可能な「結果」をもたらす力を引き出した、神秘の使い手。

そんな存在が聖杯戦争で召喚されたのは、今回が始めてのことだった。
遠坂を含めた御三家の目的は、根源に至ること。
その根源に到達した存在が、目と鼻の先にいるのだ。セイバー陣営とバーサーカー陣営……正確には、アインツベルンと間桐は確実にキャスターを捕らえんと動くだろう。子供が持つ神秘を我が物にしようと。
いや、動くのが御三家だけとは限らない。どれだけ蓋をし、戸を閉めていようと情報と言うのは流出してしまうものだ。今回の件をどこからか聞きつけた魔術師たちが、キャスター狙いに動き出す可能性も十分有り得る。
だからその前に――――時臣が捕らえる。
キャスターは今までの例に倣わず強敵だが、こちらにはアーチャーとして召喚された英雄王がいる。そして綺礼のアサシンたちもいる。二騎で攻めれば、殺すことは出来ずとも捕縛なら可能のはずだ。
無論、聖杯への願いは変わらない。魔術師としての目的、根源に至る道を放るつもりは毛頭ない。
それでも、我関せずという態度で野放しに出来る様な存在ではないのだ。あのキャスターは。
――――そんなキャスターが、昼時から屋敷へやって来た。
常に優雅たらんとする時臣も、これには焦る。捕獲せんと考えていた相手が唐突に拠点を訪問し、周辺に張った結界を鼻歌混じりに手早く解除したのだから、焦るのも仕方ない。予想外にも程がある。というか、昼に攻め込んでくるとか非常識極まりない。
『あれ？　返事がない』
『もしかして留守？』
時臣が内心あわあわしていると、扉前に仕掛けている魔術がキャスターたちの声を拾った。訝しげな声が、魔術によって時臣へと伝達される。
『んー、どうしよっか師匠。なんかインターホンついてないっぽいし、これじゃ中に人がいるか分かんないじゃないか？　水温察知、昼だと

やりにくいし』
『そだねー。肝心の相手が居ないんじゃ、遊べないし』
そんな会話をする二人に救いを見出し、そのまま一旦帰ってくれと願う。
いくら捕らえようと考えていても、その準備が出来てないのではどうしようもない。むしろこちらが圧倒的に不利だ。
どうかそのまま引き返してくれ、と本気で祈る。
が、
『ま、その場合は本人が帰って来るまで家の中に罠仕掛ければ良いよねー。外出から帰ってきたら、家中トラップまみれ……凄いびっくりすると思う』
『確かに！　そういうドッキリすんのもありだよな！』
『よし決まり～っ。そゆわけで、お邪魔しまーす』
そして聞こえたのは、魔術で扉の鍵が開かれる音。
――勝手に侵入してきた!!
なんてことだ。この陣営、自由奔放すぎる。英雄王レベルで自由過ぎる。
時臣はこういった不慮の事態が大の苦手だ。そんな時臣にとって、我が道を行く彼らはまさに天敵である。こちらの事情も考慮して頂きたい。
厄介極まりない陣営の侵入……これは屋敷に張っておいた罠で待ち構えても安心出来ない。現に今、使い魔の視覚で見た彼らは、わざと罠を発動させながら屋敷内を歩いている。時臣が念のために配置していた罠の数々を、キャスター陣営は嬉々として発動させて楽しんでいるのだ。
これだけでも時臣側が不利だというのに、さらに困った事が今起きていた。
アーチャーである。
アーチャーが今、外出中なのである。
困ったことに、英雄王もまた自由人だった。彼が時臣の言葉をまともに受けるわけがなく、屋敷で酒を飲んだり、街に出て子供と戯れた

りするのが常だ。今日もそれに違わず、そうだった。
しかもアーチャーの場合、呼んでも応じない可能性が高い。彼はとても奔放なのだ。街で遊んでいる最中に呼んでも、大方無視される。令呪を持って命じれば可能だろうが、そんなことで令呪を消費するのは賢くない。それに、プライドの高いギルガメッシュの怒りを買うだろう。
結論。現在時臣、大ピンチ。
それでも時臣は考えた。そしてすぐさま、綺礼に通信を繋ぐことを選んだ。
「綺礼、綺礼っ。今時間があるかね!?」
『はい、今は休憩をしていますが……どうしました?』
「すまないが、今すぐ屋敷に来てくれないだろうか。アサシンも連れて」
『構いませんが、本当にどうしたのですか? そんなに慌てて』
「……キャスター陣営が、遊び感覚で襲撃してきた」
『……はい?』
通信機越しに聞こえた声には、いつになく困惑が滲んでいた。

015

時臣から変な通信を受けた綺礼は、眉を寄せながらも遠坂邸にやって来た。アサシンを連れ、他の参加者とその使い魔の目に入らないよう注意して屋敷に入った彼は、屋敷内の光景に珍しく困惑した。

「……なんだこれは」

魔術師というのは拠点に工房を作り、敵を迎撃するのが一般的だ。正統派の魔術師たる時臣もその例に洩れず、敵が侵入してきた時のために罠を仕掛けている。

その罠がことごとく発動されたあと――――何故か改良されていた。

アサシンを霊体化したまま行かせ、現在屋敷を襲撃してきたキャスターたちの様子を窺うと、彼らは嬉々として罠を発動させ、その後に罠を取り付け直しているとのことだ。

『……不要なものを減らし、必要なものを足して再設置されてますね。詳しいことは分かりませんが、時臣殿の仕掛けた物より侵入者に対して効果を発揮するよう、角度や数を修正しているようです』

そんな報告を受けて、奴らは一体何をしたいのかと綺礼は思った。敵陣の罠をグレートアップさせる意味が分からない。

唯一安心出来る点は、この罠が綺礼に対して牙を向かないところだろうか。おかげで罠の襲撃を受けることなく、時臣の元へと向かうことが出来た。

「失礼します」

扉を開き、視界に入った時臣は非常に微妙な顔をしていた。

「綺礼……よく来てくれたね。今の屋敷の状況、見てきただろう？」

「はい」

「なぜか私の屋敷が、より堅牢にされているんだ」

「そのようですね」

「……キャスター陣営は、一体何がしたいのだろうね？」

「私にも分かりません」

きっぱり答えると、時臣は渋い顔で紅茶を口に含んだ。

屋敷中トラップだらけにしようという言葉を聞いた彼は、守りのための拠点が自分を襲う事態に危機を覚えていた。
だが実際の所は、真逆だ。拠点はより優れたものとなった。それに安堵する反面、敵の癖に敵の根城を強化するキャスターたちの目的が分からなくなってしまった。それゆえの渋面である。
「只一つ分かることは、キャスターたちは我々の想像を超える変人だということですね。無理に理解しようとする必要はないかと」
「うむ。……行動が読めないというのは不気味だが、仕方ない。このまま姿を隠して、彼らが帰るのを待つとしよう」
「では、隠蔽魔術を……」
デーデン
師へと進言していると、妙な音が聞こえた。
デーデン
時臣は首を傾げているが、機械類にそう抵抗の無い綺礼には何となく分かった。昔のとある映画にある、人食い鮫が迫り来る時の音楽だ。テレビ番組のホラー系シーンでも使われるくらい、有名なテーマソングである。
デーデン・デーデン
問題は、それが少しずつ大きくなっているという点だろう。
確実に、何か妙な物が近づいてきている。
ひとまず綺礼は父より倣った太極拳の構えを取った。時臣も、大きなルビーを嵌めた己の礼装を構える。
デデ・デデ・デデデデ――――――！
音楽が大きく、緊迫してくる。
と、バァアアアンッと扉が勢い良く開かれた。
「悪い子はいねがあああああああああああああ!!」
「泣く子はいねがあああああああああああああああ!!」
叫び声と共に飛び込んで来たのは、二体のナマハゲもどきである。
もどき、というのは怒り顔の鬼の面しかつけてないからだ。大きいほうは青鬼の面で、あとはジャケットにズボンというラフな出で立ち。小さいほうは赤鬼の面で、アラブの踊り子のような衣装を身につ

けている。
　ナマハゲというのは太鼓を持っていることがあるが、このナマハゲは太鼓代わりにマラカスをシャカシャカしていた。あれが不気味な音源を奏でているようだ。
　マラカスを鳴らしながら入ってきた大小のナマハゲもどき。これには綺礼も目を丸くする。時臣は驚き過ぎて、ポカンと口を開けたままだ。
「……」
「……」
「……」
「……」
　西洋風の部屋には似合わない顔だけナマハゲが二体に、神父と貴族風の男。
　一人でも濃ゆ過ぎるのが四人も集まっているせいで、部屋の中はカオスだ。鳴らされ続けるマラカスが響かせる、人食い鮫のテーマ曲がひどく痛々しい。
　そうして一分経った頃、小さいナマハゲもどきがマラカスを止めた。
「……思ったより、反応薄かったな。師匠」
「そだね。普段冷静な奴をビビらせたら、かなり面白いだろうなって思ってたんだけど……ライダー親方んとこのマスター君にした方が良かったかも」
　ナマハゲたちはしょんぼりと、落ち込んだ様子で呟いた。

　――結論から言えば、ナマハゲもどきの正体はキャスターとそのマスターだった。
　罠を仕掛け終えた彼らは綺礼たちの存在などとっくに察知していたようで、二人を驚かせるべくナマハゲの真似をしたらしい。
「……それで、その面は一体どう用意したんだ？」
「さっき師匠が作ったんだよ。持ってきてた材料の一部が、面作るのに活用出来そうだったからさ」

人懐っこい笑みと共に答えるのは、明るい髪色の青年。キャスターのマスターである彼は、雨生龍之介と名乗った。
その龍之介の言葉を聞いた後、二人の視線は小柄な子供に向きなおる。
「日本では、鬼の面を被って子供を驚かせたり、面を被った鬼に豆を投げつけるイベントがあるらしいからね～。どう？　上手に出来てるでしょ？」
自画自賛しながら、キャスターは鬼の面を被ってみせる。確かに、貌の造型や表情などは良く出来ていた。小さな子供が見たら泣くレベルである。
一つ気になるのは、その鬼面から神秘の力を感じるところか。
「キャスター……その面に、何を付与させている？」
「ん？　えっとぉ、豆投げつけられても痛くないよう防御のルーンでしょ。あと相手ビビらすための破壊のルーンと、恐怖のルーン。テンション落とさないための力のルーンと希望のルーン。それから、長い間追い掛け回しても大丈夫なように移動のルーンもつけたかな。うん、そんくらい」
言いながら、引っくり返して裏面を見せるキャスター。仮面裏の隅にはルーン文字が彫りこまれている。くだらない目的で作った即席の割りに、高性能な礼装だった。これには時臣の眼も生温い物に変わる。
「キャスターともあろうものが、悪ふざけでそんな物を作るのは如何なものかと思うのだが……」
「良いんですー。くだらないことでも、やる気出してやったら、多少の結果は出るんですー」
「師匠の言うとおりだよ。それにさ、こういう馬鹿騒ぎは若い内にしとかないと損するって」
「そうそう！　二十代後半とか三十路過ぎにこんなことしてたら、白い目で見られるのが大抵だもん。だからさ、そこの神父さんも今の内にこれ被ってナマハゲってみなよ。絶対テンション上がるからっ」
「これで貴方もナマハゲ気分！　ってなわけで、神父のお兄さんにこ

の青いナマハゲ面を進呈するよ」
欲しくもないのに無駄に性能の良い鬼の面を渡され、綺礼は反応に困った。
とりあえず邪魔にならないよう、アサシンに預ける。押し付けられたアサシンは、仮面越しでも分かるほど戸惑っているが、綺礼は無視した。
「それでもう一つ質問するが、なぜ時臣師の屋敷に罠を仕掛けている？　それも、貴様らにとって敵である時臣師が有利になるような罠を」
「ん？　両方びっくりさせるためだけど？」
「……どういうことだ？」
「入った途端におっかない罠が発動したら、侵入した方は驚くでしょ。で、トッキーの方は、仕掛けた覚えの無い罠があることに驚くじゃない。片方だけ驚かせるより、断然お得ですっ！」
笑いながら答えるキャスターの発想は、こちらの予想の斜め上を行っていた。やはり変人の思考は理解し難いものだ。
「……最後の質問をしよう。一体、何をしにここに来た？」
「鬼ごっこ」
「は？」
「食後の運動がてら、鬼ごっこしようと思って。君たちと」
「アサシンのマスターが来てくれたのは、ラッキーだったよなー。わざわざ呼ぶ必要がなくなったし」
「ねー」
まるで話が見えない。
一体どうしたものかと、綺礼と時臣は互いに顔を見合わせる。そして再び、視線をキャスター陣営に向ける。悪ガキみたいなノリの二人は、にっこり笑顔を向けてくる。
「ねぇねぇ。午後三時まで、屋敷内で鬼ごっこしようよー。キャスターさん、遊びたい気分なのー」
「俺も遊びたいはしゃぎたい、そんな気分なんだよなー。俺か師匠のどっちか捕まえればいいだけのゲームだからさ。なっ？」

「なぜ我々がそんなことを……」
「ちなみに僕らのどっちかでも捕まえられたら、僕の令呪を一画あげます」
断ろうとした時臣は、続いた言葉に声も動きも停止させた。
綺礼も瞠目し、確認を取る。
「……キャスター、それは本気か？」
「うん。あと僕ら、鬼ごっこの間は攻撃系とか移動系の魔術は使わないから」
「なるほど……ふむ」
「あ、でも。サーヴァントけし掛けられた場合は、流石に迎撃するよ。ちょっとした行動次第で、アサシン虐殺ゲームになるねー」
顎髭を撫でながら思案する時臣から何か察知したのか、すぐに釘を刺すキャスター。だが、それでも乗るだけの価値があるだろう。
なにせ、ゲームとやらに勝てば、この何を仕出かすか分からない陣営を抑制出来るのだ。消耗しているところを狙えば、令呪をもってキャスターを自害させることも不可能ではない。
「なるほど、中々に魅力的な遊戯の申し出だが……我々が負けた場合は？　何かペナルティでもあるのかね？」
「特には考えてないかな～。君たちと遊ぶのが目的だし。龍之介はどう？」
「んー。俺も別に罰ゲーム付けなくても良いと思うよ。楽しめたら十分」
「決まり～。君たちが負けても、罰ゲームとかは無いよ」
「そして我々が勝てば、そちらの令呪を一画頂戴出来る……と。ゲーム内容は三時まで鬼ごっこをすること、サーヴァントを使用しないこと。そしてキャスターたちは攻撃をしないということ……」
抗い難い魅惑的な報酬と鬼ごっこのルールを口の中で転がしながら、時臣は綺礼に視線を投げかけた。
君は乗るか？　という意味合いの視線を。
流し目を受けた綺礼は、すっと二人を見つめながら問う。
「お前たちは攻撃をしないというが、我々がお前たちに攻撃してはい

けないというルールはあるか？」
「ないよー」
「分かった。……その誘い、私は乗ろう」
と、綺礼は頷く。
時臣も続いて、ゲームへの参加を示した。

綺礼は別に、ゲームに勝利しようとは思っていない。勝てればこちらが優位に立つだろうが、無理をしてまで勝つつもりはなかった。
それでも誘いに乗ったのは、ゲームの間あちらは攻撃出来ず、逆にこちらは好きなように攻撃を仕掛けることが出来るからだ。綺礼の目的は、このゲームに乗る形で、少しでも彼らを消耗させることだ。
仮に向こうがルールを破った場合は、それを盾にして攻めれば良い。他の陣営――――現状から、キャスターに敵意を持つランサー辺りが良いかもしれない――――と同盟を組み、襲撃することが出来るのだ。
尤も、綺礼というより時臣の方が彼らと同盟を組む形になるだろうが。

そんな綺礼の目論見を知ってか知らずか、キャスターは美貌に愉快そうな色を乗せる。
「決まりっ！　そんじゃ、十秒数えてね。その間に逃げるから」
「よっしゃ。じゃ、二手に分かれて行こうか、師匠」
「頑張って逃げようね、龍之介ー」
キャスター陣営は明るい調子で互いに激励を送りながら、足早に部屋を出て行き、其々真逆の方向へと掛けていった。
鬼役となった代行者と遠坂家当主は、それぞれの武器を構えながらカウントダウンを始める。
そして零の言葉を吐き出した二人は、キャスター陣営という名の獲物を捕らえるべく廊下に出た。

ネフレン＝カ　データ

【バーサーカー】

マスター：間桐雁夜

真名：ネフレン＝カ

身長：１８４ｃｍ／体重：７２ｋｇ

属性：秩序・悪（狂）

イメージカラー：黒（夜色）

特技：絵画、儀式

好きなもの：甘味、信仰／苦手なもの：同類、中途半端なこと

天敵：スネフェル、間桐臓硯

触媒：なし

（二人の「怪物との契約で破滅の道を歩む」という共通性）

ステータス

筋力：Ｄ　耐久：Ｅ　敏捷：Ｄ　魔力：Ａ＋＋　幸運：Ｅ　宝具：ＥＸ

保有スキル

【クラス別スキル】

陣地作成：Ｂ

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成可能。

予知夢の内容を記す壁の作成に長けている。

また生前に地下神殿を作った経歴から、地上より地下の方が性能の高い「工房」を作成することが出来る。

道具作成：Ｃ

魔力を帯びた器具を作成可能。

画力に長けており、予知夢を鮮明に書き記すことが出来る。

その身の毛がよだつような壁画を見た者は、低確率でスキル「精神汚染：Ｅ―」が付与される。

狂化：Ｅ（ＥＸ）

理性と引き換えに驚異的な暴力を所持者に宿すスキル。

身体能力を強化するが、理性や技術・思考能力・言語機能を失う。ま

た、現界のための魔力を大量に消費するようになる。
通常時は狂化による恩恵を受けておらず、むしろ狂っていた人格が一回りして正常なものとなった。
とある条件を満たすことで、このスキルは最高ランクに跳ね上がる。

【固有スキル】

カリスマ：B
大軍団を指揮・統率する才能。
異形の神々によりもたらされた恐怖と狂気による信仰と政治。
本来はA＋だが、狂気が薄れているせいかランクダウンしている。

二重召喚：B
二つのクラス別スキルを保有することができる、極めて希少なスキル。
ネフレン＝カの場合は、バーサーカーに加えてキャスターの特性を併せ持つ。
特性は基本どちらかのクラスに偏っており、通常時はキャスター寄り、狂化時はバーサーカー寄りとなっている。

未来予知：A（×）
邪神ナイアーラトテップによって与えられた、未来を視る力。
正確にはナイアーラトテップにより決定づけられた運命を視る力であり、邪神の気分次第で予知が外れたりすることもあれば、予知の力そのものが剥奪される場合もある。

精神汚染：E（EX）
精神が錯乱しているため、他の精神干渉系魔術をシャットアウトできる。ただし、同ランクの精神汚染がされていない人物とは意思疎通ができない。
このスキルを所有している人物は、目の前で残虐な行為が行われていても平然としている、もしくは猟奇殺人などの残虐行為を率先して行う。
普段は最低ランクで、少し話が合わないことがあるものの会話可能。

とある条件を満たすことで最高ランクに跳ね上がり、この状態で会話した相手にスキル「精神汚染」を付与する。会話回数が多いほど、付与されるスキルのランクは上昇する。

神性：Ｂ

神霊適性を持つかどうか。ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。

「粛清防御」と呼ばれる特殊な防御値をランク分だけ削減する効果がある。

邪神ナイアーラトテップの加護を持ち、ナイアーラトテップの化身説があるため、人の身でありながらもこのスキルを所持する。

【宝具】

輝く偏方二十四面体（シャイニング・トラペゾヘドロン）

ランク：ＥＸ

種別：対人（界）宝具

レンジ：―

由来：地下神殿に鎮座され、邪神召喚の触媒である赤黒い宝石

暗黒星ユゴス（冥王星）で創り出された冒涜的な招喚器。

異界を覗き見るという伝承が変じ、魔術的な隠蔽や結界が施された場所でも覗き見ることが出来る高ランクの水晶玉のような効果を持つ。

また宝石を闇に閉ざして真名を解放することで、ナイアーラトテップの化身「闇をさまようもの」を召喚することが出来る。

ネフレン＝カは邪神召喚の際に狂信者となったため、「闇をさまようもの」の召喚と同時に性格は狂に変わり、狂化と精神汚染のランクはＥＸに上昇する。

宝石自体に膨大な魔力が備わっているため、魔力炉としても優秀。

異界とまみえし悪鬼の鏡（ミラー・オブ・ニトクリス）

ランク：Ａ＋

種別：対人（対宝具）宝具

レンジ：―（１～９９人）

由来：地下神殿に鎮座され、のちにニトクリスの鏡と名付けられた

青銅鏡
悪鬼や食屍鬼の姿が鋳込まれた、青銅製の枠にはめ込まれている鏡。
ショゴス、グールを召喚する効果を持つ他、理解の範疇を超えた異界が広がる鏡の中に入ることで、遠く離れた場所へ移動することが可能。
また真名を解放することで、自分以外の者を鏡の中に閉じ込める。
異形の怪物が蠢く異界に閉じ込められた者は一般人ならば発狂し、魔術師ならば精神的妨害で高等魔術を制限され、サーヴァントならば知名度がゼロとなり宝具が使用できなくなる。閉じ込めるサーヴァント次第では有利に立てる「宝具封じ」の宝具。
ただ魔力消費が激しいため、宝具解放は五分が限界。
マスターが雁夜でなければ、もっと長く使用出来るかもしれない。
抹消されし暗黒の王（デリート・ザ・ブラックファラオ）
ランク：B
種別：対己宝具
レンジ：0
由来：その忌まわしさから、後世の記録より存在が抹消されたエピソード
常時発動型の隠蔽宝具。
真名や宝具は勿論のこと、あらゆるスキルやステータスといった情報を隠蔽し、サーヴァントとしての気配も感知させない効果を持つ。
真名を看破、もしくは自ら真名を晒した場合、この宝具の効果はなくなる。
人物
バーサーカー召喚の際、便乗して現界したサーヴァント。
赤銅色の肌と漆黒の長髪を持つ、常日頃から不機嫌な顔をしている長身痩躯の美青年。エジプトの神官王だったため、ファラオの出で立ちをしている。
本来ならば悪逆非道の限りを尽くす狂った人格のはずだったが、狂戦士のクラスで現れたため一周回って比較的まともな人格となった。

傲慢不遜で不愛想な毒舌家。口も手も出る苛烈な性格で、利己主義かつ自己中心的。無知であることを罪とし、「王こそが誰よりも血に塗れ、己が手を汚すべき」という考えを持つ。かつては国に使える神官だったにも関わらず前王フニから王位を簒奪し、第４王朝の創始者スネフェルに討たれて幽閉された「叛逆の暴君」。フニが王位を継ぐ前に出来た子で、スネフェルたちとは異母兄弟の間柄にある。

望む結果を得るためならば非情な手段を取る魔術師らしい魔術師である反面、即決的な判断力や並外れた胆力の持ち主であり、かつての信仰をばっさり切り捨てて邪神崇拝を始めたり、信仰する神がキャスターのクラスで召喚されたことを感知するとランスロットの鬣を引っ掴み召喚に乱入するなど、非常にアグレッシブ。

また冷酷かつ残忍な割に、前王の子らを仕留め損なって下剋上されるといった「うっかりや」な面もある。

敵意や悪意には慣れている反面、好意や善意には耐性がない。そのため感謝されたり好意を向けられると困惑する。

本来の性格属性は「善」だったが、波瀾万丈な人生から性格に歪みが生じ「悪」になった。とはいえ、元の人が良い部分も残っている。「悪」要素は手段を選ばなくなったところ程度かもしれない。

良識的ではないが常識的。エジプトには下着の類もちゃんとあったため、羞恥心はそれなりにある。よって、出身的なものからライダーやアーチャーらの同類と扱われたくないらしい。

物事を曖昧にせず、相手にキチンと伝わるようハッキリと言動で考えを表明する性質。知らないことは知らないと言い、分からないことは分からないと告げ、言いたくないことは言いたくないと答える。基本的に正直に返答するが、嘘をつけないわけではなく、公私を分けて言動することは可能。単純に歯切れの悪い、どちらとも言えないような中途半端な受け答えをしないだけである。

自身の感情に正直過ぎて気難しく、歯に衣着せぬために口が悪い。だが下手な慰めや誤魔化しをしない、ある意味で真摯で誠実な態度を貫く青年。

クールな見た目によらず甘党で、コーヒーより紅茶派。現代では当

然となっているビールの苦さに、少なくないショックを受けている（醗酵してすぐのビールは甘く、長期保存を効かせるためにハーブを加えたビールは苦いため）。

絵は結構上手いのだが、予知夢の際の絵だけはおどろおどろしい。写実主義者であるため作画はリアルタッチで、祖国伝統の抽象的な絵は苦手というか性に合わない。

目的はキャスターに謁見し、叶うなら隣に立つことで、聖杯は二の次以下。聖杯戦争には一切の興味がなく、心底どうでもいいと思っている。

その目的を果たすべく、雁夜に協力し、条件として桜の保護やバーサーカーが消費する魔力の肩代わりをしている。

能力

「架空元素・虚」と「架空元素・無」の二重属性。

聖杯に頼ることなく「ありえるが物質界にないもの」であり、「ありえないが物質化するもの」であるキャスターに出会う機会を得たのは、この類稀な属性を併せ持っていたため。

ただこれが原因で周囲から迫害を受けたり、魔術師から追い掛け回されたため、彼自身は己の魔術属性をあまり気に入っていない。

基本的にはクトゥルフ系魔術とアトランティス文明から伝播した魔術を使用。自ら血塗られた悪政治を行っていたこともあり、武術や拷問術も嗜み程度に修得している。

サーヴァント召喚について来た形であるため、スキルや宝具を所持。中々に優秀な宝具が揃っているが、魔力消費の激しさから扱いは難しい。

016

遠坂邸にて自由極まりないキャスター主催の鬼ごっこが始まる数時間前、

「おい鶴野、何をのろのろしている。草抜き程度、さっさと済ませろ」

二人いるバーサーカーの片割れ……ネフレン＝カは、角鉈を片手にそんなことを言っていた。

「無茶言うな！　お前、この庭がどれだけの広さだと思ってる!?」

そんな彼に怒声で応じるのは、癖のある青みがかった髪をした男。お飾りとはいえ間桐家現当主であり、ネフレン＝カのマスター「間桐雁夜」の兄――――間桐鶴野である。

頭にタオル、腕まくりした手に軍手を装備した鶴野の言葉に、ネフレン＝カは鉈を振るう手を止め、口元に丸めた指を添えながら答える。

「王宮仕えではない術師の家にしては、中々のものだな」

「そうだろうな。でだ、こんなだだっ広い庭に生い茂った雑草、俺一人で何とか出来るか!!」

「知らんな。手入れを怠った貴様らの責任だろう」

好き勝手に生えて育った雑草の群地を指さし吠える鶴野に、しかし彼は鼻を鳴らして応じる。

「話はそれだけか？　なら口でなく手を動かせ、私もそうする。私も私で、この鬱陶しい蔓や枝を相手取るのに忙しいからな」

秀麗な顔を不機嫌に歪めた男は、そう言って角鉈を振り上げた。伐採作業には向きそうもないエスニックな現代服姿だというのに、ネフレン＝カは苦にした様子もなく邪魔な枝を落としていく。

結い上げた黒髪と巻きつけたターバンの端を揺らしながら、黙々と動くサーヴァントの背を見つめた後、鶴野は舌打ちしながら朝の出来事を回想する。

――――いつものように泥酔の果てに眠っていた鶴野を襲ったのは、鳩尾にめり込む蹴りだった。

「ぐふっ!?」
人体急所を容赦なく狙った攻撃は綺麗に入り、彼は体をくの字に折り曲げながら覚醒するはめになった。
「……お、前。い、きなり、なにす……!?」
鶴野は腹を抱えて苦悶しながら、蹴った奴を睨むように見上げる。
夜を思わせる黒い長髪と、赤銅色の肌。目は切れ長で睫毛は長い。高い鼻梁の細面に浮かぶ表情は険しく、色男特有の甘さはなかったが、けれど世の女性を魅了するような麗しさがあった。
――――第四次聖杯戦争におけるイレギュラー、ネフレン＝カ。
雁夜のバーサーカー召喚に便乗して現れたそいつは現在、愚弟との契約で桜を保護している。やたらと偉そうな黒人系美男、というのが鶴野からの印象だ。
その、鶴野を足蹴にした張本人は、鉈だの鋸だのを入れたバケツを片手に告げる。
「庭が随分と見苦しい有様だ。手入れをする、手伝え」
「……は？」
もちろん、最初は拒否した。
なぜお飾りとはいえ、当主である自分がそんなことをしなければいけない。そんなこと、お前一人ですればいいだろと。
そう言った次の瞬間、ネフレン＝カの靴先が鶴野の顎を突き上げた。
細身の優男とはいえ、仮にもサーヴァント。その一撃は鶴野を一瞬気絶させるほど重い威力を秘めていた。
シーツへと沈む鶴野を無感動に見下ろしながら、美男は仏頂面で吐き捨てる。
「口答えするな、海藻頭の癖に生意気だ」
「海……!?」
「当主の他に仕事をしているならともかく、酒に溺れて現実逃避ばかりしている暇人だろうが貴様は。それだけ暇が有り余っているのなら、ぐだぐだ言わずにやれ。初めから貴様に拒否権などない」
茫然とする間桐家当主の首根っこを掴み、そのまま彼は中庭へと向

かった。
そうして、現在に至る。
「雁夜の奴、よりによってこんなサーヴァントを呼び出しやがって……」
根深い雑草相手に奮闘しながら、鶴野は愚痴る。もし彼の弟本人がこの愚痴を聞いたなら、「俺が呼んだんじゃない、向こうから来たんだ」と反論していたことだろう。
再び舌打ちしながら、鉈を枝へ目がけて振り下ろすネフレン＝カを盗み見る。
男である自分から見ても、美形だ。嫌味なまでに顔が良い。背は高いし、細いがちゃんと筋肉がついている。弱弱しい印象がない。かといって男臭いわけでもない。どこか清潔感のようなものを感じさせる。
そんな外見とは対照的に、性格は最悪だ。上から目線で口が悪く、暴力的。ズバズバと毒を吐き、痛いところを突いて攻めてくる。口答えすれば、たちまち拳や蹴りが飛んでくる。
だけど、女どもはきっと彼の言動を許すのだろう。
いわゆるアレだ、「ただしイケメンに限る」である。ムカつく。
イケメンへの憎しみが増幅していくと同時に、鶴野は息子をちゃんと愛してやれるか心配になってきた。
今は外国に留学中である、一人息子の慎二。髪質は自分似だが、顔立ちの方は似ても似つかぬ愛らしさだ。きっと将来、女に人気が出るだろう。目の前の男と系統は違うが、同じく美形になるに違いない。
「何をぼぅっとしている。ちゃんと働け」
肩を竦めて考え込んでいると、背を足蹴にされた。振り返れば、鉈を手の中でクルクルと回すネフレン＝カが、鶴野を冷たく見下ろしていた。
「う、うるさいな。ちょっと休んでただけだろ」
「ほとんど働いていないくせに、随分と長い休憩だな」
鶴野の言い訳に応じながら、彼は鉈の角ばった刃先を突き付けてく

る。その声は向けられた鈍色の刃同様に冷ややかなものだ。鶴野に対する敵意や苛立ちがありありと伝わってくる。
「まったく、貴様らの不精ぶりには呆れる。折角の中庭だというのに……この有様になるまで放置するとは」
「あんまり手入れし過ぎても後が面倒なんだよ！　親父が……臓硯の奴が直射日光を嫌がるからな」
「あの老いぼれ、日光が駄目なのか？　蟲のくせに死徒みたいな爺だな」
　艶のある髪と布を揺らしながら、彼は首を傾げる。そんな姿すら絵になるような様だから、腹が立つ。これだからイケメンというものは。そんな苛立ちを滲ませながら、鶴野は彼に教えてやった。
「臓硯は蟲で出来た体で生きてるからな。だから、光が入らないようわざとこんな風にしてるんだ」
「昼夜逆転した引きこもり爺の都合なんぞ知らんな。私はあの老いぼれが気に入らん、気を使ってやる義理はない。むしろ消滅してしまえば良い」
　あの恐ろしい臓硯相手にも、暗黒の王は毒を吐く。その苛烈というか怖い物知らずにも程がある言動に、鶴野は顔を強張らせた。この反骨精神や悪態ぶりはマスターの雁夜に通じるところはある。
　けれど声音に滲む何とも言えない感情から、弟とは違うように感じた。
　その理由を聞こうかと思い悩んでいると、屋敷から小柄な人影がそぉっと姿を見せる。
「あの……」
「なんだ、小娘か」
　ネフレン＝カの切れ長い目が、ワンピースに身を包んだ少女を捉える。
　姿を見せたのは間桐桜だった。旧名は『遠坂』桜。齢六つほどになる少女は間桐に並ぶ御三家の一つ『遠坂』からの養子であり、臓硯に母体として目をつけられた少女だ。
　桜は元々物静かな印象の少女だったが、養子に出されてから一年

経った今では生気の欠片すらない。妖怪による調教により、少し癖のあった黒髪は真っ直ぐとした菫色に染まり、同じ色に変貌した瞳が虚ろにどこかを見つめているかのような眼差しを向けてくる。
自分の親のせいであるとはいえ、なんとも不気味な少女だ。鶴野はサッと目を逸らし、桜を視界に入れないようにした。
対するネフレン＝カはというと、変わらぬ冷淡な態度だ。しかし、流石に暴力は振るわない。悠々と歩み寄り、膝を折って視線を合わせる。
「何の用だ、小娘。私は今、見ての通り中庭の手入れ中だ」
「レンさん……あの、時間」
桜の言葉に、青年は腕に巻いた時計をちらりと見やる。
「む、もうこんな時間か。思ったより作業が進まなかったな」
そう呟いたあと、ネフレン＝カは桜の手を引き、屋敷に向かう。
途中、彼は振り返って鶴野を真っ直ぐ見つめて、告げる。
「今から小娘の修行をする。鶴野、貴様は草抜きを済ませてから休憩に入れ。サボるなよ」
「……分かったよ」
サボったら確実に蹴られるだろうと予想しながら答えると、彼は「あぁ、それとだ」と続ける。
「貴様の酒類は没収する。禁酒しろとは言わんが、量は控えろ。酒は嗜むものであって、溺れるものじゃない。――――逃げることは、許さない」
一際声を低めて、彼はそう言った。
臓硯に勝るとも劣らない威圧感に、背筋が凍る。体が強張る。冷たい汗が噴き出してくる。まるで蛇に睨まれた蛙の気分だ。声どころか呼吸すら出来ない。
「ではな」
その後ネフレン＝カはこちらに背を向け、桜と共に姿を消したが、鶴野は数分の間身動き一つ取れなかった。
本当に、弟はとんでもないサーヴァントを呼び出してくれたものだ。

◇◇◇

桜の手を引く大きな手は、少し不思議な色をしている。白くもなく黒くもなく、黄色味を帯びているわけでもない。少し暗めの、赤茶色だ。

「レンさんは、どうしてそんな色の肌をしているんですか？」

「人種的なものだ。我ら古きエジプトの民は皆、私のように赤い銅色の肌をしている。この肌は我らの証であり、誇りだ」

桜の言葉に答える青年は、とても綺麗な顔をいつも怒っているような表情にしている。だけど、特定の話の際には笑う。温かみのある笑みだ。

父である時臣とも、叔父になった雁夜とも違う笑み。だけどそれは、すぐに消えた。刃物みたいに鋭い目が、さらに鋭く細められる。

「……何の用だ、老いぼれ」

「くっくっく」

彼が呟くと同時に、一人の老人が杖を突きながら顔を見せる。絵巻物の妖怪めいた着物姿の老人が現れたその瞬間、桜は体を小刻みに震わせた。

「いや、なに。理由など別にないわ。少々早く目が覚めただけじゃて」

「それ以上近づくな」

杖を突きながら一歩踏み出した老人――――――臓硯へと、ネフレン＝カが告げる。途端、臓硯の動きが止まる。蟲と化した翁に、目に見えぬ何かが巻き付いて彼を捕えている。そんな風に感じた。

「ほほぅ、これが噂に聞く虚数属性の魔術か。そう滅多にない魔術を体験出来るとは、儂も運が良い」

「既に本来の肉体がない貴様にはよく効くだろうな」

「くくくっ……そう警戒するでない、消し去られた暗黒の王よ」

「無理な相談だ。貴様を小娘に近づけないことが雁夜との契約の一つだ」

目元を険しく寄せる彼に、老人はくつくつと笑った後、問いかける。

「なに、今回はちと問いたいことがあっただけのことよ。……儂から桜を取り上げる代わりに、お主が提示した条件についてだ」

「貴様に三つ挙げたアレのことか。なんだ、信用出来ないとでもいうつもりか？」
「当然じゃろう」
　深く頷いた後、臓硯は三本の指をひとつずつ立てながら内容を語る。
「条件その一、慎二に魔術回路を与える。条件その二、慎二と桜に架空元素の魔術を修得させる。条件その三、儂により都合の良い延命法を与える。……どれもこれも叶えるに難しいものだと思うがの。それを三つともとなれば更にだ」
「ふん。信用出来ないというのなら構わん。私には、貴様の思考を変えることは出来んからな」
　見るのも不愉快とばかりに臓硯を睨みながら、ネフレン＝カは「だが」と続ける。
「私は曖昧なことが嫌いだ。だから、出来るだけハッキリと告げる。どうとでも取れる言い方はしたくない。そして私は、それらは『出来る』と断言する」
「嘘かもしれんがの」
「そうだな、私は嘘も吐く。多かれ少なかれ、知恵ある者は嘘を吐く」
　だから、人は疑ったり信じたりする。裏切り、裏切られが生じる。
「貴様は慎重派だな。だが、腰が重すぎる。その腰の重さ、慎重さゆえに貴様は破滅するだろう」
「……それはお主の未来予知によるものかの？」
「そうだと言っても、貴様は疑うだろうな。別に構わん。好きなだけ疑え。そうして勝手に自滅しろ。願いを見失い、目的と手段が入れ替わり、その矛盾に気づくことすら出来ん馬鹿な老人よ。精々派手に、惨めたらしく散ると良い。外道に落ちた者の末路は無様が相応しいからな」
　憐憫と嫌悪が入り混じった目で一方的に吐き捨てた後、ネフレン＝カは恐怖で身動きが取れない桜を抱き上げ、何食わぬ顔で臓硯の脇を横切る。
　そのあと、彼は桜を抱えたまま部屋の前に立つ。

「部屋に入ったら修行を始めるぞ、小娘。教えることは多いからな、怯えたりする暇や余裕は与えんぞ」

傲慢な物言いだったが、震える少女を安堵させるには十分だった。

017

部屋の扉が開かれると、一番に桜を出迎えるのは、匂いだ。
ネフレン＝カが現在使用している其処からは、いつも不思議な匂いがしていた。部屋の主である彼が持ち込んだ魔術の様々な触媒や薬が入り混じった、なんともいえない、でもどちらかといえば甘くていい匂いだ。それが部屋の中にほんのりと漂っている。
入るたびに思うが、不思議な内装だ。そこにはベッドがある。テーブルと椅子がある。床には絨毯が敷かれている。間桐に元から置かれていた家具だ。
でも、本棚の中には見たことがない文字で綴られた本が詰められている。料理に使う時より小さな鍋や乳鉢などもある。テーブルの上には魔術師の家にはないはずのパソコンが置かれ、部屋の脇に小型の冷蔵庫が鎮座している。割ときっちりした性格だからか、小物入れの触媒や薬は分類別に分けられていた。他にも綺麗な石や変わった形の植物など、目を惹くものが沢山ある。
何度見ても見られない室内をきょろきょろと眺めていると、青年は「先に座っていろ」と桜に命じた。言われるまま椅子に腰かけると、ネフレン＝カが冷蔵庫の扉を開ける後ろ姿が見える。中には砂糖入りの紅茶や果物のジュースが入ったペットボトルが収納されていた。
「小娘。シャーイとアスィール、どちらにする？」
「えっと……お茶で」
「分かった」
桜の顔を水に返事した彼は紅茶を取り出してから扉を閉めると、何もない空間に手を突っ込む。
そこから、ずるりと擬音が付きそうな具合にコップが取り出される。
「さて、とりあえず昨日のおさらいでもしていくか。一朝一夕で覚えられる内容でもないからな」
普通ならあり得ないことを当然のように行った彼は、そんなことを言いながらコップをテーブルに並べ、紅茶を注いでいく。

それから始まったネフレン＝カの講義に耳を傾けながら、桜は初めて彼に出会った時のことを思い出していた。

「端的に言うが、小娘。お前は生まれた時点で詰んでいるぞ」

それが、桜を一瞥したネフレン＝カが口にした言葉だった。

「一目見て気づいたが、お前の魔術師としての属性は虚数だ。魔術師として極めて珍しいとされる、架空元素を扱う素質がある」

「虚数……？　それに、架空……元素……？」

「なんだ。お前の親も、あの老いぼれも、何もお前に話していないのか」

今まで聞いたこともない言葉、単語。それに感情が希薄だった桜が思わず戸惑いを見せると、青年は肩を竦めた。その後、簡単にだが教えてくれた。

魔術には二つに分類される属性がある。

火や水といった自然界に存在する五大元素と、前述したそれとは全く違う力を持つ架空元素だ。

桜はその架空元素の一つである虚数、または虚と呼ばれる属性を持っているのだという。

「架空元素持ちの人生は、五大元素を持つ者のそれより険しいぞ。常日頃から周囲の目を伺い、警戒しなければならない。少しでも隙を見せれば、殺される」

「ころ、される……？　誰に、ですか？」

「誰にでもだ」

怯えを見せる桜に、彼はきっぱりと断じる。

「知能があるものは好奇心が強く、珍しいものが好きな連中が多いからな。中でも魔術師という生き物は、道徳観念が薄いのが殆どだ。私を含めてな。何もせず生きていれば、腹を裂かれて血を抜かれ、防腐処理されて展示されるぞ。研究材料、あるいは検体として、ほぼ永久的に」

彼の説明は感情が欠如されたように静かに、淡々と響くものだった。

だからこそ――――――恐ろしいと思った。彼の口ぶりには虚飾や過剰な表現がされていない。今言われたことが、紛れもない真実だということだ。

そうして桜は、彼が先ほど言った『詰んでいる』という意味を理解する。

このまま間桐臓硯に虐待され続ける地獄。それから解放されても、先にあるのは地獄だけだ。どこの魔術師の家に養子として出されても、実家である遠坂に居続けても、桜が救われることはない。桜は怯え続けなければならない。

人に。

人を辞めたものに。

人ですらないものに。

ずっとずっと――――――怯え、震え続けなければならない。

生まれて来なければ良かったと、絶望しなければいけない。

そんな未来が、己が歩む道として提示されているのだ。

「……っ、ぁ……うあ……!!」

枯れたと思っていた涙が溢れた。

嗚咽は段々と大きくなり、目の前が涙で滲んでぐしゃぐしゃになった。

桜は膝を付き、言葉ともいえない言葉をうわ言のように繰り返し呟きながら蹲る。ぼろぼろと零れ落ちる滴で、床を濡らしながら。

青年のものであろう視線を感じる。その直後、扉が荒っぽく開かれた。

「桜ちゃん……!」

死人みたいな声。見上げて、ぼんやりと浮かぶ姿も死んだ人みたいだと桜は思った。一年前はこんなではなかった。髪は黒かったし、顔が引きつってもいなかった。目の色も普通だった。左腕だってちゃんと動いていた。変わっていないのは、服装くらいだ。タートルネックにパーカーを重ねて、ズボンを履いている。

「ネフレン＝カ！　お前、桜ちゃんに何をした!?」

「お前に教えたことを、小娘にも告げただけだが」

声を荒げながら凄まじい形相で近づいていく、叔父の雁夜。黒い長髪の青年はしかし、不機嫌な顔で眉を寄せて殊更機嫌悪そうにしながら質問に答える。
返答を聞いた雁夜の喉が、ひゅっと鳴る。
途端、彼は先ほど以上の大きな声で言い募る。
「どうしてそんなことをした!? 桜ちゃんはまだ幼いんだ、そんな酷い話を教える必要なんてどこにも……!!」
「無知であることは罪だ」
前のめりになる雁夜の目前に人差し指を接近させ、ネフレン＝カは語る。
「その罪は知らなかった側、知らせなかった側、どちらにも課せられる。知らないことは免罪符にはならない。知ろうと思えば知れたことなら尚更だ。それが罪と知り理解してなお行う悪行は罪深いが、何も知らず解りもせず行う悪行も同じくらい、下手をすればそれ以上に罪深い」
その言葉の内容にうっと呻きつつも、少しずつ近づいてくる指を払いのけ、雁夜はがなる。
「だからって、今話さなくても良いだろ!?」
「なら、いつ話す気だ?」
切れ長いネフレン＝カの眼差しが、雁夜へと向けられる。感情のない、綺麗で真っ直ぐとした、それゆえに恐ろしいと感じる目だった。
「雁夜。貴様はあの老いぼれと契約によって蟲を体内に取り込み、一年と生きられない体だろう。そうでなくとも、必ず死者の出る聖杯戦争とやらに出るのだろう。そんな貴様が何故、『いつか』を語る? 来ないだろう未来へと後回しにすることを選ぶ?」
「それは……っ」
「老いぼれは大方このことを話さんぞ、貴様の兄もな。小娘の元の親は何一つ知らんし、知ったところで小娘が無事でいられる方法を見つけられんだろう。だとすれば、今の貴様のように後回しにするぞ。『いつか』、『いつか』、『いつか』――――来ることのない『いつか』を選び続けるぞ。その方が小娘のためだと思って、自分にそう言い聞か

せてだ」
「でも、それでも、桜ちゃんの心を傷つけるようなことは……」
「それが貴様なりの優しさとやらか？　とんだ勘違いな優しさだな。誤魔化しや甘い嘘で救われる奴は一握りだ。貴様にとっての優しさは首に絡みつく真綿と同じ。気が付かないほど緩い力だが、確実に首を絞めていくぞ」
誤魔化し続けることは無意味だ。
それでは決して、救いにはならない。
言葉を選ばないキツい物言いで、黒きファラオはそのことを突き付ける。どこまでも厳しく、率直な反論。情け容赦も手加減もあったものではない。頭に痛いのに、耳を塞ぐことが出来ない。雁夜なりの優しさを否定する言葉に、彼は青ざめ、後ずさりする。
「それだけならまだ良いがな――――この事実を、小娘が何らかの形で『途中』から知ったらどうなるか、考えているか？」
「え？」
目をすぼめて続ける青年の言葉に、雁夜はポカンと呆けたような顔をする。
それを見て、ネフレン＝カは更に顔を顰めた。
「私は好かんのだがな、世の中には『偶然』だの『不慮の出来事』だのというものがあるだろう。そういう何らかの切っ掛けで、このことを小娘が後から知ったらどうなると思う？」
「どうなる、って」
「薄々そのことを知っていたり心当たりがあったのなら、そこまで衝撃は大きくないだろう。……だが、もし何も知らなければ？　自分がどれだけ危険な状態にあるか全く知らず、平凡に生きていたら？　そこから不意打ちで事実を知れば？　確実に荒れるぞ。心身ともにな」
そう、雁夜の――――ごく普通の人間が考える優しさは、単なる温い甘さではない。事実が公になった途端、豹変するのだ。
ゆるゆると喉を絞める真綿から、一息で首を撥ね飛ばす鋼糸へと。
「とりあえず、小娘に粗方のことを伝えておく。貴様が聖杯戦争に参加する理由なんぞもな。……全く。日本人というのは面倒くさいこ

とこの上ないな。隠し癖や誤魔化し癖が多過ぎる。もっとハッキリ言え、でなくば何も伝わらんぞ」
　艶やかな黒髪を苛立たしげに掻きながら、ネフレン＝カは桜を見下ろす。未だ泣きじゃくる少女をしばし見下ろした後、しゃがみこんで顔を上げさせた。
　そのまま、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を見据えて、彼は言う。
「小娘、明日から教育と修行を始めるぞ。今まで教わってなかっただろうことも詰め込まなければいかんからな。多少早駆けだが、文句は言うなよ」
「……え？」
　彼の口から紡がれた内容に、桜は泣くのを止めて目を丸くする。
「まずは老いぼれと交渉して、お前の教育権を奪い取らないとな。あの蟲爺が欲しがりそうな条件をいくらか考えてはいるが、少々時間が掛かるかもしれん」
「……お、おい。ネフレン＝カ？」
「なんだ？」
　茫然としていた雁夜に声を掛けられ、彼はそちらへと整った顔を向ける。
「お前、さっき桜ちゃんは色々と終わりだの言ってなかったか？」
　すると、ネフレン＝カはあからさまに顔を顰める。
「そういう貴様……いや貴様らこそ、私の話を聞いていないな？　私は、『何もせず』生きていれば、死ぬといったはずだが？」
「……？　つまり、どういう」
「今から教育して、護身程度でも魔術を身に着けさせれば、将来的な生存率は上がると言っている」
　告げられた言葉に、二人は目を見開く。
　だがすぐ、雁夜は訝げに尋ねる。
「でも、誰が桜ちゃんに魔術を教えるんだ？　桜ちゃんは虚数だとかいう、滅多にない属性なんだろう？」
「その点は問題ない。私が教えれば済むことだ」

「は？」
「しかし、これは中々愉快なものだ。まさか、私と同じ属性を持つ者と出会う機会が来るとはな。あの時代でもかなり珍しかったから、神秘が薄れた現在にはもう現れないだろうと思っていたのだが」
「お、おいネフレン＝カ？　お前、さっきから何を言って……？」
ぶつぶつといまいちよく分からないことを口ずさみ、自分一人で何やら納得している彼の肩を、雁夜は怖々しながら叩く。
すると彼は「ん？」と首を捻った後、しばらくして「……あー」と何か思い出したように真伸びた声を上げる。
と、
「そういえば言ってなかったな。私の属性は架空元素の『虚』と『無』だ。これのせいで幼少期から魔術師に追い掛け回されたものだ。何度か解体されかけたな。冗談抜きで死に掛けた。まぁそのおかげで魔術は身に付いたし、神とお会いする機会が得られたから良しとしよう」
唐突な宣言とカミングアウトに、二人は開いた口が塞がらなかった。
それを無視して、暗黒の王は桜へと手を差し出す。
「最初の教えだ、小娘。我ら魔術師は零から生まれる奇跡はまだ起こせない。しかし、零でなければ起こしうるのだ。どれだけ成功率が低くともな。諦めれば可能性は零に帰すが、諦めなければいつか必ず成し遂げられる。だから――――諦めるな。自分なりの幸福を願い、望むならば」
そうして、彼は桜の師となった。

018

彼の弟子となってから、桜はネフレン＝カに多くのことを教わった。

魔術とは根源という大本から分離した、劣化した神秘の力であること。魔術師はその根源への到達を目指している者であること。魔術師と一般人の一番の違いは、魔術回路の有無であること。魔術回路というのは魔術師が必ず持つ神経のようなもので、発電機に似た役割を持つこと。回路の数は生まれた時から決まっていて、歴史の古い家ほど回路が多く優れていること。魔術には属性があり、魔術師はそれぞれ何らかの属性を持っていること……。

幼い桜には難しい内容だったが、ネフレン＝カはそれを解りやすいよう噛み砕いて説明した。説明の噛み砕きには彼も苦労したようで、講義の途中彼は何度も紙に説明内容を書き込み、出来るだけ分かりやすくなるよう推敲していた。

とはいえ、それは最初の時だけ。おさらいである今回はその解釈した内容を振り返るだけなので、ややぐだぐだだった前回より早いペースで行われた。

おさらいを終えた後は次の講義、魔術属性へとステップアップする――。

「魔術属性には二つの分類がある。五大元素と架空元素だ」

と、グラスの紅茶で喉を潤しながら、ネフレン＝カは語る。桜も同じく紅茶をくぴくぴと飲む。時計塔の講師なら注意しただろうが、彼は咎めない。幼い桜が脱水を起こすのを防ぐため、ネフレン＝カは講義中の飲食を許している。

「五大元素は自然界にある火・水・地・風に空を加えたものだ。空は天体……宇宙にある物体、エーテル体というエネルギーのことだ。火は魔術師に最も多い属性で、逆に風などは珍しい」

「火は多いけど、風は少ない……？　どうしてですか？」

「火が多いのは、五大元素の中で最も親しみ深いからだろう。火は人

類が生み出した物の一つだからな。逆に、風や空は実態がない分、どういうものなのか分かりにくい。目に見えない物を力として身に付けるのは、難しいだろう？」
「分かりやすいもの程身に付けやすくて、扱いやすい……ってこと？」
首を傾げながら確認を取ると、青年は「大方な」と頷いた。
「そして次は架空元素……私とお前が持つ属性だ。この元素の特徴は、あやふやなこと。これに尽きる」
「あやふや……風や空より、分かりにくい」
「そうだ。まず説明するのは『虚』、または『虚数』。これは魔術において、ありえるが物質界にはないもの……不確定を操る属性だ」
と、そこで彼は床を指差した。なんだろうと思い、桜は足元の床を見つめる。床には二人と家具の影が落ちているだけである。
「手本を見せる。――――例えば、影」
呟きの後に詠唱すると、彼の影が揺らぎ、実態を持って浮かび上がる。
「次に、空間」
先ほどのように空に手を埋め込み、指の間にサイコロを挟んで引き抜く。
「それから、確率」
ネフレン＝カの指がサイコロを放り投げ、賽がテーブルに転がされる。彼は一連の行動を六回続ける。テーブルの上を踊るサイコロは全て、最初の時に出た六の目揃いだった。
「……と、こんな具合か。つまり虚は名称こそあれど実体のない、定めた形状を持たないものを操る力だ。曖昧なものに介入して、自分に都合が良いように改竄する。そんな力だな、端的に言えば」
「……む、むずかしい……です」
「だろうな」
頭を抱える桜の頭頂部に手を乗せ、彼はポンポンと少女の頭を軽く叩いた。
「今はぼんやりと、そういうものだと認識すれば良い。小娘の年ならそれで十分過ぎるくらいだ」

「は、はい」
「で、次は私が持つもう一つの架空元素『無』についてだ。これは虚と対照的に有り得ないが物質界にあるものなのだが……」
ネフレン＝カはそこで区切り、長く溜めた後に、ぼそりと呟く。
「正直、私にもよく分からん」
「……え？」
思わぬ暴露に、桜は顎を落とした。
まじまじと彼の整った顔を見続けていると、ネフレン＝カは弁解する。
「いや、私の周りに架空元素持ちなんぞいなかったからな。独学なのだ、私の魔術は。架空元素についての認識も独自のものでな。だから、私の見解が合っているのか定かではない。確認取ろうにも、属性が属性だから分かる奴がおらんし。下手な奴にこのことバラすと、即実験台か標本送りだから迂闊に言えんし」
それを聞いて、あぁなるほどと桜は頷く。
桜は話に聞いただけだが、架空元素というのは相当に珍しいものだという。姉の凛は基本一つだけ備える属性を、五大元素全て持っている。それだけでも十分珍しいが、桜の架空元素・虚はそれを凌ぐものだった。
父時臣が間桐家に桜を養子に出したのも、その稀有な属性が遠坂の魔術とは合わな過ぎたためだと義父の鶴野が臓硯から聞いたらしい。らしいというのは、ネフレン＝カが鶴野をとっ捕まえてそのことを聞き出したためである。
ちなみに聞き出された鶴野はやつれてゲッソリとしていたが、彼の顔色が悪いのはいつものことなので桜は別段気に留めなかった。
「そういうわけで、私が無の魔術を本格的に使うことは少ない。疲れるしな。普段は魔術の補助として、ショートカットに使用する程度だ」
「……？　ショート、カット？」
「言葉通り省略するのだ。とりあえず見ていろ」
首を傾げる桜にそう告げると、彼はまた空間に手を入れた。取り出

したのはそう大きくはないが分厚い、四角形の鉄板だ。掌に収まるサイズだが、指三本分を並べたくらいの厚さがある。
青年はそれをテーブルから少し離れた場所に置く。置いた板の周辺に、何かの魔術を施す。それからテーブルへと戻る。
「飛ぶだろう破片を防ぐために結界を張った。では、やるぞ」
言いながら彼は人差し指と親指を立て、銃に見立てた指先を鉄板に向けた。
その途端、鉄板が砕ける。
驚いて、桜はグラスを落としそうになった。
「え!?」
「今のが、魔術のショートカットだ」
何が起きたか分からず目を丸くする桜に、ネフレン＝カは砕けた鉄の破片を拾いながら告げる。
「先ほど使ったのはガンドという、北欧に伝わる初級魔術だ。私の本来の系統魔術ではないが、これくらいなら出来る。ガンドは体調を崩す程度だが、術者の力が強ければ物理的破壊力を持ち、フィンの一撃と呼ばれる」
「す、すごい……。あんなこと、出来ちゃうんだ……」
「いや、少し違う」
「え？」
首を振る彼を、桜はきょとんと目を瞬かせながら見上げる。
「魔術には結果に繋がるまでの過程がある。ガンドなら対象を指で定め、魔術を行使し、発動させてダメージを与える。この一連の動作と、それが終わるまでの消費時間があるわけだ」
砕けた鉄片を収納し、グラスを手に取り呷った後、ネフレン＝カは続ける。
「私は、その過程の一部を省いた」
「過程を……省く」
「必要となる動作を『無』視して、結果のみを発現させたのだ。煩わしい手間を省き、望む結果だけ具象化したわけだ」
「それが、架空元素の……無の特性なんですか？」

「他にもあるぞ。己と敵を分断する壁を無視し、壁越しの敵を攻撃する。サーヴァントの核部分に直接ダメージを与える。あとはそうだな……虚と組み合わせて使えば、『起源』という本質の効果を一時的に無効化することも可能だ」

それを聞き、桜は先ほど以上に衝撃を受けた。

虚もかなりのものだったが、無はそれ以上に特異的な属性だ。

「魔法には至らないが、魔術から逸脱した効果を発揮する。奇跡に近い偶然的現象を呼び寄せ、引き起こす――――それが私の見解における無の特性だ」

あまり好きな属性ではないが、これのおかげで何度も命拾いした。と、彼は空になったグラスに紅茶を注ぎ直しながら呟く。

「とはいえ、こちらの架空元素は小娘には関係ない話だ。お前の属性は虚の方だからな。今回は下地作りを兼ねて、修行の初歩をするぞ」

「……しゅ、ぎょう」

彼の口から出た単語に、桜は青褪める。

――――思い出すのは、暗くて冷たい蟲蔵の中。

養子に出されてすぐ、桜はあの中に放り込まれた。扉は閉ざされ、外界から隔絶された蔵。その中では醜悪な蟲、蟲、蟲の群れ。キチキチ、キィキィと響く耳障りな鳴き声。ガチャガチャ、グチャグチャと嫌悪感を与える音を奏でながら這い寄って来る異形の蟲たち。

桜はそれに襲われ、犯された。

泣いても叫んでも、誰も助けてくれない。家族の名を呼んでも、誰も来てくれない。辛い、痛い、苦しい。どうして、なんで。そんな感情で溢れ、埋め尽くされても、桜の前には光も希望も降り注ぐことはなかった。

毎日蟲に嬲られれば、次第に慣れて――――諦めるようになった。

だって、誰も助けてはくれないから。

だって、誰も救ってはくれないから。

だったら、少しでも苦しまないようにしよう。

感情なんて邪魔なもの放り捨てて、楽になろう。

そうすれば、痛くない。苦しくない。辛くない。……平気になる。

だけど、そこから解放されて数日経ったら……駄目だ。もう無理だ。怖い。辛い。体が震える。目の前が真っ暗になる。頭の中が纏まらない。もう無理。もう嫌。あんなのは、あんな思いはもう堪えられない――――……。

「おい、落ち着け」

肩を叩かれた。

小さな桜が痛くないよう、軽くだ。

目の前には、仏頂面だけど、とても綺麗な男の人がいた。肌は赤茶で、長い髪は黒い。異国情緒のある、民族っぽさを取り入れたカジュアルな服装だ。彼は大きいがほっそりした印象の掌に紫色の、指先ほどの大きさの石を持っていた。

彼は、ネフレン＝カは手の上の石を桜の手に移すと、手を重ねて石を握り込ませる。

「小娘、これに魔力を込めろ」

「……これ……って、どれ……？」

「今お前に握らせている石、アメジストだ」

「アメ、ジ、スト」

「宝石でなく天然石の方だがな。ほら、魔術回路を開いて魔力を石に注げ」

「ど、やって」

「イメージすれば良い。回路を開くのは前にやっただろう？　奥歯を噛んで合わせるのが、お前の魔術回路の開き方だった。あれを思い出すんだ。それから、自分の持っている魔力を石へと移せ。イメージは花に水をやるようでも、カップに茶を淹れるのでも良い」

一つ一つ聞きながら、桜は言われた通りに自分の魔力を天然石に注ぐ。

「よし、出来たな。ならその魔力を引き出せ。石の中にある魔力をかき混ぜるようにしてから自分の体に戻し、それを全身に送ってみろ」

「ま、混ぜて……戻して、送る？」

「出来ないと思うな、出来ると信じろ。落ち着いてやれば出来る。アメジストは心を癒し、落ち着かせる作用のある石だ。問題ない、出来

る。信じろ」
落ち着かせる、落ち着かせる。不安定になった心を……落ち着かせる。
信じる。信じる。信じる。大丈夫、出来る。出来る。きっと。いやきっとじゃない、絶対に。出来る。
深呼吸を繰り返し、石を強く握り込みながら、桜はアメジストから引き出した魔力を体内で循環させた。一回、二回、三回……。そうすると、本当にだんだん心が穏やかになった。恐怖で波打っていた内心が、落ち着きを取り戻した。
「は、ぁ……はぁ……っ。で、出来た？」
「あぁ、出来たぞ」
初めてにしては上手い、とネフレン＝カは桜の頭を撫でた。不機嫌な、冷たい表情とは違う、優しい手つきだった。
「い、今のが……修行ですか？」
「そうだ。宝石魔術の亜種で、天然石を用いて行う。虚属性には、そちらの方が相性良いからな」
「宝石……」
ぽつりと呟いて思い浮かべるのは、余裕ある紳士然とした時臣の顔。魔術については教わっていない桜だだ、父の部屋には宝石が沢山あるのを覚えている。
「お父様……」
「ん？」
「お父様は宝石、沢山持ってたの」
「ほぉ、遠坂家は宝石魔術を主にしているのか」
燃費の悪い家だな、と青年は顎に指を添えながらぼやく。
「宝石魔術は強力だが、コストが掛かる。宝石自体高いからな。しかも一回使えば灰になるから、基本は使い捨てだ。金がかさむ」
「使い捨て？　あれ、でも」
首を傾げながら、桜は掌のアメジストを見つめた。
アメジストは先ほどよりも少し、色と輝きが鈍っている。けど、灰になったりはしていない。

「それは魔力を引き出しただけだからだ。宝石魔力は宝石に宿る力を使えば使い物にならなくなるが、貯めた魔力を引き出すだけなら問題ない。まぁ、今回は魔力と一緒に力も引き出したがな」
「力を引き出したなら、どうして壊れていないんですか？」
「虚ならではの特性だな。宝石は宿る力を解放するとき、力を閉じ込める器を破壊しないといけない。だから力を使用した後、石は灰になる。だが虚属性を持つ者なら、全部使い切ることになる力を小出しに引き出せる。有り得るが物質界にない物を操るのが、虚属性だからな」
「そうなんだ……」
「その分、威力は宝石魔術を使う者の魔術に劣るがな。それに力を引き出せる回数にも限度がある。この天然石なら、あと二回か三回が限度だ。宝石なら引き出せる回数は増えるが、それでもこれと同じ大きさでは十回程度か」
　そう語りながら、ネフレン＝カは小粒のアメジストを摘み上げる。
「まぁ、そこらへんは気にせずとも良い。我々が必要とする石は、宝石ではなく天然石だからな」
「天然石だと、どうして好都合なんですか？」
「天然石は現代ではパワーストーンと呼ばれているだろう。石に特殊な力が宿っていて、持ち主に様々な恩恵を与えてくれる。そう信じられている。英霊のように、天然石にも伝承があるわけだ」
「効果や、伝承……」
「人が勝手につけたものだがな。だが我々は、その力を信じて使用するのだ」
「信じる？」
「現代にはプラシーボ効果と呼ばれるものがある。実際に効果がなくても、信じ込めばその効能が身体に現れる。天然石の効能はそれと同じ。そして虚属性はそれを信じることで、プラシーボ効果を本物の効能に変える。信じなければ、効果も何もあったものではないがな」
「……『諦めれば可能性は零に帰す』……？」
「そういうことだ」

前に彼が言っていたことを引用すると、青年は頷き返した。
「初めはこれらを用いて、下地を作る。少しでも触れておくと良い。最初は不安だろうが、何度も繰り返せばコツを覚える。基礎の修練はそれからだ」
彼はアメジストを桜に握らせ、彼女に教える。
「いいか小娘。我々が操る架空元素はな、不安定なんだ。五大元素を扱う者たちより感情面に左右される。だからきちんと制御しないといけない。ちゃんとした形、存在を作れないものを我々が意志を持って安定させなければいけない」
「だから、信じる……？」
「その通りだ」
彼は頷きながら、桜の肩に手を置いた。
「こんな使ってる側が不安になるような力だがな――――だからこそ、使い手である我々側が信じてやらねばいかんのだ。しっかりと制御しなければいけない。使えるかどうか不安になりながら怖々扱っていたら、成功するものも成功しなくなる。だから諦めず、信じ続けなければいけないんだ。自分に一生寄り添い続ける力だからな」
出来るか？　と、彼は桜に尋ねた。
桜は答える。
「はい……っ。怖いけど、でも、だからちゃんと使えるようにします。……誤って、大事な人、傷つけたりしないように」
「よく言った。なら、修行を続けるぞ。昼餉までするからな。最初は単調だから途中で飽きそうになるかもしれんが、気を緩めるな。油断した時が一番危険だからな。魔術に限らず」
「はいっ！」
元気良く返事をして、桜は小さな天然石を大事そうに握り締めた。

019

時間と所変わって遠坂邸、こちらではキャスターコンビと優雅＋神父による鬼ごっこが繰り広げられていた。
現在廊下の床は、神父と子供――――言峰綺礼とキャスターにより幾度と踏みつけられている。
「あはは～、鬼さんこちらっ手の鳴る方へー！」
ケタケタと笑い、手拍子と共に逃げるキャスター。長ったらしい髪とひらひらした衣装の割に随分な足の速さだと、言峰は顔に出さず思う。
しかもだ、
「……ふっ！」
「おっとぉ！」
心臓、足、頭部を狙い投擲した黒鍵を、前方へ向かい回転しながらキャスターは避ける。先ほどから、魔術の類を使っている様子はない。
と思っていたら、
「とぉっ！」
獣が如く床に手足を付けると共に――――逆行。勢いよく高速で連続後転しながら、綺礼目掛け突貫してくる。
思わず横飛びで回避する。その後キャスターはぴょんと跳ね荒ぶる鷹のポーズで着地すると、そのまま廊下の端を曲がり、こちらの視界から姿を消した。
やられた、そう思った綺礼の口から舌打ちが零れる。
今のは『攻撃』ではない。単なる『御ふざけ』だ。それに翻弄され、綺礼はたった今、奴に逃げ道を与えてしまったのである。
先ほどからこんな調子だ。あの子供、分かり切っていたことだがトリッキー過ぎるのだ。行動がまるで読めない。
しかしすぐ気持ちを切り替え、逃げたキャスターを追跡する。
だが子供の姿は既にない。一秒も満たぬ速度で別の所へ移動したらしい。なんともおそろしき行動力とフットワークである。

それでも駆ける。広い屋敷のどこかにいるキャスターを捕らえるべく。

「やはりこちらを追ったのは正解だったな」

綺礼の口からそんな言葉が漏れる。

かつて代行者として幾多の敵を追い、抹殺した彼でさえ、既に五度も奴を見失っているのだ。サーヴァントとはいえ、標的と定めた相手を。

これが時臣ならばとっくの昔にキャスターに撒かれ、屋敷中を死に物狂いで探す羽目になっていたことだろう。……かといって、アサシンの尾行を撒き切った龍之介が楽かといえばそうでもないのだが。

だがそれは問題ではない。問題なのはキャスター側が定めた制限時間が、既に半分を切っていることだ。

果たして時間内に捕らえられるか。

心の中をそんな思いに支配されながら彼の子供を探す綺礼も、いつのまにやら鬼ごっこに夢中となっていた。

◇◇◇

対して、時臣もまた龍之介を必死に追いかけていた。

若々しくフットワークの良い青年を、彼は必至で追いかける。そこに普段の優雅たれ、という在り方は既にない。優雅はＹＵ☆Ｕ☆ＧＡ☆と化している。

それはさもありなんというべきか。遠坂時臣は典型的な魔術師であり、その上得意とする属性が火だ。我が家であり拠点たる遠坂邸で、火の魔術など使えるはずもない。使ったら燃える。

そもそもこの二人、あらゆる意味で相性が最悪なのだ。

片や火属性、片や水属性。

片や魔術師、片や魔術師殺し。

片や堅物、片や奔放。

片や中年、片や青年。

属性的にも性格的にも、ついでに言えば体力的にも、時臣が龍之介に勝てる部分がないのである。

「ぜぇ……はぁ……ぜぇー……はぁー……」

「おじさん、おじさーん？　ねぇちょっと、だいじょぶ？」
扱いの難しい低空飛行は鬼ごっこを始めてすぐに止める他なく、自らの足で殺人鬼を追いかけていた時臣は、生き絶え絶えだ。逃げる側である龍之介が思わず足を止め、振り向いて伺い立てるくらいに。
「な、なんでも……ない、さ。この程度」
それでもぎこちなく微笑み、汗びっしょりの顔で龍之介を見やる。
彼は汗一つ掻いてない、全く余裕の顔だった。
「えー？　でも、ホントに大丈夫？　最初の方ぷかぷか浮いてたけど、あれでも曲がる時とか壁にぶつかってたりしたじゃん」
そう、それこそが時臣が低空飛行を止めた理由である。
龍之介があんまりにも細かく動き回るので、その動きに応じきれずあちこちに体を打ち付けてしまうのだ。
飛行系の魔術とはそもそも、広い屋外で使用することを前提に置いた魔術だ。調度品や壁が多い室内飛びは非常に危険極まりないのである。
「ふっ……何、この程度。なんてことはないさ、今は……そう、少し、少しばかり休憩を取ってるだけだよ」
しかしそれでも家訓、優雅たれは忘れない。汗で顔に張り付く髪を掻き上げながら、時臣は龍之介にそう告げた。
それを受けた龍之介は、
「そっか。じゃあ、そろそろペース上げよっか」
残酷な言葉を投げかける。
踵を返した彼は、力強く床を蹴った。――――途端、先ほど以上の速度で疾駆し、階段を飛び降りて、忽然と姿を消す。
「……」
置いてきぼりにされた時臣は、ぶっちゃけ、絶望した。
◇◇◇
「んー、もう時間がちょっとだけになったね」
と、キャスターは時計を確認しながら呟く。
「そろそろ『出来上がる』頃だし、龍之介や彼と一緒に部屋に居ようかな」

呟いた後、子供は事前準備した部屋を目指し、トコトコと歩いて行った。

◇◇◇

タイムリミットは既に五分を切っていた。

「綺礼、確かに此処なのだね？」

「ええ。アサシンに聞いた話では、連中はこの部屋に篭っているそうです」

ヒソヒソと、扉の前で二人は話す。

しかしなんと無残な姿か。二人の衣服は汗を吸いぐっしょりと濡れていた。髪も顔に張り付き、ボリュームが何割か減ってしまっている。

しかし向かい合った顔は、疲労の色こそ帯びながらも真剣そのものだ。鬼気迫るその顔を見た者は、誰しもが息を呑んだことだろう。――やってることが鬼ごっことさえ知らなければ。

「時臣師、私が部屋に突撃し奇襲を掛けます。そこに追い打ちを駆ける形で魔術を使ってください」

「そう、だね。……あんな奇天烈な陣営を御せるのならば、部屋一つくらいは安い物だ」

時臣も腹を括った。手に提げた杖をきつく握りしめ、綺礼同様に耳を澄ませる。

扉の向こうでは賑やかな話し声がしている。こちらは散々必死に追いかけたというのに、向こうは完全に楽しんでいる様子だ。まだ本気を出していなかったのだろう。もう時間が少ないというのもあるかもしれない。

随分と余裕たっぷりだ――――そこを狙う。

どんな生き物であれ、余裕が、慢心がある時こそが好機なのである。窮鼠に噛まれた猫のように、悠然としている時は、攻め入る隙がある。

残り時間は一分を切った。今こそが最後にして最大のチャンスだ。

綺礼は時臣にアイコンタクトを取り、そうして話が最大に盛り上がっている時を狙って扉を蹴破り、全速で室内へと侵入した。

――――途端、ずっこけた。

「綺礼!?」
突如すっころんだ弟子を前に、魔術の師匠が素っ頓狂な声を上げる。
一体何が起きたのか。急いで起きあがろうとした綺礼は、名状しがたく恐ろしい部屋の実情に、声なき叫びを上げる。
あぁ、なんてことだろう！
バナナが！　バナナが！
床一面に、バナナの皮が!!
声だけでは気づけなかった、悪魔的トラップの存在に二人は愕然とする。
そこに、急襲を返り討ちにした悪魔たちが何かを振りかぶる。
「その顔目掛けてぇ！」
「スパァキィィィィィング!!」
陽気な声と共に、顔面へと叩き付けられたのはクリームパイだ。
最初から持っていたというのか。そのパイは避ける間もなく直撃し、綺礼と時臣の顔を甘くドロドロとしたクリームに沈める。
静寂に包まれた空間。
それを我先にと破ったのは、ボタリと落ちたパイが立てる間抜けた音。
顔中クリーム塗れで、指一つ動かせず呆然とする他ない二人。
それを見たキャスターと、龍之介と、アーチャーの笑い声が一斉に上がる。
そうして鳴った三時を継げる時計の音は、タイムアウトの宣告でもあった。

０２０

時計が三時を指し示した後、
「とりあえず、その顔に付いたのと床に落ちたのは食べてね」
ゲームの勝者たるキャスターはニッコリと笑いながら、敗者二人に告げた。

……まぁ、どんな結果であろうと負けは負け。敗者が勝者に文句を言うことは出来ない。というか、このキャスターは絶対に言わせない。
そうして黙々と、己の顔に付着したクリームと、幸運にもトレイを下にして落ちたパイとを完食した綺礼と時臣。師弟は部屋の中央に置かれた物に注目する。
真っ白なテーブルクロスを被った食卓、その上に広げられているのは甘く芳醇な香りを漂わせる菓子の数々だ。
しっとりと焼き上げられた素朴なケーキに、チョコとクルミを混ぜたマフィン。カリカリに焼き上げられたクッキーと、メレンゲでふわふわに仕上げられたシフォンケーキ、食べやすい一口大サイズのプチパイ、砕いたアーモンドを纏わせカラリと上げたフライ、小さく切って砂糖をまぶし炒めたスイートソテー。大きなタルトには甘いココナッツクリームが敷き詰められ、ココット型に注ぎ込まれたプディングがカラメル色の焼き目をこちらへ披露している。
多種多様な甘味の数々が遠坂邸の一室、そのテーブルの上で鎮座している。一件すると無差別に、衝動的に作ったと思うような菓子だが、一つだけ共通している物があった。
――――バナナだ。
どれもがこれもが、個々に差はあれどバナナの香りを立ち上らせている。
この匂い、湯気……間違いない。ついさっき焼き上がったばかりだ。
ということはもしや、

「昨日、バナナが安売りしててさー」
ははははっと軽い調子で笑い声を立てながら、背後のキャスター陣営が言う。
その発言で綺礼は確信した。
なんてことだろう、この悪魔ども。人様の家に不法侵入して罠を設置したばかりか、台所を無断拝借しお菓子作りに興じていたのである。般若の面を作っていただけにしても、時臣の部屋に来るまで時間が掛かったのに疑問を抱いていたのだが、成程。そういうことなら頷ける。
もしや制限時間を午後三時に定めたのも、出来立ての菓子を食べるためか。
そして菓子に使ったバナナの残骸を床に敷き詰め、簡易トラップに。綺礼は間抜けにも、子供の悪戯じみた罠に見事引っかかったというわけだ。
ちなみにクリームパイは熱々ではなかったので、事前に完成品を持ってきていたのだろう。いくら何でも出来立てのパイは顔に喰らいたくない。
「あと英雄王は、お菓子作ってる途中で来られました」
「バナナ足りなくなって買いに行こうとしたらさ、くれたんだよ」
その言葉にアーチャーへと二人が視線を向けると、かの王は傲慢な笑みを浮かべ胸を張り答える。
「我が『王の財宝』は全ての原典を納めている。武器、防具はもちろん酒、玩具の類……無論バナナとてあるわ！」
この英雄王、よりにもよって敵に手を貸したのか。
「ではでは、英雄王からどうぞ」
「どうぞー」
「ふん……王たる者が食うには少々似つかわしくない菓子もあるが……。幼心に帰り、汗だくで駆け回った貴様らに免じ食してやろうではないか」
「寛大なお心感謝します」
「ありがたやー」

しかも綺礼たちの鬼ごっこをどこぞから見ていたらしい。
「いやー、それにしても楽しかったねー」
「そうだな師匠。次はどこの陣営と遊ぼうか？」
「うーん、セイバー陣営とかライダー陣営とか面白そうだけどなぁ。けどどこも捨てがたいし……他にも準備しないといけないことがあるからねぇ」
と、次は誰を餌食にするか相談しながら自作の菓子を頬張る悪魔二人。
綺礼たちも菓子は勧められたが、遠慮した。かなりきっぱりと拒否したのだが見た限りどちらも気にした様子がない。
……いや、違う。
キャスターはニヤニヤ笑っている。なぜ笑っているのかというと、理由は綺礼の魔術の師、時臣である。敵陣営二人を目にしても何のアクションにも出ず、むしろ彼らを歓迎するかのようなアーチャーに冷や汗を浮かべているのを、面白がっている。
成程。この二人が遠坂邸をわざわざ選んだ理由が分かった。彼らは今までいた陣営で最もダメージが少ない、慢心の多いアーチャー陣営にプレッシャーを掛けにきたのだ。それもマスターとサーヴァント、両者の関係に亀裂を入れる形になるように。
やはり侮れない子供だ。警戒心を強めながらも、心のどこかになんとも言えぬ感情が湧く。
それに戸惑いながら、オーロラ色の後ろ姿を見つめ続けた。
◇◇◇
「楽しかったなー、師匠」
「そうだねー」
遠坂邸を後にし、公園で残りのケーキを頬張りながら二人は呟く。
「ところでスケッチの方はどう？」
「ばっちりだよ。ほら」
クッキーを口端に咥えた問えば、龍之介が小振りなスケッチブックを掲げて見せる。
端的に言えば、勝敗自体はどうでも良かった。

あの鬼ごっこは文字通り、ただの遊びだ。別段負けたって構わない。負けたら負けたで、令呪を移し替える際に相手方の魔術回路にハッキングを仕掛けるだけだ。気づかれるまでは魔力の食い扶持にさせてもらうし、気づかれた場合は魔力を逆流させて暴発させれば良い。

キャスターの大方の目的は、単純に遠坂邸の見取り図を作ることである。

「さて、これをあげたら何人飛びついてくれるかなー？」

と、龍之介が描いた見取り図を眺めながら呟いてみる。

「んー……後半戦までを考えたら、一人か二人じゃねーの？　魔術師の工房には普通、入りたがらないもんなんだろ？　同盟組もうって考えそうなの、そんなにいないだろうし」

「まぁそうなんだけどね。でも、危険と分かったうえでも、来てくれる人いるかもなんだよねー」

――なぁんか、あの子がついて来た感じがするし。

ふふ、と瞳を艶美に細めながらキャスターは脳裏に彼の姿を浮かべる。

母からは売られそうになり、属性の希少性から日々狙われ、そして異端だと拒絶され続けた青年。どれだけ努力しても最後は認められず、絶望のまま滅びた都市へ向かい、命絶とうとするも結局死にきれなかった男。

彼を見つけた瞬間だ。化身などというものを生み出そうと考えたのは。

人間を『自分』に変えるつもりは当初なかったが、今はそうして正解だったと思う。非道な運命を強いられてもまだ純粋に、無垢に、何も憎まずにいようとする者を、復讐者以上の化け物にし、破滅するまで眺めるのは存外面白かった。

しかも、それでもまだ慕ってくれているのだから愉快である。その慕う相手もまた、自分を歪め、壊し、穢した存在だというのに。

「ほんと僕って、純粋で綺麗な子とつくづく縁があるってことかなぁ」

「んー？」

「ふふ、なんでもないよ。ただ、夜が楽しみだなって」
英雄王からの貰い物の蜂蜜酒を弄びながら、首を傾げるマスターに言う。
正直言えば、これを渡された時にはヒヤリとした。まだ遠坂時臣らには伝えていないだろうが、どうやら、こちらの正体に目星をつけ揺さぶりをかけてきている。やはりあの男は侮れない。
だがそれもまた良しだ。
高見の見物は、聖杯戦争に加担する前から既にし飽きた。なら思いっきり関与して、掻きまわしていきたい。そのために龍之介というマスターが露呈することを覚悟で、白昼堂々と一陣営の前に姿を出し、半端に情報をばら撒いたのだ。
さて、現状で警戒すべきはガイアの意志から生み出された英雄王と、直感で真名に勘付き対策しかねない征服王、『全て遠き理想郷』という面倒な防御壁を持つ騎士王だろうか。バーサーカー陣営がこちらを襲撃する可能性は低いし、アサシンなどは自己保身もあって接触してこようとは思う間い。
最も食い掛かってきそうなランサー陣営への対策は既に構築済みだ。それにおそらくだが、今夜あたりに彼が動いてディルムット・オディナに攻めかかる。
「あぁ、本当……楽しみだ」
呟きながら、口端を避けるように釣り上げて、キャスターは嗤う。
荊の冠を与えられた磔刑の男。
魔女と呼ばれ火炙りにされた聖女。
綺麗なモノを穢すのはなんとも背徳的で、それでいて優越感に浸される。
「さぁ、いつまで綺麗でいられるのかな……？」
クツクツと嗤いながら、キャスターは壊れやすそうな、壊し甲斐のありそうな今回の玩具たちを思い浮かべる。
彼らが壊れていく瞬間が、本当に楽しみだ。